

平成6年度

「信大YOU遊サタデー」の実践

—体験的学習の指導による実践的力の形成—

(平成6年9月10日・10月8日・11月12日)

信州大学附属図書館



0770670552

信州大学教育学部
附属教育実践研究指導センター

3
9

まえがき

漆 戸 邦 夫

生涯学習社会・高度情報化社会の到来とともに、国民の教育要求の高度化・個性化・多様化傾向が顕著になっている。来るべき21世紀の教員養成大学・学部には、こうした個人や社会の多様なニーズに柔軟且つ効果的に対応し得る高度の専門的学識と豊かな人間性及び柔軟な実践的指導力を備えた教育者の養成が期待されている。

このためには、大学・学部の教育研究機能の真の活性化・個性化が図られなければならないが、とりわけ、現実の学校教育現場をめぐる様々な問題を考えるとき、教師の教育実践力の向上は重要な課題である。

本学の学生は、3年次に附属学校園で6週間の初等及び中等教育実習を行い教育臨床経験を積んでいる。教育学部に4年間在学して児童・生徒と接するのは基本的にはこの6週間のみである。そのため附属学校園教官や子供たちから教師としてのものの見方や考え方等を学び、専門職としての資質や能力を高める唯一の機会となっている。

6週間の教育実習を終えた学生から、実習の経験を別の形で試してみたいあるいは大学時代にもっと子供たちと触れ合う機会がほしいといった切実な声が聞かれる。この思いが、本センターの土井進専任教官の指導により、実を結んで子ども達と学生の触れ合いの教育実践活動の場、「信大YOU遊サタデー」が誕生した。学校週5日制で休みになる土曜日に、地域の子供たちを大学のキャンパスに招き、学校でも塾でもできない体験学習教室を学生が指導者となって開くというもので、平成6年度は3回行い、参加した子供たちは延べ544名、指導にあたった学生は延べ152名に達した。やる気のある学生の自主的な参加の輪がどんどん広がって大きな企画となったもので、日頃の大学の授業のような単位とか成績などとは無縁なところにも大きな特徴がある。平成7年度の実施計画も今進められている。

本冊子は平成6年度「信大YOU遊サタデー」の実施報告書である。

教師の卵である学生たちの教育実践力の向上に少しでもつながり、また、学校5日制時代の地域教育のあり方を考える機会にもなるのであれば幸いである。

(附属教育実践研究指導センター長)



受付風景



全体会風景



けん玉で遊ぼう



ビデオカメラに挑戦



たのしいえいごクラブ



やさしい木工教室



小麦粉ねんど・わりばし鉄砲



自分の音楽をつくろう



お弁当箱の袋づくり



みんなで書道をやろうか



クリスマスカード作り



はりがね工房



おやつパラダイス



自分のハンコを作ろうか



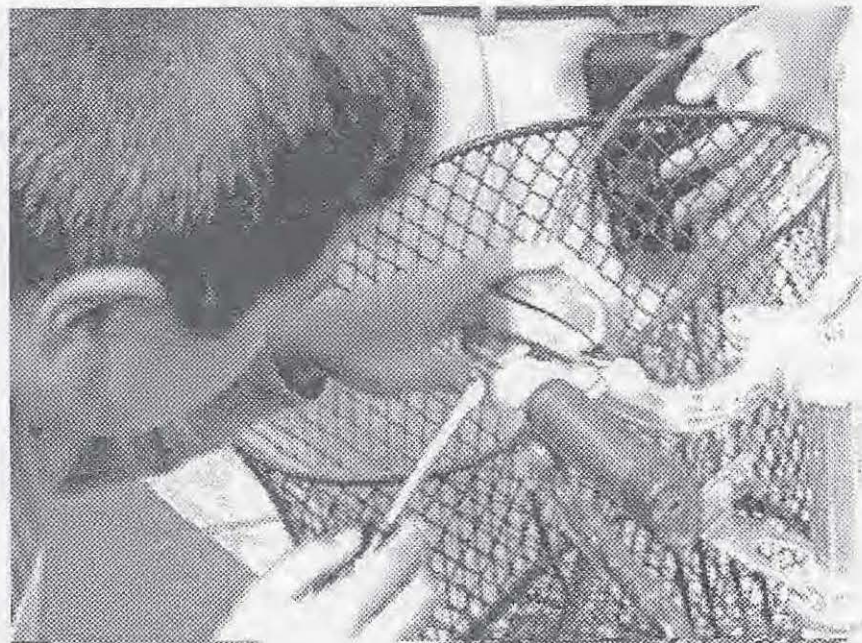
パソコンで遊ぼう



ソフトボール天国



宇宙生物 "スライム" をつくろう!



自転車大分解

1. 「信大YOU遊サタデー」のねらいと実践経過



第3回YOU遊サタデー前日ミーティング

「信大YOU遊サタデー」の概要

センター専任教官 土井 進

1. 動機

信州大学教育学部では、平成5年度から授業科目化された「教育実習事前・事後指導」（1単位）を実践センターが必修科目として開設することになった。平成5年度の教育実習終了後の事後指導において、教育実習経験から修得したことを様々な角度からアンケート調査した。その中で、「相互参加実習の期間が短かったので、もう少し実習を続けたかった」という声は何人もあり、教育実践経験を積むことへの強い要望があることがわかった。しかし、残念ながら本学部には自分の出身校などで更に応用実習をして教育実践研究を深めるといようなカリキュラムはない。そこで、学生達のこのような力量形成への真摯な願いに応えるには、子ども達に教育学部キャンパスに来てもらえばよいのではないか。そして、ここで学校教育の枠にとらわれない、思い切った教育実践を展開し、これからの学校教育を創造的に担って行く気概を育んでもらいたいと考えたのである

2. 責任体制

学部子ども達を迎えて教育活動をする以上、当然責任が生じてくる。センター会議ならびにセンター常任委員会で何度も検討していただいた上で、この企画の実施母体は実践センターであるので、機関としての責任はセンター長が負う。この企画の全体については、教育実践研究指導分野の専任教官が負う。また、学生が行う授業の内容については、学生が所属する研究室の指導教官の協力も得て指導案を見ていただくなど学部全体のご協力を得て実施する、ということになった。

3. 目的

ここまでの準備ができたところで、平成6年5月18日の「教育実習事前指導」において、次のような趣旨で体験的学習の指導を実践してみようではないかと呼びかけた。

- ① 信州大学教育学部の学生がもっている教育力を地域社会に開き、貢献することによって本学部と地域社会とのつながりを深める。
- ② 本学部には全校種、全教科に対応できる学生が学んでいる。その力量、持ち味を發揮し、子ども達を大学に迎えて公開授業を行うことによって、教育実践力の向上を図る。
- ③ 学生時代でなければできないようなユニークなアイデアによる“学び”や“遊び”の体験的学習の場を設定し、これからの学校五日制時代の教育について考える

④ 実施月日

第1回	9月10日（第2土曜日）	午前8時40分～午後3時40分
第2回	10月8日（第2土曜日）	“ ”
第3回	11月12日（第2土曜日）	午前9時00分～午後3時20分

これに対して、325名の受講学生のうち予想をはるかに上回る36名から応募があり、これを聞いた4年生や大学院生からも参加したいという申し出があった。これに勇気を得て、早速実行に移す運びとなった。

4. 実行委員会

山口直行君が実行委員長を買って出てくれて、平成6年6月6日に「信大YOU遊サタデー」実行委員会が発足した。この企画では子どもを直接指導する学生をキャプテンと呼び、キャプテンを助ける学生をスタッフと呼んでいる。これは学生達が教育実習における教師と生徒という関係を学部キャンパスに持ち込みたくない。学生という特質を十分に発揮して、お兄さん、お姉さんという立場で子ども達と関わり、子ども達の素顔にふれながら生きた教育実践を学びたいと考えたからである。キャプテンは、教育実習を終え子ども理解の基礎を修得した3年次生以上の学生がつとめることとし、スタッフには2年生も加わってもらうことにした。

次の学生達が実行委員会の三役に就き、以下のような日程で実行委員会が開かれ、事業が推進されていった。

実行委員長	山口直行 (数学4年)	副実行委員長	吉田亘志 (特殊教育学科3年)
事務局長	林向達 (教育学科4年)	//	田中 忍 (理科3年)

【実行委員会】

回	月日 (曜) 時間	協議内容
1	6/6 (月) 12:40~13:00	・実行委員会の組織づくり ・今後の日程
2	6/13 (月) 12:40~13:00	・正式名称の決定 ・スタッフの募集
3	7/19 (火) 16:00~18:00	・YOU遊サタデーの意義について ・プログラム内容の検討 ・教材準備
4	9/9 (金) 16:10~19:00	・参加人数の確認・指導案の最終点検・会場設営
5	9/10 (土) 16:00~19:00	・後片づけ ・第1回YOU遊サタデーの反省会
6	9/19 (月) 12:40~13:00	・準備日程の確認 ・指導案の提出 ・スタッフの協力体制 ・教材準備
7	10/7 (金) 16:10~19:00	・参加人数の確認・指導案の最終点検・会場設営
8	10/8 (土) 16:30~19:30	・後片づけ ・第2回YOU遊サタデーの反省会
9	10/24 (月) 12:40~13:00	・11月12日までの準備日程の確認 ・指導案の修正 ・スタッフの協力体制 ・教材準備
10	11/11 (金) 16:10~19:30	・参加人数の確認 ・指導案の最終点検 ・会場設営
11	11/12 (土) 16:30~19:30	・後片づけ ・第3回YOU遊サタデーの反省会 ・来年度への継続について

5. 学生による指導体制

体験的学習の講座名をタイトルと呼ぶことにし、一つのタイトルは、キャプテンとスタッフのチーム・ティーチングによって実践された。以下に3回実施されたYOU遊サタデーを担ったキャプテンとスタッフの一覧表を掲げることとする。

【第1回（9月10日）を担当したキャプテン・スタッフの組織】

〈開会式〉 8：50～9：00

〈閉会式〉 15：20～15：40

〈午前の授業〉 9：10～11：40

〈午後の授業〉 12：50～15：10

	タイトル	人数	キャプテン	スタッフ
1	スライム	19	田中忍（理3）	江川嘉乃（理3） 高原あづさ（理3） 林 哲也（理3） 高橋貴子（理2）
2	小麦粉	7	坂本真哉（理3） 奥原克水（国3）	岡部温樹（数4） 小嶋めぐみ（特3）
3	木工教室	7	片桐宏（技3）	加藤英樹（技3） 小林大士（技3） 齋藤啓二郎（技3） 油科健太郎（技3） 須田真信（技3） 高橋和幸（技3）
4	お弁当箱	1	横川瑞恵（家4）	
5	自転車	1	小倉敬（院1）	
6	ビデオカメラ	1	筒井和之（美4）	
7	英会話	18	渡辺一博（英4）	窪田美保（社3）
8	音楽	1	佐々木美紀子（国3） 花岡正次（国3）	
9	けん玉	2	山口直行（数4）	嶋田裕子（家2） 松永泰幸（数3）

合計 57名 学生26名（キャプテン11名、スタッフ15名）

【第2回（10月8日）を担当したキャプテン・スタッフの組織】

〈開会式〉 8：50～9：00

〈午前の授業〉 9：10～11：40

No	タイトル	人数	キャプテン	スタッフ
1	ハンコ	2	喜多篤史（社4）	
2	おやつ	29	吉田亘志（特3） 井上清美（家3） 佐藤恵理（家3）	片山律子（家4） 市村忠寛（英3）
3	けん玉①	13	山口直行（数4）	嶋田裕子（家2）
4	小麦粉	22	坂本真哉（理3）	加藤幸一・岡部温樹・片田保幸（数4） 数井嘉彦（人文学部3年）

5	消しゴム	29	田中 忍 (理3)	高原あづさ (理3) 大谷美穂 (理3) 林 哲也 (理3) 峰村佳代子 (数4) 田中清一 (社3)
6	えいご	16	渡辺一博 (英4)	橋詰並子 (英3)
7	自転車	18	小倉 敬 (院1)	渡辺佳子 (教4) 宮尾由美 (音4) 渡辺一博 (英4) 橋詰並子 (英3)
8	パソコン	17	山崎重幸 (美3)	竹川紀幸・東紀江 (美3) 宮田明 (技4)
9	ビデオカメラ	1	筒井和之 (美4)	

〈午後の授業〉 12:50~15:10

〈閉会式〉 15:20~15:40

10	書道	14	岡野 啓 (国4) 松橋博行 (国3)	村田道代・高野明子・雨宮志保 (国2) 塩苅有紀 (国2) 佐藤雅子 (国2) 高橋志津子 (国4) 山崎朱美 (国4)
11	ポストカード	20	中村典子 (美4) 澤田良子 (美4)	峰村佳代子 (数4) 山岸美香子 (美4)
12	けん玉②	17	山口直行 (数4)	高原あづさ (理3) 坂本真哉 (理3)
13	音楽	3	佐々木美紀子 (国3) 花岡正次 (国3)	
14	ソフトボール	11	林 哲也 (理3)	中川喜夫 (数3) 高浜正裕 (工学部3)
15	教育学部	1	宮澤弘至 (院1)	横川瑞恵 (家4)

合計 213名 学生51名 (キャプテン20名 スタッフ31名)

〈本部スタッフ〉

午 前		午 後	
スタッフ長	横川瑞恵 (家4)	スタッフ長	横川瑞恵 (家4)
受付係	高原あづさ (理3) 峰村佳代子 (数4) (家 中村典子 (美4) 嶋田裕子 2)	受付係	峰村佳代子 (数4) 渡辺一博 (英4) 橋詰並子 (英3)
誘導係	宮尾由美 (音4) 渡辺佳子 (教4) 竹川紀幸 (美3) 東 紀江 (美3)	誘導係	宮尾由美 (音4) 渡辺佳子 (教4) 坂本真哉 (理3)
駐車係	加藤幸一・岡部温樹 (数4)	駐車係	加藤幸一 (数4)
写真・記録	筒井和之 (美4)	写真・記録	田中 忍 (理3)
接待係	澤田良子・山岸美香子 (美4)	接待係	大谷美穂 (理3) 澤田良子 (美4) 吉田亘志 (特3)

【第3回（11月12日）を担当したキャプテン・スタッフの組織】

〈午前の講座〉 9:40～11:40

〈開会式〉 9:10～9:30

No	タイトル	人数	キャプテン	スタッフ
1	ハンコ	9	岡野 啓 (国4)	山崎朱美(国4) 高橋志津子(国4) 溝江藤子(国3) 西澤慶子(国3) 松橋博行(国3)
2	おやつ② (レアチ-ズケ-キ)	19	吉田亘志 (特3)	加納文香(家2) 田中清一(社3) 小坂和(社3) 原伸生(特3) 花岡朝美(英2) 野本 毅 (英3) 小泉二三江(心4)
3	写真	6	山崎重幸 (美3)	丹羽 則之 (技4)
4	けん玉②	21	山口直行 (数4)	嶋田 裕子 (家2) 片田 保幸 (数4) 加藤 幸一 (数4)
5	小麦粉A	17	坂本真哉 (理3)	佐藤 寛之 (理4) 森泉 哲 (英4)
6	小麦粉B	16	奥原克水 (国3)	高原あづさ (理3) 江川嘉乃 (理3) 数井嘉彦 (人文学部3年)
7	クリスマスカード作り	40	宮尾由美 (音4)	倉島 慈 (国2) 大谷 美穂 (理3) 山本 千絵 (家4) 綱島美恵子 (家4) 折山 好恵 (音4) 渡辺 佳子 (教4) 岡村 悦子 (幼4) 雨宮なるみ (幼3) 坂井 雅子 (幼3) 坂野 和久 (理4) 芦田 恵 (数2)
8	はりがね工房	14	小倉 敬 (院1)	福士慈(心2) 松永泰幸(数3) 谷根康弘(技4) 河崎直茂(国2) 峰村佳代子(数4) 斉藤恵美(数4) 服部珠予(英4) 塩田直人(社4)
9	ビデオ作り	0	筒井和之 (美4)	休講
10	壁画教室	12	竹川紀幸 (美3)	篠原香苗(美4) 井添純一郎(英4) 岩村彩(心3)

〈午後の講座〉 12:50～2:50

〈閉会式・成果の発表〉 2:55～3:20

11	みんなで書道	13	岡野 啓 (国4) 松橋博行 (国3)	村田道代(国2) 高野明子(国2) 塩苅有紀(国2) 山崎朱美(国4) 高橋志津子(国4) 西澤慶子(国3) 溝江 藤子(国3)
12	けん玉③	17	山口直行 (数4)	嶋田 裕子 (家2) 加藤 幸一 (数4) 片田 保幸 (数4) 松永 泰幸 (数3) 高原あづさ (理3) 井上 清美 (家3) 坂本 真哉 (理3)
13	自分の音	6	佐々木美紀子(国3)	斉藤 恵美 (数4) 岩村 彩 (心3)

	楽つくり		花岡正次 (国3)	
14	楽しいえいごクラブ	30	渡辺一博 (英4)	橋詰並子 (英3) 森泉 哲 (英4) 野本毅 (英3) 井添純一郎 (英4) 服部 珠予 (英4) 雨宮なるみ (幼3) 坂井 雅子 (幼3)
15	はりがね工房	14	小倉 敬 (院1)	福士 慈 (心2) 綱島美恵子 (家4) 宮尾由美 (音4) 峰村佳代子 (数4) 倉島 慈 (国2) 原 伸 生 (特3) 佐藤恵理 (家3)
16	ソフトボール天国	20	林 哲也 (理3)	小坂和 (社3) 坂野和久 (理4) 谷根康弘 (技4) 佐藤 寛之 (理4) 河崎 直茂 (国2) 山本 千絵 (家4)
17	教育学部	20	宮澤弘至 (院1)	小泉二三江 (心4) 篠原香苗 (美4) 下平順 (院1) 小松秀樹 (教3) 佐藤史郎 (院1) 北村史 (社3)

合計 274名 学生 75名 (キャプテン16名 スタッフ59名)

〈本部スタッフ〉

午 前 (8:00~9:20)		午 後 (12:20~12:40)	
スタッフ長	北村 史 (社3)	スタッフ長	北村 史
副スタッフ長	渡辺一博 田中 忍 (理3)	副スタッフ長	田中 忍 吉田 亘志
受付係	○峰村佳代子 花岡朝美 加納文香 芦田 恵 綱島美恵子 雨宮なるみ 坂井 雅子 嶋田 裕子 佐藤 恵理 井上 清美 斉藤 恵美 岡村 悦子 高原あづさ 橋詰 並子 折山 好恵 倉島 慈 江川 嘉乃 塩田 直人	受付係	○峰村佳代子 加納 文香 綱島美恵子 坂井 雅子 斉藤 恵美 高原あづさ 雨宮なるみ 芦田 恵 倉島 慈
誘導係	○佐藤寛之 森泉哲 岩村彩 坂野和久 渡辺佳子 藤田智子 山本千絵 松永 泰幸 原伸生 北山久美	誘導係	○佐藤寛之 岩村 彩 佐藤 恵理 井上清美 松永 泰幸 原 伸生 山本 千絵 北山久美
駐車係	○加藤幸一 丹羽則之 片 田保幸 河崎直茂 谷根 田 中 福士慈 小坂和 野本毅	駐車係	○加藤幸一 坂本真哉 片田 保幸 河崎直茂 谷根康弘 福士慈 小坂和 野本毅
写真記録係	○林 向達 角田 正和	写真記録係	○林 向達 山崎 重幸

接待係	○澤田 良子 大谷美穂 小泉二三江	接待係	○澤田 良子 大谷 美穂 嶋田 裕子 小泉二三江
会場整理係	○松橋 博行 村田 道代	高野 明子	佐藤 雅子
事前準備係	○片桐 宏 (技3) 喜多 篤史 (社4)		

6. 実施経費

参加費は無料としたが、おやつや木工教室などの材料費は200円～500円の範囲で実費を徴収した。教材作成に係る経費は、センター予算の教材作成経費で賄うこととした。3回のYOU遊サタデーを実施してかかった総経費は、163,264円であった。主な品目は次の通りであった。

名札、模造紙、マジック、白ボール紙、賞状用紙、マグネット、ケント紙、画用紙、筆ペン、鉛筆、色鉛筆、紙コップ、展示用スナップ写真入れ、クレヨン、はけ、ポスターカラー、ボンド、フィルム、8ミリビデオテープ、小学生用ソフトボール、ざら紙、小麦粉など。なお、この金額には各学校や育成会宛の郵送料も含まれている。

7. 学年別参加者数

YOU遊サタデーの参加者を学年別に分けると次のようであった。午前と午後に別の講座に参加した場合は2人として計算してあるので、延べ人数となっている。

	9月10日	10月8日	11月12日	合計
幼稚園	2	5	4	11
小学校1年	7	35	35	77
2年	6	44	47	97
3年	6	32	27	65
4年	22	42	74	138
5年	8	27	38	73
6年	4	20	16	40
中学生	0	4	0	4
高校生	0	1	20	21
一般成人	2	3	13	18
合計	57	213	274	544

8. 会場

YOU遊サタデーの本部席として図書館前にテントを一張り用意し、ここで受付を行うとともに、掲示板を出して参加者に情報提供を行った。開会式、閉会式は図書館の2階で行い、机を全部後ろに下げ椅子席を200名分用意した。S館では調理実習室、木工実習室、118、120の教室を使用した。N館では101、102、103、104、203、204、405、M館では401、そして第2音楽棟、グランド、実践センター全室を使用した。また、生協食堂が昼食場所、休憩場所となった。

信大Y O U遊サタデーが目指すもの

実行委員長 山口 直行(数学科4年)

1. 問われる教師の指導力

信州大学教育学部は、幼稚園・小学校・中学校・養護学校の教員養成機関であり、長野県の中心地長野市に存在している。これまでに、幾多のすばらしい先輩方がこの教育学部で学び、それぞれの教育現場において、この学び舎で培った力量を十分に発揮され活躍されていることは、今さら言うまでもない。後に続く我々にとってはこの上ない誇りである。

今日、社会においては教師の実践的指導力に対して厳しい目が向けられている。全国各地でいじめ問題がクローズアップされ、学校の在り方とともに教師の指導力に対しても社会から厳しい目が向けられるようになってきた。いじめ問題だけでなく、長野県においては、不登校の児童・生徒数が全国でも上位に位置することが報道され、教師に向けられる目がさらに一層厳しいものとなっている。

これから教師になり、間もなく学校現場が抱えているさまざまな問題を自己の問題として真剣に取り組んでいかなければならない我々学生にとっても、教師としての自己の力量をどのようにして形成していくかという問題は、真剣に考え、かつ実践していかなければならない課題である。

2. 実践的力量的形成の場

教師としての実践的指導力を身につけるにはどうすればよいのだろうか。そのためのカリキュラムが果たして信州大学に十分に用意されているのであろうか。これが、教育学部に学ぶ者としての率直な疑問であり、不満にも思ってきたことである。

我が信州大学教育学部では第3年次に、附属幼・小・中学校において6週間の教育実習が義務づけられている。6週間という期間は大変長いと思われる方もあろうが、大学生生活4年間、そのうち授業が行われている120週間の中で、子ども達と実際に接しながら教師としての実践的力量的の向上を図る時間が6週間しかないことは、とても少ないのではないかと私は考えている。子ども達と接する時間がこのように少ない中で、実践的指導力を十分に身につけることができるのであろうか。

このような教育学部の現状と問題点を解決するための一つの試みとして、我々は「信大Y O U遊サタデー」を行おうと決意した。9月、10月、11月の第2土曜日に「遊び」と「学び」を共有した体験学習の広場を教育学部キャンパスに創造することを目指すものである。これは子ども達に大学に来てもらい、初対面の子ども達を相手にして授業を行おうとするもので、いわば「応用教育実習」として位置づけられるものであった。

Y O U遊サタデーのキャプテンやスタッフとして活躍した仲間たちの間から、異口同音に「とても楽しかった」「とても勉強になった」という声が聞かれた。私も教師としての実践的力量的を磨く貴重な機会になったと実感している。やはり、実際に子どもが目の前に存在することで初めて真剣になり、その場に合った実践力が身に付いていくものと思われる。

3. 地域社会への貢献

我々教育学部に学ぶ者は、教員となる力量を磨いて大学卒業後にそれぞれの分野で貢献していくことが基本である。しかし、そこに学んでいる4年間を地域社会と全く遊離して過ごしてよいものだろうか。大学は、学問の自由が社会的に認められた場所であるが、それに甘んじて地域社会と没交渉でいたのでは、自ら閉鎖性を招くようなことにもなりかねない。我々は自分のできる範囲で積極的に地域社会に貢献することが大切ではなからうか。

学校は、今、完全5日制に向けて動いている。このような時代の土曜日の子ども達の受け皿として、子ども達がこれはおもしろそうだ、是非参加したいと思えるような内容の講座を開設すれば、きっと家庭教育への一助にもなるのではないかと考えた。果たせるかな、Y O U遊サタデーを開講するや子ども達だけでなく、お父さんやお母さん、おばあさんの参加もあり、土曜日のひとときを有意義に過ごしていただけたのではないと思われる。ただ9月、10月、11月の第2土曜日という極めて限られた回数の中での実施であり、地域に貢献できたととらえるには無理な面もあるが、我々の取り組みが地域の人々に受け入れられ、喜んでいただけたことはとてもうれしいことであった。我々は学生生活に安住し、与えられることだけの受け身な生き方を乗り越え、もっと積極的に地域社会に貢献していくことが大事であることがわかった。

「信大Y O U遊サタデー」の取り組みは、社会的にはボランティア活動としてとらえられがちであるが、この活動は決してボランティア活動ではないと考えている。これまで教育学部においてこのような活動があまり、見られなかったことに対して抱いていた疑問を具体化し、実行したまでのことである。

4. 今後の発展のために

今年のY O U遊サタデーは初めてだったということから、活動内容よりも活動したことそのものに大きな価値があった。最初はこのような活動がどの大学でも行われていなかったため、理解してもらえず参加者も少なかったが、3回実施することによってだんだんと家庭・学校・社会に理解されるようになったことはとてもうれしいことであった。

しかし、これからは、内容的に充実したものが問われてくることは間違いない。何といってもこれはやっておもしろい、夢中になれる、取り組む価値があると思われる体験的な学習の内容を設定していくことである。それとともに重要なことはY O U遊サタデーに取り組むキャプテンやスタッフが、教師となるための自己の力量形成への意欲、情熱を燃やすことであると思う。具体的にいえば、書物や大学の先生から得た知識をもとに自ら考察し、教育実践に対する自分なりの論理を導き出すことである。「こうすれば、子ども達がこのように変容するのではないか。」といった教育的視点をもって授業を構想し、それに基づいて実践することであると思う。学部で学んだ教育についての知識をもとに、自らの教育の論理を構築し、実践しながらさらに改善していくことは教師としての永遠のテーマでもある。思いつきや感情だけで子ども達を動かすことはできない。自ら構築した教育の論理に基づき、真剣に実践してはじめて子ども達の心に響いていくのではなからうか。与えられたものだけを確実にこなして行くというだけの大学生活ではなく、自ら問題意識を持ち行動に移していくことによって自己を錬磨していくことが、将来教師になっても生きて働く実践力となるのではないだろうか。

第1期YOU遊サタデーをつくる

事務局長 林向達 (教育学科4年)

はじめに

まずは第1期YOU遊サタデーに関わってくれたキャブテン、スタッフ、そして活動を支援していただいた教官、事務職員各位に心からお礼申し上げたい。第1期YOU遊サタデーはこうした多くの協力者の支えにより無事成功を収めて終了する事ができた。

ここから綴る文章はYOU遊サタデーを振り返っての全体的な記録である。とはいうものの私こと事務局長の視点であるから、これが活動の全容だということには必ずしもならない。しかし今回の活動が参加者一人ひとりにとって違うものであるならば、私のこうした雑文もまたYOU遊サタデーの実像といえる。公式記録とは相違もあるだろうが数字の正確さは他に譲るとして、YOU遊サタデーの一つの姿を見ていただくことにしたい。

第1章 YOU遊サタデーの創造

第1節 YOU遊サタデーへの発想

1. 誕生背景

残念ながら信州大学教育学部は、地域社会の教育活動からは遠い位置に存在し続けていた。一方で数こそ減り始めてはいるが長野県教員への採用率は今も大きな比率を占めている存在である。この2つの現実から見ることのできるジレンマに対し私達が今まで有効な対策を施せずに来たことは明らかに努力不足であった。この点は今はっきりと明言して反省を促さなくてはならない。しかしこのことで即、学部運営に問題があるとする見解に結びつけるべきではないし、また学生達の怠慢を悲観する態度に出るべきでもない。細かな場面を注意深く見ていけば学生達が個々にサークル活動を通して子ども達や地域と触れ合い、交流に励んでいる姿を確認できる。また学部がそうした細かな活動に対し温かな支援を続けていることも見落とせるはずがないのである。いずれの立場もそれぞれができる範囲内において努力を続けていたこと自体、むしろ賞賛されるべきだ。問題はこの状況下で力を結集しようとする口火を誰も切ることができなかった点である。

斯様な背景の中、YOU遊サタデーはその誕生を、教官と学生の善き組み合わせに恵まれたことで達成することになる。いささか偶然に任せすぎた嫌いのある誕生ではあるが、そのことが逆に痺れを切らせていた人々の心強い支援を得られる結果に結び付いたのだと考える。しかし、果たして私達始め賛同者はこのYOU遊サタデーなる企画に何を期待しているというのであろうか。最初は学生各自が得意とする分野について子ども達と楽しく活動できればいいというイメージがあった。しかし他方では教育実習の経験を十分に生かして指導案を作成する

ことに重点を置く考えもあった。だが学校で教えることを繰り返すだけでは意味がない。考えるほど必然的に、全体像はぼやけ続けていった。

2. YOU遊サタデーの独自性

第2土曜日に子ども達を集め、ともに活動をしていこう。この漠然としたスローガンから先へ進むこと果たせぬまま準備の日々は過ぎていく。話によれば全国的に見てもこのような試みを実践している教育学部は他に無いとされている。しかしそれもまた不自然だ。今日まで、子ども達との接触を持とうと試みた教育学部が一つもないなんてことは考えられるであろうか。私見では恐らく子ども達を集めた公開ひろばなるものは他県の教育学部ですで行なわれていると思われる。だとすれば私達のYOU遊サタデーはそれと同じに留まるわけにはいかなかった。単に子どもと戯れるだけならばお祭りを開催すればいい。単に教育実習を繰り返したいならば自分から学校へ飛び込めばいい。私達がわざわざ「YOU遊サタデー」として新たな活動の空間を創造するからには何かしらそこに、新たな挑戦を盛り込まなくてはならない、と考え続けていたのである。

YOU遊サタデーは学生主導で形作られてきた。しかしYOU遊サタデーは学生の自主企画ではない。その背後で信州大学教育学部教官、職員といった学部ぐるみでの支援を受けている。さらに活動を通して地域社会をも取り込み、多彩な拡大を続けるように仕組んである。私達がYOU遊サタデーの独自性として強調できるのはまさにこの点だと思う。この射程のもとに行なわれている活動ということならば確実に私達の試みが初めてと断言していい。最終的に私達の中にでき上がったイメージは壮大すぎる理想なのかも知れないが目指す方向としては正しいものと思われる。もちろん現実問題は山積みだ。参加してくれる学生も最初から多数は望めない。教官各位にも積極的なアピールを試み、なるべく内部の風通しを良くしようと努力がなされたが、全てを了解して頂くにはこちらの準備が足りない面もあった。大きな理想を抱えはしたがまずは活動を具現化すること、そのことばかりに力を取られていたのである。

第2節 YOU遊サタデーの準備

1. 実行委員会設立と名称決定

平成6年6月6日、初めての実行委員会が開かれた。事前に集められた学生は教育実習の事前事後指導での呼びかけに応えた者やそこからの人脈で集められた有志であった。実行委員長に任じられた数学科4年生の山口直行君が就く。副実行委員長に3年生から吉田亘志君(特殊科)

と田中忍さん（理科）が名乗り出た。そして非力ながら私自身も事務局長として補佐役に就くこととなった。

第2回実行委員会は6月13日に開催。ここで初めて催しの正式名称が決定されることになる。当初は「信大学遊ひろば」という表現を使っていたが、これでは子ども達にとって少々堅苦しい。またメンバーの一人が提案した「ビューティフルサタデー」という愛称も一時利用されたがまだしっくり来なかった。実行委員会で叩き台として登場した名称のアイデアは次の通り。

「ビューティフルサタデー」「信大学遊ひろば」「土曜ジャングル」「土曜の王様」「土遊人」「第2土遊日」

話し合いの中では「土曜子どもひろば」といった案も登場し、さらに思案を続けていた。そして結果的にキャプテンとして参加した渡辺一博さん（英語）の提案した「ゆうゆうサタデー」という名称がメンバーの耳に印象を残すことになった。どこかで聞いたことのあるフレーズだが、それがまた記憶に残りやすい。そして表記は「あなたが遊びの主体者だ」という意味を含め「YOU遊サタデー」となった。子ども達にはひらがな表記の「ゆうゆうサタデー」に馴染んでもらうこともでき、愛称としても最適である。この場をもって実行委員会は「信大YOU遊サタデー実行委員会」と正式名称が決定、愛称も「ゆうゆうサタデー」としてスタートすることになったのである。この他、子ども達との活動にあたる学生は教育実習経験者が対象のため、2年生の参加するチャンスがない。そこで当日の案内係を始めとした補佐的役割を2年生にお願いすることが確認された。またこの実行委員会後、活動を企画した学生の名称を「キャプテン」とすることも決められた。共に活動していく存在でありながらリーダーとわかる名称として適当だ、との判断である。

2. 企画内容と对学校広報

第1期YOU遊サタデーの企画は二十四種類。当初リストアップされていたタイトルはさらに多く、実に多様な構成であった。「ペーゴマ回し」「竹馬づくり」といった懐かしい遊びを実践しようとするものから「パソコン通信」「ラブレターの書き方」を指南するユニークなタイトル、そして「オリエンテーリング」や「信州の自然や文化を生かした内容」「野外活動」「パーベキュー大会」などアクティブなタイトルも散見された。果たして今回は学部構内のみをフィールドとすることが安全面や責任面から決定されたため、数多くの魅力的なアイデアを断念せざるを得なかった。こうして様々な要因によって絞り込まれたタイトルが第1期YOU遊サタデーを彩ることとなった。

キャプテンに対し内容の概要と子ども達へのメッセージを含めた内容案内の原稿を依頼、3カ月全体の開設状況のリストと共にメニュー冊子として印刷製本を行なった。これらは各学校へ配布されることになる。学校機関への連絡は冊子の配布と学校先生に対する案内文や資料で十分と踏んでいたが、私達のこの楽観的な考えはすんなり通用するものではなかった。最初私達は主旨に問題さえなければ冊子のリストのゴピーや保護者への案内を快く引き受けてくれるものだとはばかり期待していたのだ

が、学校側には新たに保護者連絡用のプリントを作る余裕などないことに気づかされる。こちらが予め配布用のプリント原稿を作成し届けなければならないのだ。しかし多くの場合、問題は事務レベルのことではなく、学校側は責任問題を理由に配布を見合わせていたのだ。

YOU遊サタデーは学生主体の活動でありながら学部のバックアップを受けていることは記した通りである。が、市内の小中学校にとってはまだ実態のわからない催し物でしかない。とすれば万一事故が発生した場合の責任はどこがとるのかという問題になる。責任所在のはっきりしないものを学校が積極的に保護者へ勧めることは学校の責任問題にもつながるとして、配布資料は校長レベルでストップをかけられてしまったのである。

これらの問題は後に支援教官が責任者であると明確化し、第1回の成功という実績によって幾らか前進を見ることができた。さらに全体的な広報活動にしても回を重ねることで認知度を上げることに成功している。

教育実習が始まり、3年生が忙しくなる。次回の実行委員会も7月19日とかなり間を開けることになり、準備の難しさは避けられない。夏期休業中は実行委員長と支援教官、事務局長という少人数で土台固めを進めなければならなかった。大学関係者、教官、職員各位への挨拶と報告をし、活動で使用する教室施設の借用手続きも行なう。この時期申し込みほとんど動きがない。先に記した学校側の告知ストップが主な原因だと考えられるがこの時点ではそれを知る由もない。徐々に迫りくる当日に焦りを感じながら、参加者の名簿作り、学生スタッフなどの名札作りを作業する。YOU遊サタデーの看板をキャプテン小倉敬さん（理科院生）に製作してもらい素晴らしいものができ上がるなどもした。

3. 指導案検討

運営準備の傍ら、実行委員長と私はキャプテンから提出された指導計画案（指導案）の検討を繰り返していた。指導案という名前は今も気に入らないのだが残念ながら他に適当な呼び名を当てられずそのまま使っている。次回からは「私導案」と表記してはどうかという提案もあるが、今回は結果そのままであった。さてそんな指導案はYOU遊サタデーにおいてあまり重要な存在ではない。でありながら提出の義務づけを行なっているのは偏に指導案作成過程がキャプテン自身の考えを整理するのに役立つからである。形としての指導案よりも当日の行動を根拠あるものにするための手段として必要だと考えるのである。このことは教育実習経験者ならば誰もが共通して感じたはずだ。YOU遊サタデーにおける指導案の存在意義とはキャプテンを中心にその周りの者との間で意思疎通を行なう媒体としてであり、ゆえに充実した検討が行なえるわけである。そして、添削された指導案を通してキャプテンは新たなやり方を模索し続けていき、最終的には指導教官の意見を仰ぐ事になる。この場合の指導教官とは、必ずしもキャプテンの所属している教官ではない。活動内容に近い研究を行なっている教官の場合も有り得るわけだ。教育学部の利点が幅広い分野・学科

を有している点にあるとすれば、このような利点を活用することも大切であろう。こうして指導案が議論や意見によって柔軟なものへと改善されていく。

だが指導案の検討は難題だった。そもそも検討を担当した私達2人をして指導案作成の達人ではない。ただし私達が読んで理解できないとなれば何かの問題があることは確かだ。誰が読んで理解できる指導案への議論。子ども達が喜ぶ場面を作るため、自分が子どもならばを想定したディスカッション。冒険できる場面はあるのか無いのか。教材には何が必要となるのか、教材をどう配置すればいいのか。教室の中でできることの限界は何か。安全はきちんと確保できるのか。しかし無謀な試みを盛り込めないのか。常識に従いながらも時に非常識へと逸脱し、ぎりぎりのラインで日常できないことに挑戦するチャンスを作る。言葉にすれば簡単だが実際には難しいこの姿勢を私達はなんとか指導案に盛り込もうと議論を繰り返した。果たして私達2人の無理難題な添削は各キャプテンの努力によってより良いもの、素晴らしい実践になったといえる。

締め切り間近、第1回目の申込数は準備した定員数を大幅に下回った。一部のタイトルは残念ながら休講を余儀なくされる。しかし初回としてはちょうどいい人数であることもまた事実だった。約40名の子ども達が記念すべき第1回YOU遊サタデーの活動パートナーとして、当日を私達と共に待ち望んでいた。

第2章 YOU遊サタデーの実践

1. 第1回YOU遊サタデー

9月10日第2土曜日。逸る気持ちを抑えつつ早朝に学部キャンパス入り。清々しい期待感を持つのは久しぶりであった。この日のために多くの時間を費やしてきたのだ。人一倍笑みがこぼれてしまうのは仕方がなかった。

受け付け時間が迫り、直前の慌たじさ。朝食を取ったり、材料の確認をしたり、会場のチェックをしたり。落ち着く暇がないとはいえこの緊張感に充実のときを感じる。やがて今日のパートナー達が顔を見せ始めた。

慣れない誘導、開会式が始まるまでの空白の時間の見落とし、的確な判断を下せずに忙しさに流された運営。しかし問題ばかりでもない。各キャプテンの予想を上回るほどに子ども達は熱中を見せた。木工教室ではお母さんものこぎりを握り、作業に挑戦するという姿さえ見ることができたのである。

ハプニングもある。アメリカ人との英会話では一人の子が泣きだしてしまう場面もあった。しかしキャプテンの暖かいサポートのお蔭で最後には元気になったりと良い思い出に変わったことは収穫だったのではなからうか。

各企画の細かい内容は各キャプテンの記録に譲るとして、第1回目YOU遊サタデーは暗中模索しながらの頼りない運営だったにもかかわらず延べ57人の子ども達と保護者の参加を得、無事成功裡に幕を閉じた。

2. 第2回YOU遊サタデー

第1回の成功は、多くの注目を浴びることとなった。テレビのニュース番組で紹介され、翌日の新聞にも写真付きで記事が出た。その後NHKの全国放送で紹介されてからさらに多くの新聞で紹介記事が掲載された。第2回目の直前には地元新聞の夕刊にキャプテン7名のコメントの入った記事が掲載され、認知度は急激に上がっていった。また近辺の小学校へ訪問し、実行委員長と支援教官が直接YOU遊サタデーについて紹介を行なった。こうした地道な努力をも合わせたことから、申し込みは190名を数え、スタッフの数も第1回から大幅に増員し約60名となった。

第2回の準備は前回に比べれば要領の知れた分だけ気楽ではあったが、10月8日の第2土曜日が連休そして試験休業と重なってしまうため学生の動きを把握できない苦労があった。そのためスケジュール的な忙しさに見舞われ、準備も前日丸一日をかけて集中的に取り組むこととなった。

(当日)

10月8日、2回目の蓋をあけてみれば条件が前回とまるで違っていた。受け付け作業のもたつきが起り、長い行列を作ってしまう。開会式会場もこの大人気で混乱気味、スタッフは増えたが完全に仕事を把握しているものが少なく、指示を出そうにもなかなか伝えられないという問題があった。

なんとか朝の忙しさを乗り越えてからも当日の苦労は続く。一部の学生は昼食を取る暇もないほど忙しくなったり、大勢いる子ども達一人ひとりに注意を払うのも難しい状態。保護者が乗り入れた車両の駐車スペースも後に問題として指摘された。やはり様々な欠点が見出されながらも第2回目のYOU遊サタデーはなんとか開会式を迎える。結果この日の参加延べ人数は213名だった。

失敗を伴いながらも実現したという喜びに浸ることの多かった第1回に比して、第2回にはいくつもの教訓が取り上げられた。その中でも注意しなければならないのは子ども達の数である。

(定員数設定の問題)

第2回に於て多くの申し込みや参加を実現したことは喜ぶべき事態ではあったが、このことで各々の活動は定員いっぱいのもので続出した。中にはせっかくの参加申し込みを断わることも忍びなく、定員を越えて受け付けてしまったものもある。しかしこの態度は適切ではなかった。子ども達の数がある一定数越えてしまうとキャプテンにとって大きな負担がかかることがわかったのである。もちろん私達は数多くのスタッフを配置するよう努力した。それでも十分なサポートを望めなかったのだ。実行委員長の山口直行君は、経験値として子ども達が30名を越えてしまうとサポートが難しくなり、必要なスタッフ数も加率的に増加すると指摘する。残念ながらスタッフの絶対数は有限である。もし仮にこの指摘が正しければ最終的には一人につき一人のスタッフというマン・

ツーマンを実現しなくてはならなくなり、とても随い切れない。教室という空間ではまた条件が違うであろうが、YOU遊サタデーのような活動を中心に据えた場ではこうしたチーム・ティーチングの問題も難しく表出してくる。マン・ツーマンを実現したとしてそれだけのスタッフをどう統括するのか、問題はイタチごっこだ。このことから私達は、定員をみだりに増やすことはサポートし切れない、つまり安全の確保が困難になるという理由によりすべきでないかと判断した。

しかし実のところこうした反省に立つことはあれ、子ども達の申し込みを前に冷やかな判断をとることは困難がつきまとった。積極的な参加表明を無下に断わるわけにはいかない。往復ハガキに記された電話番号に連絡し、事情を説明する。この時ほかのタイトルに興味を示してくれればそれでもまだ救われるが、参加を断念されたときの悲痛はこうした作業に於て覚悟を要するものである。場合によってはキャプテンに無理を承知で増員をお願いすることもあった。第3回の申し込み受け付けでも同じことを繰り返してしまっている。活動したいと願う子ども達を受け入れたいと思うこと、それが当日の失敗につながってしまう危険。その危険に対してあえて冒険を試みようとする動き。理想的な人数を越え、いくらか無理をすれば不可能ではない範囲を模索していく過程で指導案の見直しやスタッフ割り当てなどの事務処理もひっくり返り始める。さらに当日受け付け分の定員枠も考慮しなければならなかった。果たして人数の問題は試行錯誤の中でしか解決を見出せない。改めて結論を出せといわれれば、やはり定員は厳守すべきだと答えたい。しかし短絡的な切り捨てもまた望みたくはない。キャプテンやスタッフの力量のマネジメント、指導案の改善といった努力なしにはとうてい有り得ない結論だと考えるからである。

3. 第3回YOU遊サタデー

第1期YOU遊サタデーは、11月12日の第2土曜をもって終了した。第3回に至るまで、第2回までの成果が「広報ながの」や「文教ニュース」に掲載された。

〈スタッフの増大と情報伝達〉

これらは更に多くの学生に働きかけるものとなり、スタッフの数は80名弱となった。しかしこうした嬉しさの一方で大所帯のやり難さもつきまとう。実行委員長のお願いはこれら学生のすべてに的確に伝わっているとはいえない。積極的関わりを見せる学生も居れば、そうでない学生も居る。スタッフをどう動かすかのマネジメントもまた実行委員長や私に課せられた難題だった。だが関わりスタイルについて非難するものではない。もちろん気持ち良くなるが、それも認めることが出発点だと考えるからこそ、各自の態度を尊重している。しかしコミュニケーションのとれない者にはいささか嫌気が伴うのもまた事実であった。YOU遊サタデーのラストを有終の美として飾るためにも、対子ども達だけでなく、学生の中で対個人のスタンスもまた考えていかな

てはならない。そのため第3回はキャプテンとスタッフとの打ち合わせの場面を設定するなど改善を試みている。また、頻繁に関係資料を作成し配布も行なった。申し込みの現状やスタッフの配置など可能な限り手持ちの情報を全員に配布する努力が行なわれたのである。こうすることで各自が活動の主人公である認識を持たせ、積極的な参加を期待できる。これらはまた記録という点でも意味があった。しかしながら一方で大所帯となったYOU遊サタデーが、資料のために消費する紙の量は馬鹿にならないものとなってしまった。もちろん使用済みプリントの裏白を使用する努力も行なわれたが依然として消費量は大きく、さらなる見直しが必要と思われる。ただ、紙の消費を極度に意識し、情報の伝達を鈍らせてしまうのも得策ではない。各自が当日どう動くべきなのかそのイメージを伝えることは非常に難しいが必要なことであり、大量の配布資料も決して無駄ではないことも事実なのである。

スタッフに手渡される資料の中核は「マニュアル」と呼ばれるものである。ここにはYOU遊サタデー当日までのスケジュールや、仕事の内容などが盛り込まれ、その内容に従って動くことで全体が運営されていく。第3回に於ても同様にマニュアルが作られた。今回は最終回ということもあり、いままでの経験を踏まえて、来年に繋がるような情報をも盛り込むことが工夫されている。田中忍さんがまとめあげた時間経過に沿った体制運営図などは、第2期以降大参考になるはずだ。こうして全体的な統制をとりつつ準備が進められる。

〈周辺高校への広報〉

第3回は信州大学教育学部に進学が多い周辺の高校に出かけ、参加の呼び掛けを行なった。これまで高校生を対象とした教育学部の紹介をするタイトルに、ほとんど参加者がなかったため、直接説明することにしたわけである。しかし、私達の訪問は学校によって反応がまちまちであり、興味を示し当日は生徒を引き連れて参加した高校もあれば、説明自体に耳を傾けない高校などもあった。大学受験を間近に控え、緊迫した雰囲気になることはこちらも理解できないわけではないが、大学を知る良いチャンスを提供したい思いが形よく伝わらなかった高校に対しては残念に思う。とはいえ、そうした一部を除けば概ね反応がよく、高校生の参加も二桁に達したことはこの訪問説明の成功を物語っていると考えていいだろう。当日参加者の真剣な眼差しと活発な質疑応答、そして希望する学科の先輩から詳しく様子を聞く興味津々とした態度はYOU遊サタデーのまた違った側面である。果たしてYOU遊サタデーを見学して回った高校生達は、数年後の自分の姿を重ねていただろうか。彼、彼女によるYOU遊サタデーが、楽しみである。

〈前日準備〉

11月11日、金曜日。当日を明日に控え最終準備である。開会式会場を作るため机などの移動作業を行なう。各教室準備もキャプテンとスタッフによって行なわれた。

5時すぎからはキャプテンを中心とした最終ミーティング。当日の流れのおさらいをタイムテーブルに沿って追っていく。その後も準備作業は続き、夜10時になってようやく帰宅のめどがたったほどである。約270名の申し込みを得た最後のYOU遊サタデーが無事成功することを願いつつ、各人は帰路についた。

〈当日〉

そして当日。3回目も天気恵まれ、YOU遊サタデーは快調にスタートを切った。過去2回の反省点を踏まえた今回の運営は驚くほどスムーズな流れを見せた。朝の受け付けもタイトル別にした効果が絶大であり、のんびりとした雰囲気の時が流れる。それが逆に調子を狂わせたのか開会式直前の合間は今回もうまくもたせられなかった。ビデオを上映する工夫をしたはずだが、意図したようには場をもたせられなかったのである。やはり機転を効かせたキャプテンによる歌と体操に助けられてしまった。しかし開会式後は再びスムーズな展開であり、あれほど問題の目についた前2回を経験した私達にとっては不気味なほど順調だったのである。

〈タイムテーブルの変更〉

第3回はタイムテーブルに変更を加えていた。これまでである意味見落としとしていたことだが、活動時間を短くし2時間と設定したのである。いままでのタイムテーブルは活動時間を2時間半としていた。子どもにとって2時間半という時間はかなり長いものだ。子どもが集中できる時間というのはきわめて短時間なのである。このような事実をすっかり見落とし、こちらの運営の都合だけで活動時間が設定されていた点は十分反省されなければならない。今回の2時間という設定も長い点では変わらないが、30分の短縮は、活動を絞まりあるものにするという意外な効果をもたらしている。企画によって2時間を一度に消化するものもあれば、途中休憩を含ませた前後二部構成をとるものもあり、具体は内容によって様々である。こうした変更に伴い、全体的なスケジュールも朝は遅め、午後は早めとなり余裕も感じられたが、お昼ご飯の時間では余裕がなくなっていた。生協食堂のご協力で子ども達が食事をとることはできたのだが、ここで長い行列ができてしまい、食べるまでに時間がかかったのである。次期にはこういう場面にもう少し余裕をもたせられればよりよいと思われる。

〈最後のフィナーレ〉

そして第3回YOU遊サタデーは閉会式というフィナーレを迎える。子ども達が各々に活動した結果を発表。どの子も素敵な成果を携えて生き生きとしている。最後に学生からの「ありがとう」と子ども達からの「ありがとう」の声で閉会式は、時間が長引いてしまったが、幕を閉じることとなった。

子ども達を見送り、片づけ。反省会とささやかな打ち上げで私達は盛り上がった。次々に出てくる良かったとの感想、あるいは反省点。そして第2期もやりたいとい

う声があちらこちらから漏れてくる。おそらく後輩達のことである、また違うYOU遊サタデーを作り出してくれることだろう。

第3章 YOU遊サタデーとは

「YOU遊サタデー」その名を何度となく繰り返し、様々な機会に思うところを述べてきた。ここに綴る言葉は恐らく実行委員長や支援教官の思うものと対立するかもしれない。むしろそれが普通だ。そして、だからこそこの新しい空間に広がりがあるのだと信じたい。

ときめく理想を並べるよりもこの空間の問題点を指摘した方がアプローチとしては良いだろうか。YOU遊サタデーは確かに子ども達と学生にとって様々な経験を提供した場であるが、しかし翻って、この充実はずの内の戯言だと考えられなくはなからうか。つまりYOU遊サタデーの活動は300名にも満たない少数の人々に見えた夢物語に過ぎず、その活動を享受したくてもできない人々や、或いは意味を見いださない人々、まるで存在を知らない人々には何の価値もないものだとすればどうであろうか。

【参加者の偏り】

キャプテン喜多篤史君(社会)は次のように指摘する。あるタイトルに参加した中学生の女の子は、始め母親に進められ参加したという受動的な申し込みだった。活動に移り、彼女自身は内容に興味を示し始め黙々と活動をしていたが、或いはその黙々とした姿勢は見えざる強制によるものではないかというのである。この背景にはYOU遊サタデー参加者の圧倒的多数を小学生が占め、中学生以上にとって参加が難しくなってしまった問題がある。彼女自身は参加したものの居づらい場であったのかも知れない。第1期YOU遊サタデーの全体が小学生対象の体制になってしまっていたことが十分認識され、議論されるべきだという彼の指摘は実践を通して勝ち得た貴重な問題意識といえる。残念ながら現在のYOU遊サタデーに具体的な解決策は用意されていない。ただ一方で第3回には高校生の参加申し込みが一気に増えた。徐々にではあるが認知度と共に改善されるのではないかと思われる。そして今期参加してくれた小学生が後に中学生になる時、或いは引き続き参加希望をしてくれるかも知れない。問題は長期的な視野に立ち検討されるべきものだといえる。

【大言壮語への危惧】

YOU遊サタデーに参加する子ども達はある意味特殊であり、充実した活動というものもそうした内輪の中だけの満足に過ぎないのではないかという指摘も無いわけではなからう。これに関しては教育というもの自体にも似たような構造があると指摘しておきたい。やや言い逃れの論述であるが、残念ながら私達にはすべての子どもを引き込む力も余裕もない。積極的にこの場に関わろうとして参加申し込みをしてくる人々に対してはもちろ

ん拒むことなく受け入れる気持ちで居る。それは実行委員長の「たとえ（参加者が）一人でもやる」という言葉にも同じく見え隠れする思いである。しかし現実問題として有限のキャプテンとスタッフがついてあげられる参加者の人数はまた有限である。むやみに人数を増やしてしまえば逆に十分なサポートは望めない。これはYOU遊サタデーの鉄則である「安全第一」の原則を維持できないことを意味するのである。関心を示していただいた人々に対してもこの理由から制限を承知してもらっていた。このうえ活動に対して無関心の人々をかき集めようなどとすればYOU遊サタデーという空間そのものの意義を消し去ることになるのである。そういう意味では内輪の活動であるし、また自己満足の世界であることも認めざるを得ない。しかし、それは決して閉じたものではない。信大YOU遊サタデーが出発点となりて例えば全国の教育学部がこの試みに賛同し実施すれば、空間は広がりを見せることになる。そして参加者がそこからインスピレーションを得、日常の中で形になれば、そうした場に居合わせる人々に間接的にも影響を与えられたことになる。また教師をめざす学生が教壇に立つとき、そこにYOU遊サタデーの精神を期待することも叶わぬ願いではない。つまりYOU遊サタデーは、そこでの活動もまた充実したものを狙ってはいるが、むしろその経験が以降の生活の中、教育活動の中で華開くことを期待するものであるのだ。

【第2土曜日】

学校5日制、第2土曜日の受け皿としてYOU遊サタデーを見る向きもあろう。確かにYOU遊サタデーの意図の中にそうしたものが無いわけでもない。第2土曜日を開催日として設定したのも発想としては受け皿としての機能も担わせたいというものがあったからである。しかしこれまで述べてきたようにYOU遊サタデーを単なる皿に終始させたいとは考えていない。受け皿という枠の中でどんなに理想的な活動を演出しようとも常に皿の外には無関係で恣意的なものとして受けとられかねない。私達は「受け皿」としてよりも第2土曜日の「踏み台」にして欲しいと願う。繰り返しになるが、YOU遊サタデーの発想なり活動を日常へと持ち帰って欲しいと考えているのだ。

しかしその目的的な活動意図は少々危険でもともと考えている。何かを期待して何かをするというのはそれだけで枠をはめていることになりはしないか。だからこそ実際の活動場面で、そういった経験への期待をしながら活動することは望ましくない。やや矛盾するところであるが、この部分は非常に重要である。

【矛盾への関わり】

何かを学んで欲しい、しかし学びの場としては終わりがたくないという矛盾について学生はどう関わっていくべきなのだろうか。第1期YOU遊サタデーは残念ながらその点について検討する余裕があまりなかった。とりあえず先生としての関わりは、最初に退けられた考えであ

る。これはYOU遊サタデーが学校でないという単純な理由によるものであるが、また一方で、教育実習の反動も大きな原因である。

多くの者は教育実習を経験し、「教師」（正しくは「教育実習生」という枠にはめられたことを苦く思っている。辛い部分に対する不満も大きい、むしろ子どもと向き合う場面で自分が教師という仮面を付けていなければならぬことに不満が大きかったのである。そして教育実習は決められたルールが一本敷かれている上を単に走り行くのみという印象が強すぎた。

YOU遊サタデーの発想がまずそのような不満からの脱却であったことはこうした背景から来ている。それは後述する言葉の問題にも色濃く見えていられるが、しかしながら私達は短絡的な自由放任を望んでいるわけではないことも付言しておきたい。

まず何をしても子ども達の自由にやらせてしまっただけでは活動が成立しないと考えている。そしてYOU遊サタデーに於て活動が成立せず結末を見ないということは言語道断である。根拠は簡単だ。結末の無い活動には感動も達成感も存在しない。そしてそうした達成感なしにして「学び」など無いからである。活動自体は学びを意図していなくとも、果たして活動が達成されたときに、子ども達は自然に学びを行なっているとはいえないだろうか。「新しい学力観」と方々で騒がしいが、授業が成立しないにもかかわらず「子どもは意欲を持ったのだ」と過大な評価をしているようでは教師の存在意義が怪しくなり無意味だ。YOU遊サタデーはその名の通り、参加者が主体となって遊び活動することを大きな願いとして持つものの、一方で学生側キャプテン・スタッフも主体者であり、ともに活動していくことが念頭におかれる。そして最も大切なのは、キャプテン・スタッフというものはその活動にきちんと結末がやってくるように演出する責任を持つということである。このための努力が指導案であり、キャプテンとスタッフの打ち合わせなどだ。

単なる学びの場ではなく、また単なる遊びの場でもない多種多様な可能性の空間、その水先案内人として学生を位置付ける。その役目とは活動を完成させ、新たな出発点として仕上げていく演出家であり、ともに活動するパートナーでなければならぬ、私自身はそう考えているのだがいかがだろうか。

【使用語への意識】

私を始めとしてYOU遊サタデーでは様々な言葉の言い回しに気を回している面がある。例えば学生のことを「先生」と呼ばず「キャプテン」と呼ぶことを始めとして、キャプテンが子どもを「指導する」という言葉も気がつく限り極力使わないようにしている。それでも「指導案」という言葉は本意ながらそのまま拝借している点に未熟さはある。そして何よりレトリックが本質的な実践に結び付くものなのかという疑問もあってしかるべきである。言葉で語れば理想的であるが、果たして実際の活動場面ではやはり身体に染み付いてしまった学校の活動が展開されている。実践記録中「授業」「講座」「教室」といった用語が不統一に用いられていることも一例であろう。

しかしこれもまた時間をかけることと学生スタッフ間のコミュニケーションを図ることで改善に向かうと思われる。言葉という形から入ることも、即座ではないが徐々にその効果が表われると考える。今しばらく試行錯誤の時間として意識的、目的的な自由の追求を容認していただきたいと思う。それがやがて無意識的な参加者本意の自由への追求となっていくことを期待したい。そのために必要なもの、それは人と人との協力以外にないだろう。

[大学開放と大学改革]

YOU遊サタデーはまた、大学開放の実践例として注目を浴びることとなった。しかし「大学開放」という言葉は、どういう意味なのか。近年「大学改革」として議論されているものと重なり合う部分はあるのだろうか。

文部省は大学改革の推進にあたり、いくつかの制度改革を行なった。この中で私達YOU遊サタデーに辛うじて関わりあると判断されるものが「開かれた大学づくり」と銘打たれたものである。この他にも「大学院制度の弾力化」「点検・評価システムの導入」といったものが提示されている。しかしながら「開かれた大学づくり」をも含めて、文部省が求めているのは内部改革がほとんどであり、外との界面は社会人を大学制度内へ招き易くするという「取り込み型」に終始している。大学が地域社会へどう関わるかではなく、地域社会が大学にどう関わり易くするかという鎮座姿勢なのだ。それは社会一般を対象とした公開講座の実態を見ても明らかである。講座を開くから参加希望したければ参加してくれといわんばかりの態度は「改革」の名に値する姿勢ではない。もちろん研究型の学部はその性格上、地域社会への還元といった活動に不向きな面がある。求められているものを提供できない場合には非常に難しい課題といえる。しかしそれらは努力を試みない理由に成り得ないことも十分承知したい。内に向けた改革がいずれ時過ぎればそれ自身改革の対象となってしまう経験は、嫌というほど現在実感しているはずである。

「教育学部」という学部を目を向ければ、この問題はさらに切迫したものとして見えてくるはずである。地域の小中学校機関に向けて人材を輩出するはずの教育養成系学部が地域に根差したものでないという事実を私達は認識し反省しなければならぬ。他県から戻る地元出身者もこの場合同様である。教育学部はある意味で未来の教育を提言する発信源となるべき場である。それは次代を担う教員の養成所であることからしても当然である。しかしそのためには学部全体が地域を十分意識した体制になっていなければならない。学生が単に日々を過ごす場としてでなく、もっと自らの存在と関わりを持つ形で地域を意識できればどれだけ有意義なことだろうか。学生にとってだけではない、このことはむしろ地域社会の人々にとって大変意味あることである。自分達の子どもを預けることとなる学生達の顔を見ることができると。思うに大学開放という言葉が指すのは、今まで不透明のために顔を見ることが互いにできなかった人々を結びつけることである。この極めて単純で素朴なことが、実のところほとんど実現されることなく済まされてきたこと

に留意されたい。いずれにしても「現状の教員養成システムにはこうした子どもとの積極的な関わり方の側面が欠けている」(土井)ことは明かである。YOU遊サタデーは図らずもこの問題に一つの動きを持ち込んでしまったが、仮に本格的に取り組むとすれば今回の形が理想とは必ずしもいえない。それはここまで指摘してきた問題が大きな障壁になるからである。

[体制と実践的運営の問題点]

最後に私達はYOU遊サタデーの組織について痛烈な批判に耳を傾けなくてはならないだろう。吉田亘志君は全体の反省会時に、第1期YOU遊サタデーの運営が、一部の主要メンバーにほとんど仕切られてしまった点を警鐘する。私達は参加スタッフが円滑に活動できる様々な努力をしてきたつもりだが、いわばその努力が逆説的に、特定の人々が全体を統括し残りの人間はただ動くだけの組織にしたというのである。

この指摘はYOU遊サタデーに限らず、あらゆる組織的な活動に於てつきまとう最大にして最難な問題であろう。彼の問題意識は第2期以降に引き継がれるとき、そうした雑務をこなす人材を確保できない場合を憂慮したものである。もちろん私達もその問題を認識しないまま来たわけではない。しかしまた残念ながら有効な解決策を導き出したということでもない。私達は重い腰で思案停滞するよりも軽い腰で実践検討する道を選びがちだったのである。それが今後のYOU遊サタデーにとってマイナスであった評価はあまんじて受けるとしても、今回無からのスタートに於てそうでなければならなかった状況も考慮していただきたい。だが産みの苦しみを担う母親が居ると同時にそれを見守る父親が居るように、YOU遊サタデーに参加した学生スタッフの存在は大きい。それは仔細に活動を見返せば動かし難い事実である。問題への対処は組織毎に違うだろう。故に私達が今後示唆できることは少ないかも知れない。学生に対するスタンスにしても、子ども達に対するスタンスにしても、また学部や外部に対するスタンスもこれという決定打はないのだ。その中で敢えて述べるならば、常に試行錯誤を続けていくことだといえる。全体を巻き込む努力を続けていけば、いずれは形になって現われるだろう。故にYOU遊サタデーはまだ発展途上中なのである。

さいごに

実行委員長を始めとしたキャプテン達の表舞台を支える役目として、私は事務局長の任に就いた。しかし実質的な事務のほとんどは行動派である実行委員長によって処理されてしまったため私の出番は極端に少なく、ある意味自己反省を繰り返す日々でもあった。そういう存在の私がここにこうした文章を綴るのは感じの良いことではない。記録係としてやむなき性とお許し願ひ、また興味深い指摘があるとすれば、それらはすべて実行委員長と支援教官との対話から生まれたものであること確認しておきたい。

私にとってYOU遊サタデーは「場」であった。空間という言葉でもいいだろう。とにかくそこで感じられる空気が魅力的なのである。学生が団結して一つの物事をやり遂げる機会もほとんど無くなった昨今、こうして地域の様々な年齢層の人々と共に活動ができた奇跡。片手で振り回している小難しい理論も或いは大切かも知れないが、純粋にこの充実感を噛みしめてみるのも貴重だ。事務局長として、また一学生として幸せに思う。

文部省は「実践的指導力」なる言葉を使い、教師の質の向上を喚起している。YOU遊サタデーがそうしたものに答えるものとしてどれだけ力を持ち得るのか、様々な検討を通してきた私達にはいささかの疑問がないわけでもない。しかし少なくとも今回共に第1期を経験した仲間達は、奥の深い教師になると私自身は信じている。後輩達には、この冒険的な活動を引き続けて欲しい。YOU遊サタデーへ参加者からの問い合わせの中、しばしば「来年はやらないのですか」という期待の声が聞かれるのである。応えたいではないか。

実践センター土井進教官には興味あふれる示唆を数多くいただいた。先生との縁に恵まれ光榮に思う。またセンター千川教官、漆戸センター長には影ながらの支援をいただき感謝に絶えない。センター職員である風間さん、小島さんには学生スタッフのために当日の朝食や夕食をご用意いただき、また事務処理のいくつかもお願いしてしまったことなど見えない部分で大きな力となっていた。改めてお礼申し上げたい。平凡で静かなはずの土曜日に、嵐のような利用者を快く受け止めてくださった生協職員の皆様にも御礼。渡辺一博さん、横川瑞恵さん、澤田良子さん、北村史さん、片桐宏君を始めとしたキャプテンには事務など頑張っていた。そして、実行委員長の山口直行君。君と土井先生のコンビがなければ、初回のこの成功は有り得なかった。後輩達の善き灯台の役目、御苦勞様。そして共に活動できたことへ感謝。このほか多くの関係者の皆さんにも繰り返しお礼申し上げます。そして自らの非力さもまたお詫びしたい。

第2期、そして別の場所で生まれる「YOU遊サタデー」が今回よりも素晴らしいものであることを願いつつ。

以上

2. 体験的学習の指導案と実践の考察



第1回YOU遊サタデー集合写真直前

宇宙生物スライムをつくろう

田中 忍 (理科3年)

1. 授業づくりの着想とねらい

今回の授業の構想を練るに当たって、私が主に考慮したことは3つある。まず1つに、私は中学校の理科教師になることが夢なので、内容は出来るだけ理科に即した物でやってみたい。それは、今日学校現場でいわれているような「理科離れ」を起こしている子どもたちに、理科の本当のおもしろさを知ってもらいたいという願いからでもある。2つに、子どもたちが自分で何かを作り上げるといった、五感を通した体験をさせてあげたい。3つに、私が大学で学んだことを実際に生かしてみたい。

こうして考えた結果、P. V. A洗濯糊という子どもたちにとって身近な物を使い、「スライム」というプヨプヨした実におもしろい物を製作することにした。また、各自の自己紹介の場面では、普通にやってもつまらないことから、「火で書く文字」「色の変わる文字」と称した演示も取り入れてみた。

これらの様々な、不思議な現象を目のあたりにし、自分でもそれをやってみることを通して、子どもたちに理科のおもしろさを知ってもらいたい、そして更なる事象への探究心へとつなげて欲しいと思い、今回の授業を計画した。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習を終えた直後であったので、指導案を立てることも、どんなところに留意すればよいのかもよく分かっていた。緊張こそしたが、一番参加人数の多い20人という子どもたちや保護者の方々、報道陣の前で、動じることなく堂々とYOUサタデー初の授業をすることが出来たのは、なによりも教育実習での経験のおかげであると思う。あのつらい6週間を乗り切った経験は、私に大きな自信を与えてくれたのだ。

余談だが、実習と今回の授業の両方を見てくれた友人に、「実習の時よりも、ずっと生き生きして楽しそうだった」と言われた。私の中で、この実習とYOU遊サタデーを通して、何かが変わったのかもしれない。

3. YOU遊サタデーでの子ども達の取り組み

終始子ども達は、実に生き生きとしていた。自己紹介の場面では、自分の描いた絵や文字の色が変わったり、線香の火によってその部分だけが焼け落ちたりする様子に、非常に驚いていた。また、ここで少々時間がかかったため、子どもたちの中に「早くスライムを作りたい!」という欲求を高めることができたようだった。

「スライム」の製作場面で、子ども達は初めて出会う不思議な物体に対し、様々な歓声を上げていた。あの自然に口からでてくる歓声こそ、子ども達の探究心の現れであると思う。子ども達は自分達の好きな実に様々な色の、スライムをたくさん作り上げた。一つ作り上げるたびに、「キャプテン、もう一個作ってもいい!？」と何個も何個も作るので、「そんなに作ってどうするの?」と聞いたら、「お父さんとお母さんと妹にあげるの」と言ってくれたので、とても嬉しかった。この子が今日家に帰って、家族にこのスライムを

見せながら、今日あったことを楽しそうに話す場面を考えるだけで、今回これをやって良かったと思う。

最後に一人ひとりに修了証を手渡した。ここで私は、一人目だけ全文読み上げ、二人目からは「以下同文」と言おうとした。すると子ども達が、「以下同文ってなに？」と私に聞いてきて、一人ずつちゃんと読み上げて欲しいと言った。私はそこではっとした。今日この子たちは、一人一人自分の手でスライムを作り上げた。なのに修了証を「以下同文」の一言で終わらせられたのでは、まるでそれが認められていないように感じるのも無理はない。皆、「自分」を認めて欲しいのだ。そう思った私は、20人全員の名前と修了証の全文を読み上げた。最後の方は、繰り返してかなり疲れてきたが、子ども達が嬉しそうに修了証を受け取る様子を見て、やって良かったと思った。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

少々専門的なことを扱うため、スタッフは理科の学生にやってもらった。子ども達は4人ずつの班を5つ作ったので、各班にスタッフが一人ずつついてもらった。ガラス器具などを取り扱うため、子どもたちに危険がないように、目が十分に行き届くようにするためである。

今回は準備と片付けが大変だった。予備実験や打ち合わせなど、時間の関係上多少不十分な面もあったが、何とか乗り越えられたのも、スタッフの協力あってのことだと思う。しかももう少し綿密な打ち合わせをし、私だけではなくスタッフの人達にも、スライムの作り方とその原理をしっかりと理解してもらっておくべきだった。

5. 反省と今後の課題

今回の経験は、教師を志す私にとって非常に大きなものであった。いたらない場面も多々あったが、それらは子ども達の活気によって救われたような気がする。父兄の方々が書いて下さったアンケートの中にも、嬉しい言葉がたくさんあり、本当にやって良かったと思った。ただ、その中に、私の言葉遣いが悪い、男言葉である、として改善を求められたものもあった。私は関西出身なので、関西弁が大きくでてしまう。そのことについて言われたのだと思うが、これはどうするべきなのだろうか？教育実習の時などでは、関西弁を使うと生徒たちは親しみがもてると喜んでくれ、授業も盛り上がったし、私自身この言葉は好きなのだが、父兄の方々からすると、余り聞こえよくないのだろうか。どう改善すればいいのか迷うところではあるが、とにかく、YOU遊サタデーといった学生の企画に対しても、父兄の方々は私たちを未来の教師としてみて下さり、だからその言葉使いに対しても厳しい視線を投げかけて下さっていたことを実感した。そして生半可な気持ちではやっていけないことを改めて強く感じた。これは我々学生による企画ではあるが、子ども達の前に立つときには、「キャプテン」としても「教師」としても見られていることを、心に刻んでおかねばなるまい。

タイトル 宇宙生物「スライム」をつくろう！	平成6年 9 月 10 日(土)
キャプテン 田中 忍(理科3年)	指導教官 伊藤 武 漆戸 邦夫

1.ねらい

P. V. A洗濯糊を使って「スライム」を製作する場面で、この様なおもしろい実験を実際に目と手で体験してみることを通して、理科が好きになり、理科のおもしろさに気づくことができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10 9:30	導 入	1.自己紹介 2.キャプテンによる、理科のおもしろい実験の演示(子どもも参加)	「火で書く文字」 子どもに好きな文字を書いてもらい、前に貼って線香で火をつける	
9:50	展	3.「スライム」の製作 班で協力し合ってつくろう！ 上級生が下級生を助けてあげよう	製作方法説明 注意事項 ・髪や服につけないように ・絶対口の中に入れないように	模造紙 300mL ⁺ カー PVA洗濯糊 食紅 絵の具 四酢酸ナトリウム
10:30	開	4.作品の発表会	「スライム」が固すぎたときには水を加え、柔らかすぎるときには手で触ったりして水分をとばす。 「スライム」を放置しておくと、乾燥して薄い板状になる。ポリ袋に入れて封をすると、繰り返し使える保冷剤となる。	ガラス棒 100mL ⁺ カー ポリ袋
	ま と め	5.修了証の授与		
11:00		6.おわり		

たのしいえいごクラブ

渡辺 一博（英語科4年）

1. 本講座の着想

教育実習が終って間もなく、「信大YOU遊サタデー」の機会を得て、筆者は自分の専門とも非常に関わりの深い「たのしいえいごクラブ」と題する英語講座を開講することにした。そもそもこのような講座を企画したのは、子どもたちに楽しく英語に接する機会を提供したいと思ったからである。もとより、一部の英才教育や早期児童教育に見られるような詰め込み教育に荷担しようというわけではない。また、ある時は武器として、またあるときは障害となって一喜一憂をもたらす受験の道具としての英語学習への橋渡しをしようというわけでもない。英語を身につけることによって、諸外国の人とコミュニケーションを図ったり、英語で記された書物を読解して必要な情報を得ていくことがどれだけ楽しいことであるかを知るきっかけとなってくれればという強い願いから本講座に取り組んだのである。

2. 小学生と英語

教育実習を経験してみてその思いを新たにしたことであるが、「英語は嫌い」という生徒が相当数にのぼることは現実と言えよう。そうなった理由はともかく、「嫌い」と言われてはなかなか手の施しようがない。かねてから、ゆくゆくは小学校教師となって思う存分に働きたいと願っていた筆者は、小学校でも何とか英語を教える方法はないものかという思いを抱いてきた。そして、英語を「教える」というよりは、「触れさせる」ことができれば、多くの子どもたちにとって中学校に行ってから英語科の第一印象がだいぶ違ったものになってくるだろうと考えてきたのである。周知の通り、英語は出だしてつまずくとなかなか後では取り返せなくなってしまうことが多いからだ。

3. 小学校英語科導入と教育実習

将来、小学校でも何らかの形で英語に親しむ機会が生まれればいいなあと考えていたある日、文部省に小学校へ英語科を導入する意向があること、また全国に既に実験校も設置されていることを知った。その直後に教育実習が始まり、中学生にとって楽しく、魅力的な授業をしようということを何よりも心がけた。この教育実習経験を通して筆者の心に一つ大切な夢が描かれた。それは、小学校教師となって英語を教え、子ども達みんなから英語が大好きになった、と言ってもらえるような授業を展開したいという夢である。

4. 教育実習と「YOU遊サタデー」

そんな燃え立つようなヴィジョンが見えたときに、YOU遊サタデーという実践の機会が与えられたことは、願ってもない好期となった。実際に小学生に英語を教えることができるし、教育実習で学んだことをもう一度発揮できる機会ともなったからである。

5. 「YOU遊サタデー」のねらいとその実際

もちろん「楽しい英語クラブ」の「ねらい」は、子ども達が英語に触れ、英語が楽しいと感じ、英語を好きになってもらいたいということであった。しかし、第一回目のときには、とんだハプニングが起こってしまった。導入で「My name is ...」、「Your name, please?」、「My school is ...」、「Your school, please?」といった英語を説明し

た後で、対話を使ったゲームをさせてみたが、簡単と思っていたことが意外と子ども達には難しかったらしく、4年生のある子は「分からない。」と泣き出してしまった。多少困惑もしたが、今日はこの子につきあおうと思い、何とか一通り対話できるようにアシストした。最後には楽しそうに歌やゲームに取り組んで帰ってくれたので、その後のフォローが成功したのかもしれないが、導入の難しさや子どもたちの実態把握の甘さをつくづく痛感させられた。楽しいはずの英会話は、あの子にとってあの時どのように映ったのだらうと思うと心が痛い。以後はこれを参考に導入のあり方と扱う教材の内容に気を配ったおかげでどうにかうまくいったのではないかと思う。

全体的な流れとしては、子ども達にとって非常に身近な物であって、カタカナ英語に多く含まれている単語も数多く取り入れた（例えば、動物、果物、数字、体の名前や言い方など）。それらの単語に慣れ親しんだところで、それらの単語を使った楽しいゲームと一緒にするというパターンが多かった。そういった単語遊びの中にも一つでも英語で対話する楽しさをとって、取り扱った対話が「I want ...」や「I like ...」といった類の表現であった。こういった表現をキャプテンやスタッフのスキット（寸劇）から、その意味を推測させ、その後果物やお菓子を与えながら対話を行った。前者の場合は一人ひとり手渡ししながらやったので一対一での対話ができ、後者の場合は宝探しのようにしてやったので、「ターゲットセンテンス」ばかりでなく、いろいろな英語に触れる機会を提供できた。宝物の隠し場所にたどりつくまでに数枚のカードの指示に従いながら探しに行ってもらったが、それぞれの指示は英語で書いておき、それぞれのグループについているスタッフには、できるだけ英語とジェスチャーだけを使って子ども達に指示を与えるように打ち合わせておいた。子ども達は懸命にまた積極的にスタッフとコミュニケーションを図り、英語やジェスチャーからどうすればよいのかを推測しながら、宝物を捜し当てていた。

6. 「YOU遊サタデー」から得たこと

筆者が第一に学んだことは、目標や動機づけがあるときには子ども達はかなり積極的に新言語に関わってくるということだった。食べ物や報酬に釣られてと言ってしまうればそれまでだが、しかし、「必要に迫られて」という状況が母国語の習得を促しているのであろうと思われるし、英語学習においても子ども達が英語を聞いている、話しているんだということさえ忘れてしまうような活動や授業づくりが大切なのだと思った。そのための導入や動機づけのもつ重要性について認識を新たにすることができた。また、小学校現場での英語指導に当たっては、もっと研究していかなければならないという課題も与えてくれた。

当初のねらいであった英語を好きになってもらうという点に関しては、実際の子どもの様子や感想から、ほぼ達成できたと言えよう。スタッフとのティーム・ティーチングから生まれた連帯感は、すばらしいものであった。また、我々学生にとって何よりの喜びと満足感を得たことは、再び子どもたちと接する機会が与えられたこと、それ自体であった。

7. 「YOU遊サタデー」を終えて思うこと

筆者は「YOU遊サタデー」に、携わることができて本当に良かったと思う。ほかの大学では決して得られなかったであろうこの素晴らしい機会と、実習を終えたばかりで何となく空虚な気持ちを感じていた教育学部生に再び喜びの場を与えられたことに心から感謝したい。筆者はこれほど、大学にきて学んでいるんだなあ、学生らしいことをしているなあ、と思ったことは教育実習を除けばこれが初めてであった。

タイトル たのしいえいごクラブ	平成6年 11月12日(土)
キャプテン 渡辺 一博 (英語科4年)	指導教官 伊原 巧 高橋 渉 渡辺 時夫

1.ねらい 英語に興味を持っている子ども達が英語にふれていく場面でキャプテンやスタッフと共に歌やゲームを中心にして楽しく英語に親しんでいくことを通してさらに英語を知りたいという意欲を高めることができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
10'	導 入	1.Greeting -How are you ? 2.Songs and Dance -ABCの歌	・元気よく ・全身で	歌の歌詞
25' 10'	展 開 (1)	3.Let's introduce yourself! -My name is ... -Song ・鉄腕アトム(替え歌) ・ Good Morning to You! & 自己紹介 4.Tresure Hunt -宝探し- -I like...,I want... -宝探しゲーム	・スタッフの自己紹介 ・歌にあわせて ・あいさつの言葉をか えて、うたいながら自 己紹介をする ・グループごとに分か れて、指示を示した紙 とスタッフの助けによ って宝を探し当てる	歌詞: ・鉄腕アトム ・ Good Morn- ing to You ・指示(ヒ ント)の用紙 ・宝物(おか し)6袋
10'	休憩	(休 憩)		
30' 30'	展 開 (2)	5.Animals -Memorising the names of the animals (practice) -What animal am I ? (Game and Practice) 6.Games -Hunting Game -Duck, Duck, Goose.	・ピクチャーを使って 動物の名前を覚える ・ゲーム感覚の練習に よって覚えさせる ・動物のジェスチャー ゲームをする ・Hunting Gameのルー ルをわかりやすく教え デモンストレーション してみせる ・I want..を使わせて みる ・ハンカチ落としの要 領で!	・動物のピク チャー(7種 類) ・動物のカー ド(3セット) ・体力!
5'	ま と め	7.感想、アンケートを通して本 時をふりかえる。	・所定の用紙に感想等 記入してもらう	・用紙

小麦粉粘土・わりばし鉄砲

坂本真哉（理科3年） 奥原克水（国語科3年）

1. YOU遊サタデーと教育実習

私達キャプテンの二人は、ちょうど教育実習を終えたばかりで、このYOU遊サタデーに参加した。子ども達の考え方や力量について、少なからずの情報を持って授業ができることは安心感と自信につながった。それは、子どもにとっても、また、子どもを参加させている御両親にとっても、頼もしいことではなかっただろうか。教育実習で、子どもに対する指導の方法として学んだように、言葉の一語一句に至るまで、気を遣って子どもと接することも大切だったと思う。

YOU遊サタデーも教育実習によって、より意味深いものになったと言えるだろう。

2. 授業づくりの着想とねらい

この授業は、決して珍しいものではなく、日常生活で何気なく使っているものを利用して、何か作ることにはできないかということから考えてみたものである。子ども達にとっても、自分達が普段何気なく見ているものから、思いがけないものができる過程を知ることは、驚くべき体験となるだろう。そして、その「驚き」がひとつのきっかけとなって、授業における意欲的な活動につながり、さらに、それまでとは違った目で、日常生活をも眺められるようになればよいと考えた。

私達キャプテンの二人は、大学のサークル活動を通じて、「小麦粉粘土」というものを知ったが、「小麦粉」で「粘土」を作るという発想は、私達をして「驚き」に値するものだった。そこに、昔ながらの「わりばし鉄砲」を加えて、私達が感じた「驚き」を、少しでも多くの子どもに伝えたいと思って、実際の授業に臨んだ。

3. 子ども達の取り組みの様子

この授業において、子ども達は、私達の予想以上に「意欲的」な活動を行っていた。一生懸命に「小麦粉」を練っている子ども達の目は好奇心に満ちていた。一体これから何ができるのだろう、とか、この粘土で何を作ろう、とか思いは様々だったようだが、どの子ども達も期待に胸を躍らせてくれていたようだった。中でも、私達を驚かせると共に、ある意味で感動させてくれたのは、一人の女の子のことばだった。

「私、馬を作ろうと思って、家で調べてきたの。」

その女の子は、家からこの授業に対して、少なからぬ期待を抱いてやって来てくれたのである。そして、私達も感嘆するような立派な「馬」を作っていた。

時間的な関係から、「わりばし鉄砲」の方は、補足的なものとなってしまったが、初めて作るという子どもが多く、四苦八苦しなながら作っている姿がとても印象的だった。そして、完成した鉄砲で、私達が用意した人形を撃っているのも、楽しそうであった。

本当に、予想以上に喜んでもらえ、「また来たい」と言ってくれる子どもがいてくれたことが、何よりも嬉しかった。

4. 反省と今後の課題

子どもにマンツーマンにつかないとうまく作業が進まないことが分かった。今後はスタッフにもやり方を覚えてもらわなければ、より多くの子どもには対応できないであろう。今後も、子ども達の期待に応える形で、この「小麦粉粘土」と「わりばし鉄砲」の授業がより発展していくことを願う。

タイトル 小麦粉粘土・わりばし鉄砲	平成6年 11月12日 (土)
キャプテン 坂本 真哉 (理科3年) 奥原 克水 (国語科3年)	指導教官 伊藤 武

1.ねらい

子ども達が身近にある材料を使うことを通して、普段の生活の中でも工夫すれば遊びにつながる発見があることに気づき、それを使って作品を作ることができる。

2.展開

時 間	過 程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
15分	説 明 自 己 紹 介	各自自己紹介をする。 諸注意及び手順の説明。	キャプテン、スタッフ、子ども達全員の自己紹介。また、各机につくスタッフをいう。細かい点は各班スタッフに聞くようにさせる。スタッフが分からないことは、スタッフがキャプテンに聞く。	ビニールシート バケツ2個 ごみ箱 ビニール袋 新聞紙5日分 食紅、小麦粉 酢、紙コップ 絵の具、画用紙
80分	製 作	各々小麦粉粘土を作る。 小麦粉と水、酢を机の上でこねる 小麦粉に着色する。 形を作る。	こねるのが難しいと思われる子どもにはスタッフが手伝う。 こねる中で、子ども達が小麦粉粘土で何を作りたいか、願いをを持たせる。 各班スタッフ、キャプテンが食紅を一本ずつ持ち、混乱を避ける。また、食紅を入れる量はキャプテン、スタッフが行う。 各班で作品をみて回るようにいい、全体の前での発表は希望者のみとする。	セロハンテープ ガムテープ 洗面器 割り箸 輪ゴム、石鹼
20分 10分		わりばし鉄砲を作る。 片付けをする。	片付けさせる。	

やさしい木工教室

片桐 宏 (技術科3年)

1. 授業づくりの着想とねらい

当初は竹馬づくりの予定だったが、加工性・材料入手の観点から、板材を使った簡単な木製品(本立て・小箱・壁掛け)の製作へ変更した。木材加工は中学校技術・家庭科で男女必修で学習するが、①木の肌触り・香り・ぬくもりを感じてもらおう、②「のこぎり」と「げんのう」について知ってもらおう、③木材工作の楽しさを味わってもらおう、というねらいで今回は授業を構想した。木材加工の「予習」的内容にどうしても類似してしまうが、できるだけ子どもに多く活動を味わわせてあげ、完成品に近いものを持ち帰ってもらいたいと考えた。子どもがダイナミックに活動するためには、まず第一に安全面での保証がされなければならない。そして、子どもの「こういう形のものを作りたい」という欲求に十分応えうる技能面でのバックアップがなければならない。以上の観点から、技術科3年生の同志の協力を得て、マンツーマンの指導を行うことにした。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習では、中学1年生の木材加工の領域で研究授業を経験させていただいた。その中で、教師が一人ひとりの生徒の作業進度・技能面を把握することの難しさを痛感した。今回の「やさしい木工教室」では、一人の子どもに一人のスタッフを配置し、まさにマンツーマンの指導体制を確立できた。構想の段階から完成まで、その子のねがいを実現してあげられるように、道具の使い方や加工・組み立て時の補助等、親身になって関わったことは、子どもにとっても、私達指導する側にとっても貴重な経験になった。学校教育の場では、本当のマンツーマン指導は不可能に近い。しかし、できるだけ多くの子どもにできるだけ多く関わることによって、「個」に対応した指導へ、より近づくことができるのではないかと感じた。

3. 子ども達の取り組みの様子

それぞれの子どもが自分の本立てのデザインを考え、のこぎりで板材を切断し、げんのうを使いながら組み立てたりと、短い半日間だったと思う。本当に子どもたちが失敗を恐れずにダイナミックに活動できたか、いささか疑問も残るが、中には中学生顔負けぐらいにのこぎりびきの技能が高まった子どももいて驚く場面もあった。どの子も、完成近くになると、黙って仕上げをするスタッフの作業をじーっと見て、完成品を手にとると満面の笑みを浮かべてくれた。他の何にも代えることのできない瞬間だった。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

今回スタッフを担当してくれた仲間はアシストを快く引き受けてくれた。気の知れている仲間であったので、当日は全てをそれぞれに一任した。一人ひとりの持ち味を生かして、親切に指導・面倒を見てくれた。大げさかもしれないが、それぞれが「やさしい木工教室」を通して実習の成果を試したり、それを実際に実践することができたのではないと思う。又、全員無事故で終えたことはスタッフによるところが大きいと思う。

5. 反省と今後の課題

親も参加しての少人数ながらの企画であったが、参加した子どもの親からのお礼の手紙・アンケートの感想を見て、ほぼ成功したのではないと思う。しかしながら、製作品の精選、時間配分、会場の確保等、検討すべき課題も残った。来年度の課題としたい。

タイトル やさしい木工教室	平成6年 9月10日(土)
キャプテン 片桐 宏 (技術科3年)	指導教官 杵渕 恭宏

1.ねらい

木のぬくもりやにおいを体で感じながら、のこぎりを使って材料を切断してみたりげんのうを用いて釘で接合したりすることを通して、木材工作の楽しさがわかるようになる。

2.展開

時 間	過程	学習内容と活動	学 習 指 導	材 料
9:00		参加者とキャプテン及びアシスタントが簡単な自己紹介をする	・和やかな雰囲気になるようにする	
9:15		「やさしい木工教室」の主旨と制作作品について理解する	・木のおいやぬくもりを肌で感じながら、のこぎりを使って切断し組たてる、おおまかな流れを理解させる	のこぎり げんのう 板材
9:25		のこぎり及びげんのうの使い方について理解する	・のこぎりの大まかな特徴と、切断する時の刃の選び方を説明図を用いて理解させる ・実際にのこぎりを用いて示範する ・のこぎりの扱い方についての注意事項は黒板に板書しておく	説明図
10:00		制作活動が始める ①切断 ②釘又はボンドによる接合	・製作物の違いによって分かれ、アシスタントの指示に従い制作活動に入る ・けがき線のどこを切るかなどは年齢に応じて対応する ・大きな誤りは、アシスタントが修正するが、小さなミスは気にせずに、ダイナミックに工作させる。 ・接合の際、板を押さえたりする必要がある場合は、援助する。	くぎ キリ 木工ボンド 麻ひも サト*パ*パ-
11:45		後片づけとまとめ	・後片づけをさせ、作品や意見、感想を発表させあう ・できた作品をさらに見栄えよくするために、素地磨き、スプレーによる塗装などの手法を知らせる。	

お弁当箱の袋作り

横川 瑠恵 (家庭科4年)

1. 授業づくりの着想とねらい

「小学校の家庭科で学習する範囲で、子どもが興味を持って取り組めるような題材はないだろうか…」そう考えた時、自分自身が小学校の時に製作したお弁当箱袋が頭に浮かんできた。作り方はとてもシンプルなのだが仕上がりは巾着風のかわいい袋になり、しかも丈夫なので当時作った袋は今でも大切に使用している。今回の授業では、そんな自分の体験から、子どもに自分で製作する楽しさと、「私でもこんなに立派なものが作れるんだ」という自信を持ってほしいと考えた。また同時に、製作したものに愛着を持ってずっと大切に使いついでいきたいという気持ちになってほしいと考えた。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

物を製作しようとした時、目の前に材料と仕上がりを見本だけあっても、その製作過程が分からなければ容易に作品を仕上げることはできないものである。特に布は紙のように簡単に切ったり貼ったりできないものであり、また、布を裏返したり戻したりしているうちに頭の中が混乱してしまうことがよくある。教育実習では、製作過程が複雑なズボンの内ポケットの見本を、段階を追って作り、説明を添えて机の上に並べて置いてみた。こうすることによって、子ども自身が各自の進度に合わせて、見本と自分の作品を照らし合わせながら作業を進めていくことができた。

3. 子ども達の取り組みの様子

今回私の授業に出席した子どもは小学校五年生の女の子一人きりであったので、一对一の授業となった。子どもは見本の袋を見てから自分が持参した布を私に見せ、自分が表にしたい方の布はこっちだと示したので、希望に添って作業を進めていった。その子どもはまだ学校でミシンの学習をしていなかったが、ミシンを恐れるどころか興味を持って作業に取り組み、予定では一日かけて行うはずの授業が半日で終了してしまっただ。市販の物に見劣りしない仕上がりに子どもも満足した様子で、帰り際に「お父さんにも作ってあげるんだ」と言いながら、作った袋を大事に抱えていた姿がとても印象的だった。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

今回は子どもと私の一对一の授業であったため、スタッフのお願いはしなかった。しかし、子どもが大勢になった場合にはスタッフとのチーム・ティーチングという方法をとる必要があると考えられる。その場合には事前にスタッフとよく打ち合わせを行い、子どもが混乱しないように進めていく必要があると考える。

5. 反省と今後の課題

大勢の子どもを相手に授業を行おうと考えたときに、今回のように一人の子どもにつきっきりで教えることは不可能である。実技の授業は一人一人の進度がバラバラであるため、どうしても作業の速い子・遅い子がでてきてしまうのだが、全員がなるべく同じ条件で学習していけるようにするにはどうしたらよいか、また、子どもが興味を持って取り組めるような題材作りができるよう、自分自身これから経験を積んだり技術を磨いていくことが大切だと今回の授業を通して改めて感じた。

タイトル お弁当箱の袋づくり	平成6年 9月 10日(土)
キャプテン 横川 瑞恵(家庭科4年)	指導教官 萩原 応至

1.ねらい

子ども達が、お弁当箱の袋をミシンを使って製作することを通して、製作することの楽しさと作ったものへの愛着心を持つことができる。

2.展開

時 間	過 程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10	導 入	キャプテンと子ども達が互いに自己紹介しあう。	見本の袋を提示し、子どもがゆっくりと見る時間をとる。	袋の見本
9:20	準 備	ひと通り見終わったら、袋の作り方の説明を行う。袋ができるまでの、段階を追った見本を見せながら説明する。	見本を見せるときは、製作の流れが分かるようにゆっくりと説明を行う。	製作段階を追った見本と、その説明用紙
	説 明	製作に入る前にミシンの説明を行なう。(上糸のかけ方・下糸のセット・上糸調節の仕方) アイロンの使用についても同時に行う。	実際に子どもに上糸をかせせたり、下糸をセットさせながら説明を行う。(安全指導を含む) アイロンについては、コンセントの入れっぱなし及び火傷などがないように注意を促す。	ミシン・アイロン・アイロン台
9:40	製 作	製作に入る。(布の端から1cmのところにしつけをかける。ミシンをかける。裏返す。) 裏返した後、端ミシンをかける。この後四隅を一辺13~15cmの三角形を作っており、ロープを通す輪を作る。最後にロープを通し、巾着を作る。	裏返した後、端ミシンをかけるか否かは子どもに選ばせる。ミシンがうまく使えない子どもには、指導を行う。しつけのかけ方、待ち針のうち方の指導を行っていく。	布・糸・しつけ糸 ロープひも
15:00	ま と め	出来上がった作品をお互いにみせあい、鑑賞しあう。(どんなところで苦労したかなども、発表しあう)	感想は、うまくいかなかった部分だけではなく、うまくできたところ、楽しかったところも発表してもらう。	

ビデオカメラに挑戦

筒井 和之（美術科4年）

1. 授業づくりの着想とねらい

かつて映像制作は、一部のプロやマニアのものであった。しかし現在では機器の小型化、低価格化により、誰でも映像制作を日曜大工気分のできる時代になっている。「これを教材化できないか。」自分が映像制作の勉強を進めるうち、そんなことを考えるようになったのは、94年の4月頃である。なぜならTV映像というものは、今の子どもたちのみならず、私達の生活の中に非常に身近になってきている。これをドラマであれ、ドキュメントであれ、子ども達が制作することで大きな教育的効果が狙えると思ったからである。

もう一つの理由として、映像制作には、様々なスタイルがあるという点が上げられる。一人ですべてを作るやり方もあれば、大勢で一つ一つの作業を分担して行うこともある。学校に置き換えれば、個人で、クラブで、学校で、それぞれの状況に合わせて教材としての映像制作が可能である。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習といっても遠い昔の話である。当時の記憶をたどれば、ビデオカメラを行事などの記録用に使っておられる先生方はいらっしゃったが、自分で撮影したものを授業の中で使ったり、子ども達に使わせている例はなかったように思われる。映像製作を学級で行うとなれば、教師にはディレクターもしくはプロデューサーとしての手腕が求められる。加えて学校の先生方は例外なく多忙である。映像制作は時間がかかるものである。現行のカリキュラムの中では取り入れにくいのが実状ではないだろうか。実践報告例もかなり少なく、あったとしても、2～3年という長い時間をかけたものばかりである。YOU遊サタデーという比較的、制限の少ない実践の場では生徒が何人であろうと、自由なセッティングが可能だった。ましてや受講生はたったの一人だったので、ビデオジャーナリストのような、すべてを一人でこなすやり方をベースに、小6に合わせて指導する事となった。言うまでもなく、教育実習ではこのようなケースはまず設定できぬだけに面白味があった。

3. YOU遊サタデーでの子ども達の取り組み

受講生が一人だったために、彼のペースにあわせて進めることができた。なるべく制限は少なくなるように努めたが、時間や機器の上での限度があったために、最後の編集まで手が回らなかったのは残念である。しかしながら、その制限なしの自由さが功を奏してか、彼はとてもうれしそうに撮影に興じていた。カメラを回す者のみが味わえる快感を十分に味わっていたようである。

4. スタッフとのチーム・ティーチング

一対一の授業であったため、この形は取っていない。スタッフの尽力には感謝したい。

5. 反省と今後の課題

本来、3回連続、1日をフルに使った授業の形をとったのだが、実質上、生徒の都合や私自身の体調などの関係で当初の予定の半分しか授業が行われていない。撮影は終了しているが、編集、タイトル作りなどに達しなかったため、撮影の楽しさを味わうことはできたが、映像制作の本当の楽しさを教えてあげられなかったことが悔やまれる。もう一つにはコンセプト的にはとても面白い企画ではあったのだが、私自身の映像制作経験の未熟さもあり、子どもにわかりやすい説明が欠けていた部分もあったことは否めない。そのため子ども自身のアイデアや、力量を十分生かしきることができなかった。いろいろ反省点はあるものの、初めての試みである。ここでの体験を生かして次へつなげていきたい。

タイトル ビデオカメラに挑戦	平成6年 9月10日(土)
キャプテン 筒井 和之(美術科4年)	指導教官 関 信一

1.ねらい

身近になってきたビデオカメラを使用して、映像制作全般を体験し、基礎的な撮影技術、編集技術を身につけ、映像制作の楽しさを実感する。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:00	導入	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いに自己紹介の後、ビデオ制作の経験を尋ねる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参考映像を観てもらい、Hi8でどこまでとれるか知ってもらおう。 	モニター 再生用デッキ 参考映像
11:40 13:00	操作 体験	<p>(基本操作の説明)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モニターを通して、映像を確認しながら、構図の勉強をする。 ・自分出実際に操作してみて、ズームや、パンの感覚を知る。 ・手ぶれを防ぐための技術を体験し、きれいな映像をとれるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもに実際に操作してもらい、感覚的に覚えてもらう。モニターしながらの学習で効果をあげる。 ・午前中に基本技術は一通りマスターできるように子どもの技術、体験に応じて配慮する 	カメラ、三脚
13:00	作品 構想	<ul style="list-style-type: none"> ・3日間を通してどんな映像を制作するか考え、その構想を練る。 ・10~15分の映像(それぞれの投量により前後するが)シーンの流れを構成表にまとめていく。 ・絵コンテの作成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・かつての私の作品やそのために使用した絵コンテ、構成表を見てもらい、流れをつかんでもらう。 ・条件から考えて、大学構内探検ものがよいと思う。 	コンテを描くための用紙 構成を整理するための用紙
14:45	撮影	<ul style="list-style-type: none"> ・構想をもとに構内で撮影に出かける。 ・素材集めなので、長めに撮影、納得のいくショットを撮れるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・撮影補助をし、スムーズに行えるよう投術指導をしながらする。 ・2~3テイク分撮ったら教室に戻り、モニターで確認させ、ファイnderとの違いをよく見る。 	カメラ 照明 三脚、ドラム
15:15		<ul style="list-style-type: none"> ・撮影したものをモニターで確認 		モニター 再生用デッキ

けん玉で遊ぼう①

山口 直行 (数学科4年)

1. 授業づくりの構想とねらい

初めてけん玉に挑戦する子どもにとって最大の喜びは、まず玉を大皿に乗せることができる事である。大皿にのせることが偶然性によるものでなく、確実に乗せるようにするため、本時はけん玉を行う上での基本となる「けん玉の正しい持ち方A」と膝の使い方を学習し、とめ大皿・とめ小皿・とめ中皿までができることをねらいとした。他の講座と異なり成果が形として残るものではなく、技術として残る講座であるため「できる喜び」が実感できる授業を心がけた。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習では子どもの発言をできるだけ子どもの言葉でクラス全体に位置付けることの大切さを実感していた。そこで、展開の場面で「(けん玉を)初めてやってみて、どんなところがうまくいかなかったかな?」と発問する際、できるだけ子ども達の言葉を引き出し、子どもの言葉で位置付けるようにした。予想のできない子ども達の反応にいかに対応して行けるかが、私の課題であった。

3. 子ども達の取り組みの様子

けん玉講座には、小学校4年のAさんと年中のB君の2名が参加してくれた。

Aさんはけん玉を触るのが初めてで、最初はなかなか大皿に玉が乗らなくてあまり元気がなかった。ところが、うまくいかないところを自分で振り返り、どうすればうまくできるようになるかを考えることを通して、膝を使えばできそうだということがつかめると意識して膝を使うようになり、大皿に乗るようになった。また、スタッフの声援に応えるように私も驚くほどの上達をみせた。とめ中皿、とめ小皿もとめ大皿のように膝を使えばよいことに気づき、上達していった。それからは、スタッフと10回とめ大皿に何度も挑戦し意欲的に取り組んでいた。

B君はけん玉を持つ力がまだ発達していなかったため、手を持ちながらの指導となった。何度か大皿にのった時のあの笑顔は、忘れられない。Aさんとスタッフとの10回とめ大皿の時には、大きな声で数を数えてくれた。

4. スタッフとのティーム・ティーチングについて

今回は、スタッフにけん玉初挑戦の学生を入れ、子どもと共に体験してもらうことにした。スタッフだからある程度の技術を持っていないといけないという先入観があったが、むしろ今回の場合は、子どもの人数が少ないこともあって子どもの良き競争相手となり、子どもの意欲を引き出す結果となった。

5. 授業を通して学んだこと

けん玉を学習する際にも、いわゆる基礎・基本と呼ばれるものが如何に大切であるかを実感した。また、授業前はとめ大皿、とめ小皿、とめ中皿までができるようになればいいと考えていたが、Aさんはふり大皿、ふり小皿、ふり中皿までできるようになり、子どものうちに秘めた可能性のすばらしさを感じた。全体としては子どもに「できる喜び」を実感してもらえらる授業であったように思う。これからはさらに「できる喜び」の実感できる授業を心がけていきたい。

タイトル けん玉で遊ぼう①	平成6年 9月10日(土)
キャプテン 山口 直行(数学科4年)	指導教官 鈴木 次雄

1.ねらい

けん玉にはじめて挑戦しようとする子ども達が、けん玉の基本を学び、体全体を使って玉をのせる練習をすることを通して、とめ大皿、とめ小皿、とめ中皿ができるようになる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10	導 入	キャプテン・メンバーの自己紹介 学校名、学年、氏名、抱負を言う ◎けん玉の各部名称を説明する。 剣先、大皿、中皿、小皿、玉 糸の長さを調節する。	中皿と小皿は間違いやすいので正しく理解させる。	けん玉 各部名称の説明 模造紙
9:40	展	◎持ち方Aでできる技を身につけよう。 持ち方Aの正しい持ち方を説明 ◎とめ大皿をやってみよう。 手本を見せ、子ども達がまねる ◎はじめてやってみてどんなところがうまくいかないか。 ◎どうすればうまくいきそうかな ポイントを説明する ひざをやわらかく 玉をしっかり見よう 玉を引くようにうけよう とめ大皿ができるように練習する 同様にとめ小皿、とめ中皿に挑戦	持ち方Aの絵をはり説明する。子ども達一人一人が正しい持ち方をしているか見て回る うまくいかないところを発表させる。 方法を考えさせ、発表させる。	持ち方Aの模造紙
9:55	開		できるようになった子には、ふり大皿、ふり中皿、ふり小皿に挑戦させる	ポイント説明カード
11:00	発	◎もしかめに挑戦しよう 持ち方Aでできる技を披露する もしかめ、かじや、野球、サッカー	もしかめの手本を見せ練習する。ひざをやわらかく使うことをもう一度確認させる。	
11:40	展	次回の説明 持ち方Bでできる技に挑戦しよう		

自分のハンコを作ろうか

喜多 篤史 (社会科4年)

1. 授業づくりの着想とねらい

YOU遊サタデーで何をやるか、ということを考える際に自分が重要視したことは、自分自身が興味をもてるもので子ども達が学校では体験しないこと、という点である。そうした中で書道で使うハンコ(てん刻)を子ども達と作ってみよう、ということになった。てん刻は中学校まで扱われないので、書道に興味があり『てん刻を作りたい』と思った子どもか、あるいは、この話を聞いて好奇心をくすぐられた子どもが主体的に参加してくれれば、と思っていた。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連(授業を通しての収穫)

今回の授業では、参加生徒が1名とその母親の合計2名の参加であった。これは、

①2名という少数の受講者に対して授業を行う

②授業の中に保護者が含まれている

という点において教育実習とは授業の条件が異なっていた。

①の点では、要所要所説明を加えることによって受講者と関わっていたのだが、それだけでは間がもたず少し戸惑った。授業の内容からあまりこちらの方からいろいろと話しかけるのは好ましくないと判断し、また受講者が大変真剣に取り組んでいたので、あえて授業の雰囲気はこちらから作っていく、ということもしなかった。教育実習ではまず有り得ない状況であるが現実的にはこのような学校もある訳で、自分にとっては良い経験になったと思う。

②についても①と同様で、教育実習では経験していないため少し意識してしまった。やはり自分の授業を保護者に見られるというのは、少し照れ臭く、また子どもを預かっているところを直に見られていることによる緊張感があったため、自分らしい授業があまりできなかった。教育実習の研究授業とは質を異にするものであり、学校では授業参観も行うことを考えると、これまた良い経験ができたということになるのだが、正直なところ少し残念である。

3. 今回のYOU遊サタデーを通して

10月のYOU遊サタデーには前回は上回る多くの子ども達が参加した。参加した子ども達のきっかけはそれぞれ異なるであろうが、自分の授業に参加した子供のきっかけは以下のようなものだった。『9月のYOU遊サタデーに中学生の参加がなかったようなので、“それならうちの子どもを参加させよう”となって、この授業をすすめられてやってきた。(保護者)』この話の中からは、子どもが見えてこない。わざわざ松本から参加していたのだから子ども自身もそれなりの気持ちで参加していたと思うし、実際授業を通して子どものやる気は充分に感じられた。しかし、YOU遊サタデーという「企画」を見返したとき、自分はこの子どもの参加の過程についてやはり考えさせられてしまう。

自分は今回のYOU遊サタデーを通して、本当に多くのことを学ぶことができ、また考えるきっかけにもなった。その中でも一番の収穫は、新卒の教師でもベテランの教師でも同じだけの責任が課せられる、ということ強く意識するようになったことである。言ってみればプロ意識ということなのだが、この時期に意識できたことは本当に幸いである。このことは残された学生生活に活かしていきたい。

タイトル 自分のハンコを作ろうか	平成6年 10月 8日(土)
キャプテン 喜多 篤史(社会科4年)	指導教官 阿久津 昌三 市澤 要三

1.ねらい

自分のハンコを作る場面で、ハンコに様々な文字が使われているのに気づくことを通して、自分の好きなハンコを楽しく作ることができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10	導 入	いろいろな文字のかたちがあることを知る。 様々な彫り方のハンコを紹介するハンコの作り方及び注意事項の説明をする。	ハンコに使われている特定の文字について、多くの種類があることを見せる。 様々なハンコを見せる刃の入れ方や彫刻刀に注意するよう指導する	文字の見本 ハンコ 作り方の手順 注意を書いた 模造紙
9:30	展 開	自分の名前に使う好きな文字の形を選ぶ。 選んだ文字で自分のハンコを作る	あらかじめ数種類用意し、メンバーに選んでもらう。 彫刻刀に注意するよう促す。	メンバーの名 前の文字 彫刻刀 石、石を押 さえる台
11:20	ま と め	片付けをする。 自分の作ったハンコを実際に押ししてみる。(ハンコの押し方を実演しながら指導する) 作品の紹介をし、感想を述べてもらう。	ハンコの押し方を実演しながら指導し、メンバーにも押しさせてみる工夫した点、感想などを発表してもらう。	朱肉 ティッシュ 紙

おやつパラダイス①

井上 清美、佐藤 恵理（家庭科3年）吉田 亘志（特殊科3年）

1. はじめに

子どもの頃、学校から帰るとおかあさんがおやつを用意して待っていてくれた、そんな温かい思い出を持っている人も多いと思う。私自身も、春の野が芽吹く頃、母とともにヨモギを摘んで草餅を作ったり、こどもの日には、ちまき、七夕には七夕まんじゅうを作ったりした覚えがあり、今でも思い出して作ってみることもある。店頭には色とりどりに飾られたお菓子がおいしそうに並び、おやつは家庭で作らずとも市販のものが簡単に手に入る。しかし、市販のお菓子類には着色料や甘味料などの合成添加物が多く含まれ、成長期の子どもにはあまり望ましくないものもある。一方、手作りのおやつは安全であり、それに何より心のこもった温かさがある。そんなおいしいおやつが自分たちの手で作れたならば、喜びもおいしさもひとしおであろうと思い、今回の講座を計画した。また、核家族化が進み、祖父母と同居しない子ども達が増え、伝統行事と接する機会も減った今、行事や季節感と結びついた食文化を知ってもらいたいとも考えた。そこでお月見の少し後の日程だったこともあり月見だんごを作ることにした。

2. 教育実習の感想

教育実習では、つまづいている子どもへの接し方について考えさせられた。言葉をかけるだけでわかるようになる子もいれば、手を貸してあげなくてはわからない子もいる。初めて会った子ども達にとって一番よい方法を見極めるのはとても難しいことであった。しかし、子どもの作業をする様子をしっかりと観察し、子どもが今、何を考え、何をしたいのか、その子の気持ちになって考えるようにした。

3. 参加者の年齢格差について

子ども達は小1から中3までと年齢のばらつきがあり、男女混ざっていたため、どのように作業が行われるのか不安でもあった。しかし、おいしいおだんごを作りたいという願いは共通のものであり、グループごとに協力しておだんごをこねたり、丸めたりする姿が見られた。中でも、グループ内で年長者は年下の子に、難しそうな作業の手助けをしてあげたり、年下の子はお兄さん、お姉さんに習ったりなどの教えあい、学びあいが見られすばらしかったと思う。グループに様々な学年の子を混ぜたことによる効果だと思う。

4. 準備、当日の反省点

今回は3人のキャプテンと3人のスタッフでティーム・ティーチングを行った。連絡が徹底できず、前日までの準備に行き届かない点もあったが、当日は6人で協力して授業を行った。迷子になり泣いてしまった男の子もいたが、スタッフが話しかけながらその子のやる気を引き出してくれた。子どもは私たちが考えていたよりも作業に手間取ってしまうことが多く、最後のかたづけの時間が少なくなってしまった。きちんと片づけを終了するまで調理実習であることを伝えるべきだったという指摘をスタッフからいただいた。

5. 今後の課題

先のスタッフからの指摘を受け、後片づけまでしっかりできるような時間配分を考えなければならないと思う。今回は初めてで、子どもたちの能力や様子が予想できなかった点もあったため、次回からはより適切な時間配分がなせると思う。「先生、できたよ」と喜んで見せてくれた子どもたちの顔をまた見られるような授業を工夫していきたい。

タイトル おやつパラダイス①	平成6年 10月 8日(土)
キャプテン 井上清美(家庭科3年) 吉田亘志(特殊科3年) 佐藤恵理(家庭科3年)	指導教官 田巻 義孝 粟津原 宏子

1.ねらい

楽しくお月見をしたいと願う子ども達が、月見だんごを作ることを通して、友だち同士で協力しあい、活動することの楽しさを知り、自分達の力で、手作りのおやつができるようにする。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10		○今日行う活動を知る。 ・自分のグループを知る ・<低学年>上級生に教えてもらって仲良く活動しようと思う。 ・<高学年>低学年の子の面倒をみてあげようと思う。	○はじめの挨拶をし、全体の予定を説明する ・お月見に関する話をする。 ・料理の時のグループ分けをする。	お金200円
9:20	おいしい月見だんごを作ろう	○月見だんごを作る。 ・作り方のプリントを見ながらキャプテンの説明を聞く。 ・演示を見ながら、キャプテンの説明を聞く。 ・身支度、手洗いをした後、月見だんご作りを始める。 ・協力し合いながら仲良くする。	○作り方を説明する。 ・身支度、手洗いをきちんとするように指導する。 ・作り方を演示する。 ・グループごとに活動させる。 ・巡回指導をする。特に火と湯の使い方に気を配る。床も滑りやすいので注意する。	作り方プリント 米粉、砂糖 はかり 計量スプーン 計量カップ ボール 蒸し器 皿、ラップ 洗剤、スポンジ ふきん 台ふき
11:00		○後片づけをする。 ・みんなで協力してきちんと片づける。	○きちんと後片づけをするよう指導する。	
11:10	おいしいね。今度は一人でできるかな	○月見だんごを食べる。 ・みんなにも食べてもらおう。	○時間までに食べられない子には持ち帰っていいことを告げる。	
11:40		・感想カードに感想を書く。		感想カード

おやつパラダイス②

吉田 亘志（特殊科3年）

1. 授業づくりの着想とねらい

YOU遊サタデーでは、援助者となる私達学生自身が楽しくできる内容であることが最初の条件であった。その理由は自分達が楽しんでできるものでなくては、子ども達にその楽しさを感じてもらえないと考えたからである。更にはその題材は子ども達が好奇心をくすぐられ、得たものがその後発展する要素を含むものが望ましいと考えた。そこで、まだまだ台所に立つ機会の少ない男の子ばかりで、楽しいお菓子作りに挑戦してみようと考えた。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連（授業を通しての収穫）

今回の講座の教育実習との相違点は、行われる前にどのような子ども達がいるのか、その子ども達の特性は何であるのかなどの状態把握がほとんどなされていないことである。そのような状況では、子ども達がどこでつまずき、そのつまずきに対してどのような援助が必要であるのか全く予想ができなかった点が第一に挙げられる。そのため始まる前までに名前なり特徴なりをとらえる事が短時間の間に要求された。

第二に、第一に挙げられた問題の解決のために自分以外に7名のスタッフがいた事である。（子ども5人に対して一人の割合でつくことができた。）何から何まで一人という訳ではなく、スタッフそれぞれに役割分担をしたために子ども達の細かい点について細かく見ることができたといえる。

第三に、自分が実習では経験したことのない調理実習形式の講座だったことである。このことは大きな戸惑いとなって私に押し寄せた。家庭科の専門ではない私には自分の知識以外には頼るものがなく、何の応用も利かないということが分かっていたからである。子ども達の期待や疑問に応えられない事態が起こるのではないかと心配であった。

講座を開くに当たって、子どもの状態把握も大事であるが、子ども達が何の気兼ねもせず楽しめる状況（私達の知識や体制）作りが講座を開く側にとっての責任であると痛感している。

3. 今回のYOU遊サタデーを通して

本年度3回行われたYOU遊サタデーのうち、おやつパラダイスは2回目と3回目に開かれた。2回目はキャプテンは私を含め三人であったが3回目は私一人で行うことになった。一人で講座を作ることの大変さを実感し、実際の学校で教鞭をとられている先生方の大変さを垣間みた気がした。

このような企画に参加してくれる子ども達はみんな好奇心旺盛で自分達で盛り上げていってしまう雰囲気さえ見られ、子どもに支えられる授業のあり方の一つを感じた気がした。その様な中で、自分の役割を考えて見る必要性を感じている。その中で自分を最も苦しめたのは「YOU遊サタデーでしかできないこととは何であるか。」であった。特に自分がキャプテンをつとめた「おやつパラダイス」は単なるお菓子作り教室とは何が違うのかという点で深く悩まされた。現在もその結論は出ていない。自分らしさを出したい反面、出せないもどかしさも感じ、さらには、自分らしさを出す事がどこまで許されるのかさえわからないでいる。今回出会った疑問は何とかして次回のYOU遊サタデーまでには解決したいと考えている。

タイトル おやつパラダイス②	平成6年11月12日(土)
キャプテン 吉田 亘志 (特殊科3年)	指導教官 田巻 義孝 粟津原 宏子

1.ねらい

男の子がレアチーズケーキを作る場面で、キャプテン・スタッフや、仲間と協力し合って作ることを通して、楽しくレアチーズケーキを作ることが出来る。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:40	導入	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに分かれて自己紹介をする。 ・作り方の説明をし、演示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・演示を模造紙と併用し、示す。注意事項 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリームチーズ ・砂糖 ・生クリーム ・クッキー
10:00	調理	<ul style="list-style-type: none"> ・調理台に移動して、スタッフと一緒に作る。 各グループ毎に進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフが1グループに1人ずつつき、援助。 	<ul style="list-style-type: none"> ・バター ・ゼラチン ・ブルーベリージャム
11:00	片づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・できたものを冷蔵庫へ入れたら後片づけをする。 ・後片づけの大切さを考えさせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・クリームやチーズの具合など、スタッフが判断の援助をする。 ・泡立てなど、大変な作業を手伝う。 	<p>-----</p> <ul style="list-style-type: none"> 各班 ・ボール×2 ・へら ・泡立て器 ・なべ ・湯せん用の器
11:20	試食	<ul style="list-style-type: none"> ・後片づけの後、ケーキを冷蔵庫から出して、切って分配する。 ・試食をして、食器などの後片づけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタッフが枠から取り出し、切る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリント ・模造紙 ・皿 ・ホーク
11:40	まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・修了証をわたす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つくり方のプリント配布 	

消しゴムを作ろう

田中 忍 (理科3年)

1. 授業づくりの着想や授業のねらい

「スライム」の場合と同様のことを考慮し、今回の授業を計画した。

「スライム」もこの「消しゴム」も、どちらも大学の化学基礎実験で学んだものだ。それぞれ非常におもしろい実験であったが、特に「消しゴム」を自分で作ったときには、普段何気なく使っているものが「こんな風にしてできるのか!」と、とても感動した。

子どもが興味・関心を示すときの一つのポイントは、「身近なもの」である事だと思う。その点この「消しゴム」なら、きっと子ども達の興味を引きだし、やがて理科の楽しさへとつなげてくれるだろうと考え、今回の授業を計画した。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習で学んだ一番大切なことは、「予備実験の大切さ」である。予備実験を怠ったために、授業中何度もピンチに陥った。自分にとっては簡単な、ごく当たり前の実験なので、どうしても「大丈夫だ」と高を括ってしまう。しかし子ども達にとって、それは初めて出会う事象であったり、道具であったりするし、予想しなかったことが事故として起こってしまうこともあるのだ。特に理科のように危険な薬品などを取り扱い、一歩間違えば大事故につながるような教科では、事前の準備というのは非常に大切だということを、教育実習で学んだのだった。

よって今回は、前回よりも難しい作業を必要とすることもあり、何度も予備実験を行い、材料を何度も確認し、これで万全であると思っていた。ところが、それでも実際の授業が始まると手違いが生じてしまった。しかし、うろたえることなく、失敗に素早く対処できたのも、教育実習での経験のおかげであると思う。子ども達に混乱もなく、無事に終わってくれたことが何よりであった。

3. YOU遊サタデーでの子ども達の取り組み

作業の手違いにより、子ども達に大きな混乱はなかったものの、大幅に時間をとってしまい、「キャプテン、まだ消しゴムできないのー?」といった子ども達の声も聞かれ、申し訳なかった。加熱している間にと余興に用意しておいた「スライムづくり」が、子ども達の興味を引いてくれたおかげでその時間をかせぐことができ、助かった。

試験管を割って中の消しゴムを取り出してあげると、子どもたちは大喜びで、「これで本当に消せるの!？」と早速紙に書いた文字を消してみても、それが見事消えることに再び喜んでいた。一人ひとりが作った消しゴムは、本当に小さなものだったけれども、子ども達はそれを大事そうに紙に包んで持ち帰っていった。

今回も子ども達一人ひとりに、修了証の全文を読み上げて授与した。今回は前回よりも人数が増えていてとても大変だったが、「私のも全部ちゃんと読んで!」とせがむ子ども達や、満足げに修了証を受け取る子どもの顔を見たら、頑張ろうという気が湧いてきたのだった。

4. スタッフとのチーム・ティーティング

前回と同様、理科の学生に多く手伝ってもらった。理科以外の学生には、作り方やその原理を説明し、当日スムーズに動いてもらえるように配慮した。

作業の手違いが生じたものの混乱が生じなかったのは、各班に一人ずつ配置されたスタッフが、私の指示に従って、いやそれ以上にうまく動いてくれたおかげであった。子ども達に危険がないよう、また、こちらの不手際のせいで子どもたちの探究心がそがれないよう、うまく立ち回ってくれた。このような突然の事態にも落ちついて対処できたのは、スタッフとキャプテンとの協力体制がうまくいっていたおかげであると思う。

5. 反省と今後の課題

今回は反省すべき点が多々ある。その中でも一番ショックを受けたのは、父母の方々が書いて下さったアンケートの中にあつた「ピーカーってなに？ガラス棒ってなに？」という言葉であった。YOU遊サタデーには、小学1年生からの子どもが集まってくる。しかし私はそんな子ども達に対し、何の気もなく「ピーカー」「ガラス棒」といった言葉を使ってしまっていたのだ。一応それらの混乱を避けるために各班に必ず上級生を一人以上とスタッフを一人配置したのだが、それだけでは全く不十分であったようだ。

YOU遊サタデーでは、「教師と生徒」ではなく、同じ立場に立つという意味であえて「キャプテン」という呼び方をしているのに、私はちっとも子ども達と同じ立場に立ってはいなかったのだと自分に腹が立った。小学校1年生に、そんな実験器具の名前なんて分かるはずもないのに、軽く流してしまっていたのだ。

YOU遊サタデーには、実に幅広い年齢層の子ども達が集まってくる。私達はそのことをふまえた上で、どんな小さい子にも楽しく分かりやすくするように、子ども達と接していかなければならない。

タイトル プラスチック消しゴムをつくろう！	平成6年 10月 8日(土)
キャプテン 田中 忍 (理科3年)	指導教官 伊藤 武 漆戸 邦夫

1.ねらい 身近にあるものをつくろうとする場面で、普段何気なく使っているプラスチック消しゴムを自分達の手で作ることを通して、理科が身近にあることに気づき、また、物を大切にしようという気持ちを抱くことができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10	導 入	キャプテン,スタッフ,参加メンバーの自己紹介 プラスチック消しゴムの作り方説明	製作方法説明 注意事項	模造紙 ポリ塩化ビニル ジオキソメチレン CaCO ₃ 100mlビーカー ガラス棒 試験管 加熱器 冷却器
9:30	展 開	<製作> 1.ポリ塩化ビニルとジオキソメチレンを泡がでないようにゆっくり混ぜる 2. CaCO ₃ を加え、さらに良く混ぜる。 3.これを乾いた試験管に入れ、20分間加熱する(キャプテン所司)加熱している間にキャプテンとスタッフによる演示又は前回行った「スライムづくり」を行う。 4.試験管を取り出し、冷却してゴムを取り出す。	スライムについては前回と同様に行う。	
11:00	ま と め	修了証の授与 諸連絡		

自分の音楽をつくろう

佐々木美紀子（国語科3年） 花岡 正次（国語科3年）

1. 授業づくりの着想とねらい

6週間の教育実習を終え、感じたことの一つに、今の子ども達は、自分自身を納得できるように、表現することを難しく感じているのではないかということである。教材を与えられれば心から楽しくものを作ったり、絵を描いたりできるので、「やる気」もあれば「根気」もあるし、何よりも「学んでいきたい」「遊びたい」という気持ちがあふれていたことは見てとれた。その反面、あるねらいのもとに「休み時間にしたことを思い出して作文にする」という課題を出しても「何を書いていいのかわからない」「あったこと、やったことをどう書いていいかわからない」という子ども達が多かったのも事実である。そこで、自分を表現する方法の一つである「音楽」に触れることで、自分の納得のいくようなものを、型にあまりとらわれず新しく作り出していくという力をつけさせたいと考えた。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

私としては、子ども達自身が2つのとらえ方を異にしていると思っている。根本的には、子どももキャプテン自身も、体ごと心ごとぶつかりあって真剣に共に楽しく「遊び」をしていくという点では長い目で見ると同じだと思われるが、異なる点では、子どもは「学校」という現実の世界から解放されて来るといふ面がある。教育実習では学習指導案を作るときには必ず指導者としてのねらいがあり、子どもの実態と願いに基づいて授業を構築していくが、YOU遊サタデーでは、解放されていることによって、子どもが求め、期待しているものは教育実習の時よりもさらに大きく強いものだと思われる。だからキャプテンもその期待に応えられるようなものを目指して努力していくべきだが、ひとつ気をつけねばならないことは、あまりにもキャプテン側のねらいが曖昧になってしまってはならないのではということである。

3. 子ども達の取り組みの様子

参加した子どもは小学校3年生の女の子一人で、最初は大変緊張していた。「どのような曲を作りたいか」とたずねても「わからない」「何でもいい」という答えが多かったが、「何ができるか」という具体的な内容だとたどりつけるように、また押しつけにならない程度に「音符を自由につなげていこう」ということで進めていったところ、一曲一曲を嬉しそうに作っていった。また音をカセットテープへ確実に残すことで、作ったものが自分のものだと確認できていたようであり、キャプテン側としてもとても嬉しい気がした。しかし残念だったのは、キャプテン側も手探りの状態で音楽を作ることを考えているため、その女の子が自分の糧にできたかどうか自信の持てないことである。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

今回参加者が一人ということもあり、スタッフは置かず、キャプテンを二人置いた。「音楽をつくる」ことに興味はあっても、専門的な知識が足りないため、その点を補いあって工夫をこらすという努力をした点で二人キャプテンが入ってよかったと思う。

5. 反省と今後の課題

まず笑顔を決やさず、柔らかい雰囲気を出すことはよかったが、子どもがもっと取りかかりやすく、内容を精選しながら新しいものを作っていきような、やることがもっとはつきりしている講座にしたいと考えている。

自分の音楽をつくろう

佐々木美紀子（国語科3年） 花岡正次（国語科3年）

1. YOU遊サタデーと教育実習

私が教育実習で一番強く感じたことは、集団の中にある子ども達を全体としてみるのではなく、一人の個としてみなければならないということであった。「子どもが好き」「子どもと成長していくのがいい」という理由を柱に教師を目指していた私は、気付いてみると「子ども」という言葉で子ども達一人ひとりをひとまとめにしてしまっていた。このような実習での体験から、YOU遊サタデーでは、子ども一人ひとりの微妙な反応、気づきに注意しながら、やる気・楽しさをひきだせるように頑張りたいと思った。

2. 授業づくりの着想とねらい

自己主張－「自己を表に出すこと」が根幹にあった。親しい高校の先生のお話を伺ったら、最近の学生は考えを尋ねても、「別にない」と答えるばかりだ、ということであった。以前は言いたいことをどンドン言う学生がたくさんいたそうである。また音楽というものは特に、学校の授業では既成のものに従って歌ったり奏でたりするので、自分らしさを出しにくいものだという印象を持っていた。このような理由から、「自分の音楽」と銘打ち、好きなように音を出したりしてみることによって、自分独自の音楽を実感することで、音楽に対する興味・関心を持つことができることをねらいとし、構想を練った。さらなる願いとしては、他の場面においても、自分を積極的に出していけるようになれば、と考えていた。

3. 子ども達の取り組みの様子

今回の参加者は小学1、3年生の女の子各一人、4年生の男の子一人の計三人だった。まず、「さあ、自分の音を出してみよう」と言っても、最初は何をやったらよいか分からない様子であった。それは漠然としすぎた説明も原因であったが、人に聞こえてしまうのが恥ずかしいというような様子も見られた。思い出せば私も、小・中・高校いずれの時も人前で声を出したり、リコーダーを吹いたりするのは恥ずかしいことであったのを覚えている。最後には3人とも自分の満足のいく曲をつくれたと言って、盛んに録音したがってしたが、録音機器の不調で、その願いを果たせなかったことが、非常に残念であった。

4. 反省と今後の課題

「自由に」ということを意識して、指示をできるだけ減らすように努力したが、それが逆に指導不足になってしまった。はじめのほうではもっと積極的に指導して、まず音を出すことに対する緊張をほぐしてあげたいと思った。また、時間配分の点で、録音にもっと時間をかけたいと感じた。せっかくできた自分の音楽は、確実に残してあげたいと思う。

タイトル	自分の音楽をつくろう	平成6年 11月 12日(土)
キャプテン	佐々木美紀子(国語科3年) 花岡 正次(国語科3年)	指導教官 武田 時昌 久保 信男

1.ねらい

自分の音楽をつくることに関して、簡単な音階から曲をつくっていくを通して、曲をつくることの楽しさを知るとともに、音楽をより身近なものに感じることができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
12:50	導 入	○自己紹介をし、この時間の進め方を把握し、どんな音楽をつくっていくかを考える。 ・学習カードに氏名、学年、学校などを記入する。	・席はキャプテンと参加者を向かい合わせて、かたならない雰囲気をつくる。 ◎自己紹介をし、この時間は何をしていくのかを確認させる。	学習カード
1:00	展 開	○音をつなげてみよう。 ・どんな感じの音がよいか。(暗い、明るい、弾む感じ) ・それに合わせた音をつかむ。 ・徐々に長めの曲にしていく。 ・曲名を考えてみる。	◎まずは音の範囲を指定し、曲らしさを実感させる。 白鍵のみを使うとか、同一音で長短だけに注目させるとか。 ・子どもが出していく音を一緒に五線譜に残していく。	音階カード メロディオン 笛、鈴 キーボード カスタネット
2:10	ま と め	○できあがった曲をテープに録音する。 ・学習カードとアンケート用紙に今日の感想を書く。	◎発表用、記念用のテープをつくり、音楽を残す。	カセットテープ テープレコーダー 学習カード アンケート用紙

自転車大分解

小倉 敬 (大学院1年)

1. 授業づくりの着想とねらい

自転車は男女を問わず子どもから大人、お年寄りに至るまで幅広く乗られており、日常の足として多くの人が使っている。しかし、多くの人に使われているにもかかわらず、構造を知らなかったり、故障をしたとき簡単な修理もできない人が意外と多い。これはそもそも下手に分解してしまうと組み立てられなくなると思い、分解してみることはおろか故障しても結局自転車屋さん頼んでしまって構造を知る機会がなかなか無いとか、あるいは工具の使い方が分からないために結局なにもできないといったことが多いためではないかと思った。このことは子どもにもいえることで、大人が修理している姿を見て覚えなければ工具を使つての作業はできるようにはならない。

このようなことから子ども達に①自転車の構造を知ってほしい②工具の使い方を知ってほしい③再度組み立てなくてはならない責任なしに思い切って細かいところまで分解して構造を知ってほしい④できればこれらの構造の知識を応用して簡単な修理ができるようになってほしいと思い、『自転車大分解』を取り上げた。

2. YOU遊サタデーでの子どもたちの取り組み

子どもたちは自転車を分解することに対して積極的であった。特に女の子の作業が予想以上に意欲的であったのには驚いた。子どもの中には工具を持つのも初めてという子がかなりいたので基本的な使い方を指導したが、適当な工具を使わず無理に壊してしまう子どももいて、その注意も必要であった。実際に分解させると、意外と早く分解されていくのには驚いた。しかし、分解が少し難しくなると嫌気が差してしまふらふらとしている子がいたり、分解が途中でも「終わったけど次にするの」と聞いてくる子どもがいたことから、分解することの意味がまだよく理解できていなかった面もあった。また、自主的な意欲に任せたが分解が終わってから今度は逆に組立にかかる子どももいた。

結局みんなが組み立て直しにかかったものの、2組ほどが元のように組み立てたのを除きほとんどは組み上げ途中で作業を終えた。

3. ティーム・ティーチングについて

ティーム・ティーチングをするには、やはり他のスタッフも自転車のことを知っていることが望ましいのはもちろんだが、今回逆にあまり自転車のことを知らないスタッフと子どもが同じように考えたり喜んだりしている姿を見て、特に女の子などには精神的に威圧感のない気楽な雰囲気できたことからよい効果もあったと思う。

4. 反省と今後の課題

私は、本当はこのような技術の習得が一日でできるとは思っていない。この授業に参加したことで自分でやってみようというきっかけになってくれればよいと思っている。職人的な手仕事に対して子どもは魅力を持つものなので、まずそのような姿を見せたい。そして、自分で修理したり作ったりすることから、一部が壊れたぐらいでたやすく物を捨てたりしない、そんな子どもになってほしいと思うし、そのような影響を子どもに与えたいと思う。

タイトル 自転車大分解	平成6年 10月 8日(土)
キャプテン 小倉 敬(大学院1年)	指導教官 赤羽 貞幸 浅輪 光男

1.ねらい

特に壊してしまっても差し支えのない自転車を思い切って分解することを通して、自転車の構造を知り、できればその知識を応用して修理することができるようになる。

2.展開

時 間	過 程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10	導 入 ・ 説 明	自転車分解の目的の説明 使用する工具の基本的な使い方 特に危険な分解箇所 ペアの決定	構造を知ることが目的 であることを伝える。 (ただバラすのではない) 工具を初めて使う子ども達のために、名前と 使用法を教える。 特に危険な箇所を十分に理解させる。	自転車概図 工具
9:30	分 解	分解 ↓	部品はきちんと並べる よう指導する。 巡回して手を貸す。注意を促す等の指導をする。	
	昼食 分 解 ・ 組 立 て	昼食 ↓ 進行によって分かれる。 ↓ 逆に組み立てる。 ↓ 終了		
3:00	片 づ け	工具の片づけ。部品の整理。手洗 集合して感想、反省。	部品を整然と並ばせる	せっけん

ポストカード作り

中村 典子 沢田 良子 (美術科4年)

1. 授業づくりの着想とねらい

図画工作の授業で「絵を描く」ことにこだわり、そして絵の「上手・下手」にとらわれている子ども達の姿を見て、「絵を描く」ことはもっと楽しく、自分の感じるままにできるものであることを知ってほしいと思った。そこで、モダンテクニックという技法を扱う事によって、頭ですべては計算できない部分の楽しさや偶然できる模様的美しさ、そして失敗の無いものの楽しさを感じてほしいと考えた。自分ではがきを切り、色をつけて出すということをするのは、楽しいと私達自身が感じていたということも理由の一つである。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習では教室にしばられたり、一つのことを追究するということがあったが、教室から離れたり (Open space?)、いろいろな教材にふれられ、また、自分で選ぶことができたらしいと思い、参加させて頂いた。しかし、それがまた少し配慮の足りないものになったかもしれない。教材が少ないこと、他学年との交流をあまり経験しなかったこと、選択の幅が広すぎて追究していくのが困難であったことなどの反省がある。

3. 子ども達の取り組みの様子

もっと騒がしくなるのかと思ったが、真剣に取り組んでいたように思う。ただ、人数が多く、その割に教材が少なかったため本当に自分のやりたいことができたのかどうかは疑問である。しかし、その分、人との譲り合いや、順番を守ったりすることができたようにも思う。つまり、個人製作に従事するだけでは得られないことが得られるともいえるのではないか。集団ということに着目するのと、まったくの個人に着目するのではやはりかなり違いがあると感じた。使ったテクニックは、「にじみ、ぼかし、ふきながし、コラージュ、マーブリング、ステンシル、デカルコマニー」等であったが、子ども達にはやはり、少し難しく、そのためにきれいな模様が作れるマーブリングが一番魅力的であったようだ。どの子も一度はマーブリングをしてみたいと願ったらしく、常に誰かが挑戦していた。しかし、でき上がったものは私達がやってみせたものとはやはり少々違うものになってしまい、首を傾げていた子もいた。そこで、「自分の手作り」なんだということをもう一度いってあげると、満足そうにしていたのが印象的であった。最後に自分の作ったハガキを出すということで切手を貼る場面では、子ども達は楽しそうで、自分の住所をすっかり何度も書き直していたりした。心がこもっていてよかったし、無事に着いてくれることを祈る思いである。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

キャプテン2名、スタッフ2名ということであったが、スタッフにはキャプテンと同じだけのことができるように頑張ってもらった。会場のこと、教材のこと等皆で話し合いながらできてよかったが、それぞれの意見があり、その中でどれを選択するかが難しかった。

5. 反省と今後の課題

とにかく取り掛かりが遅く、最後の最後まで迷っていることがあったりと、皆さんにたいへん迷惑をかけてしまった。今後は早めに計画性をもつことと、自分のひとりよがりのものにならないようにすることが大切だと思う。

タイトル	ポストカード作り	平成6年 10月 8日(土)
キャプテン	中村典子(美術科4年) 沢田良子(美術科4年)	指導教官 上田 秀洋 関 信一 関谷 俊行

1.ねらい

モダンテクニックを使って、ポストカードを作ることを通して、表現の偶然性や、そのおもしろさに気づき、自分のポストカードを作ることができる。

2.展開

時 間	過 程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
12:50 13:00	モダンテクニックを知る	○自己紹介をしよう。 ○モダンテクニックがわかったぞ ・モダンテクニックって何だろう。 ・やり方を覚えよう。 ・どんなものができるかな。 モダンテクニックを使ってポストカード 作ろう。	○モダンテクニックを 実際に提示する。 デカルコマニー ぼかし マーブリング コラージュ スクラッチ など	雑誌、のり ポストカード ぼかしあみ マーブリングハット はさみ、カッター 釘、墨、クレヨン 紙
13:15	実際に してみ る	○実際にモダンテクニックをやっ てみよう。 ・意外に難しいぞ。 ・思っていたものができない。 ・変な模様が出ておもしろいな	○やり方がわからない 子どもには個別に指導 する。 ・子供が作ったものを 発表させる。	
14:00	ポストカ ードを作 ってみ よう	○ポストカードを作ってみよう。 ・年賀状をつくってみたい。 ・変形のポストカードを作ってみたい ・ポストカードの図案にあわせたテクニ クにしよう。 ・どんな模様が使えらるかな。 ・誰に出そうかな。	○ポストカードを提示する ・1年間に送られる儀 礼的なポストカードを紹介 する。 ・2種の組み合わせを 紹介する。 ・「だれに送りたいか な」と送り主を決めさ せる。	ポストカードを作 っておく。 年賀状、寒中 見舞、暑中見 舞、残暑見舞 クリスマスカード、ハ ートカード 切手、住所の 用意
14:45	発表し てみよ う、送 ってみ よう	○皆どんなポストカードを作った のかな。ポストカードを送ってみ よう。(家の人に送ろう) ・今度作る時は違った表現をし てみたい。	○発表させる。 ・工夫した点などをと りあげ、今後の工夫に 期待する。 ・ポストを作り、そこ へ入れさせ郵便局へ持 っていく。	ポストを作る
15:10		○片づけをしよう		

教育学部ってどんなところ

宮沢 弘至（大学院1年）

1. 授業づくりの着想とねらい

近年教育学部に進学したものの、教職を志望する者がだんだんと減少しているという現象が多く見られるようになった。この背景として自己の適性を見つめて教育学部を選択するというのではなく、センター試験の成績段階によって教育学部を選択せざるを得なかったという者が増えてきていることが考えられる。これではせっかく教育学部に学んでも、この学部の特徴を有効に活かすことができない。私の周りにも教職への志がなく、大学生活をないがしろにしている友人を何人も見ており、常々残念に思っていた。

そこで、高校生が大学学部を選択する際の一助にもなればと思い、学生生活の体験をもとに教育学部の実情を紹介しようと考えて本講座を設定した。

2. 授業内容と方法

参加してくれた高校生の自主性を最大限に尊重していきたいと思った。そして、教育学部に進学したいという意欲をもっている高校生に、将来の大学生像を具体的に描き夢をもてるようにしてあげたい。このような考えのもとに、始めの1時間は教育学部に進学するうえでの注意と心構えから話を始め、大学生がどのような研究に取り組んでいるのかを知ってもらうために、私の卒業論文への取り組みを紹介させていただいた。後半の1時間は個人面接の形で参加者の質問や相談に応じることにした。

10月8日の参加者は1人であったため、十分に時間をかけて参加者の気持ちを聞いてあげることができ、参加者も教育学部への進学に希望と確信を抱いたようであった。11月12日の参加者は20人と増えたので後半の面談はとても私一人では手に負えなかった。6人のスタッフの応援を得て、3人に1人の割合で対応することができた。それぞれのスタッフが自分の大学生活の経験を基に具体的に話したので、高校2年生を中心とした参加者に大学生の実態と自分の将来の姿を重ね合わせて見ることができたようであった。

3. 反省と今後の課題

反省点としては、11月12日の参加者が20名と増えたにもかかわらず、面談の際に必要なスタッフの確保を、当日手の空いた他のYOU遊サタデーのスタッフにお願いすればよいと安易に考えていたことだ。今回は応援に駆けつけてくれたスタッフが非常に協力的で、本講座の趣旨に添うような結果が得られたことは幸いであった。しかし、教育的配慮を行う上での準備の重要性を痛感させられる出来事であった。

今後の課題としては、今回の参加者が高校生のうちこの学部への進学志望者のみであったため、そのための進路相談的な性格が強くなってしまい、本講座の性格が限定されてしまった点である。というのは10月8日には「教育学部というのはどういうところなのか」という関心を持たれた一般成人の方も参加してくださったのだが、途中で退室されてしまった。なぜ退室されたのかについてその時は何も思わず、一人の高校生に注意を集中させていたのであったが、講座のタイトルのごとくもっとオープンにいろんな課題を持った参加者に対応できるようにすることも大切ではないか、地域に開かれた大学を強調する上でも重要なことではないかと思い、今後の検討課題として対処していきたい。

タイトル 教育学部ってどんなところ	平成6年 11月 12日(土)
キャプテン 宮沢 弘至(大学院1年)	指導教官 小林 輝行

1.ねらい

教育学部に対し、進学を希望する高校生およびどのような活動をしているのか疑問を抱いている者が、研究内容に触れ、相談を受けることを通して、学部の実態に迫ることができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
13:00	導 入	教育学部でどのような活動をしているのか、私の生活体験を通して教育学部で学ぶことの意義・内容を講義する。	教育学部は教員を養成する機関であることを前提にしながら、また参加者の関心も押さえつつ指導する。	
13:15	展 開	私の研究テーマである「信州教育」及び長野県の教育の歴史を話し、大学での研究内容・成果を講義する。	私の研究成果を紹介することを通して、教育学部でどのようなことがなされているのかわかるように指導する。	
14:15	発 展	今までの講義内容に対する質問及び、参加者の教師に対するイメージを聞く。	教師へのイメージを、今まで聞いた中でどのように形成したか発表してもらおう。	
14:30		入試に対する質問など、悩みに対して相談に応じる。	具体的なことに応じる	

クリスマスカード作り

宮尾 由美（音楽科4年）

1. 授業づくりの着想とねらい

学校では学べないもので、かつ子ども達が身近な物で楽しめるものをYOU遊サタデーで行おうと考えた。そこで、私が小学校の時に夢中になって遊んだ木工用ボンドを使って、クリスマスカード作りをすることにした。本来木工用ボンドは、木工製品の接着に用いるものではあるが、ここではそうした目的とは異なる「乾くと透明になる」という性質を用いて、いろいろなことに応用できるおもしろさ、不思議さを体得できるような授業を考えた。子ども達が木工用ボンドの新しい使い方を発見したり、友達にも木工用ボンドを使った遊びを教えたりと、この活動が今後につながることを願って授業に取り組んだ。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習では40人の子ども一人ひとりに目を配ることの難しさと重要さを思い知らされた。今回は学校も学年も異なる40人の子ども達からなる集団なので、果たしてこちらの意図していることが一人ひとりに伝えられるかどうか、という不安があった。また、チーム・ティーチングで授業をするのも初めてなので、うまくいくかという不安もあった。しかし、スタッフがリボンを持ってきてくれたり、落ち葉を集めてくれたりと、積極的に協力してくれ、私一人では不十分であることも克服できた。また、子ども4人に1人の割合でスタッフがついたおかげで、一人ひとりの子どもに光が当たるような授業ができた。だがキャプテンという全体を統轄する立場であったため、子ども達一人ひとりとの関わりは薄くならざるをえなかった。

3. 子ども達の取り組みの様子

木工用ボンドを使ってカードを作ることは初めて、という子ども達ばかりだったので、本当に誰の真似でもない、その子なりの感性でカード作りができたように思う。飛び出し式のカードやハート型のカードと形に工夫をこらしたり、木の実や落ち葉を効果的に使って立体的な絵のカードに仕上げたり、夢一杯楽しさ一杯の素敵なカードが何枚もできた。子ども達が家からビーズや木の実や落ち葉を沢山持ってきて、やる気まんまんでこの授業に取り組んでくれた。一時間半の製作時間は長いのではないかと危惧されたが、子ども達は夢中で製作していて「片づけを始めて下さい。」というのも、忍びない程であった。また、ひいらぎの葉がうまく付かない、白いペンがなくてサンタのひげができない、といった困難にぶちあたっても、周りの子が知恵を出し合い、協力的な雰囲気でも創造的な製作が行われていった。

4. 授業を通して学んだこと

子ども達の作品を見て、改めて子どもの創造力や発想は豊かだと感じた。最近の子どもは落ち葉や木の実などで遊ぶことが少なくなっており、物質的にも恵まれているので、自分から工夫して何かを作り上げる意欲も乏しくなっているのではないかと心配だったが、全くのとりこし苦労に終わった。自然と触れあう機会が減っているが、教師になったらいろいろな形で自然を授業の中に取り入れていきたいと思った。

タイトル クリスマスカード作り	平成6年 11月12日(土)
キャプテン 宮尾 由美 (音楽科 4年)	指導教官 飯田 忠文

1.ねらい

ポンドを用いてのカード作りやシール作りをすることを通して、ポンドを使って様々な作品ができることを知り、自分なりに工夫して楽しい作品を製作することができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:40		1, カード・シール作りの説明 カード ①画用紙に葉や花をおき配置を考える。 ②画用紙に薄くポンドを塗り、その上におく。 ③葉や花をのせた後、またポンドを薄く塗る。 シール 下敷きの上に水性ペンで絵を描き、その上にポンドを塗る。	・実際に葉っぱを使って、カードを作ってみせる。 ・見本を見せて、こんな風に仕上がるという例を示す。 ・ポンドは、薄く塗るほど早く乾き、仕上がりが早くなるというアドバイスをする。	・見本 ・葉や花など ・水性ペン ・画用紙40枚 ・木工用ポンド(小20個)
10:00		2, カード・シール作り開始 6・7人ずつテーブルに座って、テーブルごとに協力して作品を作っていく。	・つまずいてしまう事があったら、どうしたらよいか発問し、助け合って製作を進める。	
10:50		3, 作品完成・交流の時間 作品が乾くまで、ゲームをして待つ。	・乾くまで手を触れぬように注意する。	
11:25		4, 作品発表・アンケート 工夫した点、苦労したところなど、具体的に語ってもらう。	・今後の製作に役立たせるために工夫した点を言ってもらう。	・アンケート用紙
11:40		5, 修了証を渡し、解散	・友達に、作り方を教えること・交換・プレゼントを勧めて、この活動が今後につながるものにする。	

はりがね工房

小倉 敬(大学院1年)

1. 授業づくりの着想とねらい

クリーニングに出したとき洋服は、必ずといってよいほど針金のハンガーに掛けられてくる。このハンガーはちょっと服を掛けておくのには便利だが、たいてい使いきれずに持て余し、捨ててしまうことが多い。このような針金ハンガーではあるが、工作材料の針金として見てみると適度な太さと強度を持ち、日常の使用に耐えるモノを作ることができる。

現代は工業製品があふれ、必要なものは購入するというのが当たり前になってしまったが、自分で作ってみれば作れないことはないものも少なくない。例えば私は、ワープロを打つとき参考に見る本などを開いて立てておけるブックスタンドがほしいと思いいろいろ工夫して作って見たところ、案外実用に耐えるものが針金ハンガーを材料にしてできあがった。このようなことを子ども達に体験させ、自分がほしい日用品、あったらいいなあと思うモノを買うのではなく、身近な材料でまず自分で作ってみることができるようになってもらえればいいと思いこの授業を開いた。

2. YOU遊サタデーでの子ども達の取り組み

この授業は子どもだけでなく、父母の方も参加されていた。計画では始めに基本的な曲げや切断などを教え、簡単なS字フックを作った後、各自で好きなモノを作ることを考えたが、実際には自分の作りたいものをなかなか作れずに、S字フックを作っただけで済ませた子が数人いた。これは女の子に多かったのだが、原因としては使い慣れないペンチを使った作業が、私が思っていたよりも子どもにとって難しかったこと、そしてハンガーの針金が子どもにとっては加工が困難な硬い材料だったことがあげられる。しかし、これらのことが障害とならない父母の方々も熱心に自由に作品を作っていた。そのせいか午前午後と2回の授業を行ったが、父母の参加の多かった午前の方が子どもも熱心に作製していた。

3. 反省と今後の課題

このはりがね工房では材料の針金の硬さと、道具の使い方に慣れていなかったことから、子どもにとって、はがゆい作業になったと思う。しかし材料の堅さは、実用に耐えるモノを作るにはそれなりの強度が必要で、針金の堅さを落とすこともできないことから仕方がなかったと思う。ペンチの使い方をもっと教えた方がよかったかとも思うが、ペンチを半日で上手に使えるようになるのも難しいことなので、今回の授業がきっかけになって家庭でも気軽にペンチを使うようになればよいと思う。生活の場面ではペンチは日用品としてハサミと同じように使われる道具のはずだが、最近の家庭ではあまり頻繁には使う道具でもないらしい。ぜひ家庭でも道具を使って自分で工夫して作ったり直したりしてほしい。

私がこの針金ハンガーを使おうと思ったのは、材料としての強度もさることながら、何より安く、できればお金をかけずにモノを作りたかったからで、最初からリサイクル目的のために使った訳ではない。しかし本来の機能が壊れて捨てられてしまうモノから、材料としての価値を見だし、それを活用できれば、結果的にモノを大切にし資源を有効に使う事になるので、ぜひ子どもにそのような感覚も持ってほしいと思う。しかし、簡単にモノが手に入ってしまう現代では、新品の材料があるのに廃棄品を使うのは難しい。新品が無ければ使えないのは当然だが、新品はあるけれど使わないことは難しいと思った。

タイトル はりがね工房	平成6年 11月12日(土)
キャプテン 小倉 敬 (大学院1年)	指導教官 赤羽 貞幸

1.ねらい

日常ともすると捨てられてしまう針金ハンガーを使い、新しいものをつくりだそうとすることを通して、実用的なものを作ることができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:40	事前 説明	<ul style="list-style-type: none"> ・工具の確認、材料の確認をする ・事故防止の注意事項を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペンチ、軍手、はりがねの確認。なかったら貸し出す。 ・針金の先端にはくれぐれも注意する事 ・針金を切る時は無理に切らぬ事 	ペンチ 軍手 はりがね
9:50	製作 指導	<ul style="list-style-type: none"> ・針金を使った作品の紹介 ・針金の曲げ方の指導する。 ・針金の接合の方法を指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリントを用意し、配布する。 	プリント
10:00	製作	<ul style="list-style-type: none"> ・構想を立てる。 ・部品を考える。 ・組み立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紹介作品のまねでもよいと言う。 ・作業の方法を助言する。 ・作業の安全を指導する。 	
11:20	作品 発表	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作った作品を友だちに見せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実用品ならば使う場面を想定させるような飾りものは工夫したところ、美しい点を指摘するような声をかける 	
11:30	修了証 授与	<ul style="list-style-type: none"> ・修了証をもらう。 		修了証

壁画教室

竹川 紀幸（美術科3年）

1. 授業づくりの構想とねらい

子どもはどの子もすばらしい表現力を持っている。そしてその表現力を、何らかの形で実際に表現したいという欲求も同時に持ち合わせている。そこで、その手段としてなにか“大きなもの”をつくってみたいと考えた。はじめは、「プールを使ったマーブリング」や「不要物を使ったオブジェ」なども考えたが、初めての試みで準備期間も十分にとれないため、教室の壁と床に模造紙を敷き詰め、そこに自由に絵を描いて、自分の思いを身体で表現する「壁画教室」に決定した。

2. Y O U遊サタデーと教育実習との関連

教育実習とY O U遊サタデーとの最大の違いは、「自由さ」にあると思う。教育実習では他の学校に授業をさせてもらいに行く身であり、その学校の規則や雰囲気、また時間などによって少なからず規制されてしまう。教育実習に行って「教室中を紙で埋め尽くそう」という授業実践は、ほとんど不可能である。一方Y O U遊サタデーでは、ほぼ100%自分の思ったとおりの授業実践が可能である。本当に子ども達が楽しめる授業が実践できる場として、教育実習とはまた違った充実感が得られるY O U遊サタデーであると思う。

3. 子ども達の取り組みの様子

授業の実際は、教室が前日の正午まで使用されていたので会場準備が前日からになってしまい、当日の朝まであわただしく準備に追われてしまった。準備の段階で模造紙が足りなくなったり、絵の具をどれだけ用意したらいいかわからないまま本番を迎えてしまったのだが、そんな不安を吹き飛ばしてくれたのが子ども達だった。互いの挨拶も終わらないうちに「もう描いてもいいの?」と、うずうずしている様子。描き始めると、絵の具やマジックで壁いっぱい、床一面に絵を描き続ける子ども達。いつしか私達も、一緒になって絵の具まみれになりながら描いていた。2時間の長さを感じさせない子ども達の元気に助けられた、というのが正直な感想である。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

今回の授業は、スタッフ全員がキャプテンという感じで、みな積極的に子ども達とふれあってくれたと思う。今回のように、子ども一人ひとりに関わっていくのに、チーム・ティーチングはとても有効な手段である。Y O U遊サタデーでこそ活かされるチーム・ティーチングであると思うので、これからもスタッフの協力がカギになると思う。

5. 授業を通して学んだこと

今回、私がしたことは、紙を貼り、絵を描く道具を用意しただけである。こちらは表現の手がかりとなるものを用意しただけなのに、子供達は私の想像以上のものを表現してくれた。子どものパワーってすごいものだな、とつくづく感じる。また、今回はあわただしい、計画性もない授業だったのだが、もっと準備がしっかりしていれば、紙や絵の具が足りない、という事態にも対応できていたのではないかと思う。今回の壁画教室を含め、子ども達の行動をできるだけ多く予想し、それに対応できる準備さえしておけば、授業がよい方向へと進んでいくことができるのではないか、と思った。

タイトル 壁面教室	平成6年 11月 12日(土)
キャプテン 竹川 紀幸(美術科 3年)	指導教官 笠原 明子

1.ねらい

教室の床や壁に貼られた模造紙に、壁面を描く場面で自分の好きな大きさと、思い切り体を使って描くことを通して、のびのびと絵を描く楽しさを知ることができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:40	導入	1, 自己紹介と壁面についての説明を聞く。	・基本的に、子どものやりたいことを優先させる。	マジック クレヨン 水彩絵の具
9:45	展開	2, 壁面を描く ・初め、一人ひとり別々に描く。 ・何を描いたらいいのか困っている子は、漫画をまねして描いてもいい。	・授業の前に、壁面に必要な道具は、教室の真ん中においておき、自由に使えるようにする。 ・授業を始める際に、「大きな絵を描いてみよう。」という指示	水さし パレット パット 筆 色鉛筆
10:30		* イベント参加 ・「みんなカエルさんになろう」 あらかじめ池の絵を描いた大きな模造紙を床にしき、その上を、手と足に絵の具を付けた子ども達が、カエルのように飛び跳ねる。	をしておく。 ・45分たったら、イベントを設ける。	
11:00		・「大きな筆で書こう」 はけだけを使って絵を描く。		
11:20	まとめ	3, 自分の描いた絵を、好きな大きさに切り取り、持ち帰る。	・子どもの絵を切り取ってあげる。	
11:30	片づけ	4, 片づけ		

みんなで書道をやろうか

岡野 啓（国語科4年）松橋 博行（国語科3年）

1. 授業作りの着想とねらい

私達が大学で学んでいる書道は、いわゆる小・中学校の書写教育的なものではなく、より芸術性を帯びたものである。それは、様々な筆や墨を使い、いろいろな人の書を臨書することによって、書を学んでゆくものである。そういったものを、子どものうちから体験することにより、字を書いて上手になるということだけでなく、書道の真髄を感じて、筆と墨で字を書くことの楽しさを知ってもらいたいということが、着想かつねらいである。さらに、書道家の書を写すだけではおもしろ味がないと感じ、今回は、少し趣向を凝らし、授業を進めることにした。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

教育実習で書写の授業を実際に行ってみて気づいたことは、子ども達が非常に緊張していて、いかにも神聖なものを書いているようだったということである。そこには子ども自身が、自ら書いてみようという意欲を感じることができなかった。そこで、今回は、できるだけ子どもの創造力を引き出し、しかも、たのしくリラックスしながら活動できるものに行しようと試みた。したがって、実習との関連という点から見れば、内容的には関連性は希薄になったかもしれない。しかし、子どもに対しての見方や考え方、そして何より子どもと対峙したときの子どもへの接し方が、教育実習で一番学んだことであり、それがこのYOU遊サタデーの成果として表れてきたことは事実である。例えば、紙に何を書こうかと子どもとともに悩んでいるとき、普通ならこちらから一方的にアドバイスしてしまうところであるが、教育実習で学んだことを思い出し、最低限の資料はこちらから提示するが、あとは子どもの自主性にまかせることにした。

3. 今回のYOU遊サタデーを通して

3回あったYOU遊サタデーのうち、私達は10月と11月の2回行ったわけだが、11月の方が、すべての面でスムーズにいき納得のいくものができた。それは言うまでもなく10月の経験が生きた結果と言える。そこでここでは11月に行った分について述べてみる。まずそこでは、2つのグループに分かれて授業を行った。超大字グループと表札グループである。人数にばらつきが出るかと思われたが、両グループとも適当な人数になりスムーズに授業に入れた。ここからは、同じ教室だが完全に2つグループに分かれて活動していった。さらに、両グループ共ティーム・ティーチングで授業を行った。スタッフの人数が子ども達と同数であり、さらにそれぞれのスタッフの役割分担を明確にすることでマンツーマン指導が可能となった。それによって、子ども一人ひとりに対し十分目が行き届いたというわけである。今回のYOU遊サタデーでは、教え込もうとするのではなく、書道を好きになってほしいという願いをもとに始め、楽しいものだと思ってもらえるよう努力した。その目標は、ある程度達成できたと思われる。

タイトル みんなで書道をやろうか	平成6年11月12日(土)
キャプテン 松橋 博行(国語科3年)岡野 啓(国語科4年)	指導教官 市澤 要三

1.ねらい

学校や塾では決して体験しない書道を実際を書いてみることを通して書道に興味を持ち、字を書くことの楽しさを感じることができる。

2.展開

時 間	過 程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
12:50	導入	①全紙に超大字を書く ②表礼をつくる ③象形文字を書く	・内容を簡単に説明し子どもにやりたいグループを決めさせるが、 ③だけは5・6年を対象にする。	習字道具 全紙 木材
1:00	展開	それぞれのグループごとの活動に入る。 ①こちらで手本を示し、その後書きたい字を考えて超大字を書く ある程度慣れてきたら、二字、三字というように字の数を増やしてみてもよい。 ②表礼の一例を提示し、木と同じ大きさに切った紙にどんな字をどんな配置で書くか決まったら、手本を書く。練習時間をとり指導し助言する。上手にかけようになったら木をヤスリがけし、鉛筆でますめを書いた後実際に木に書く ③篆書や隸書を書くことを通して漢字の起源を知り書写で書く。	・他のグループに自由に見に行ってもいいようにする。また、ほかのグループの活動にも自由に入れるようにする。(漢和辞典や常用漢字辞典を用意しておく) ・途中10分ぐらい休憩をとり、できたら発表なども行う。	辞書
2:30	まとめ	・最後には作品が完成する ・今回の成果を発表しあう ・後片づけ	・できた作品は持ち帰るようになる	

パソコンで遊ぼう

山崎 重幸（美術科3年）

1. 授業づくりの着想や授業のねらい

現在私達が生活する社会には、様々な機械があふれている。私達が小学生だった頃と比較しても、その進歩はめざましいものがある。また今日の子ども達も、その様々な機器に触れる機会が増えている。大人達の中には機械が苦手という人も少なくない。それは子ども時代に機械があまりなかったせいもあるが、機械を製作、操作することによって得られる驚き、感動というものを体験したことがないからである。機械の進歩はこれからも更なる発展を続けていくであろうが、そういった時代の中を生活していく上で「機械音痴」であることはいろいろと不利な点を抱えていくことになるだろう。

この授業では、機械に親しむ一つの手段としてパソコンを選んだ。自分でパソコンをいろいろ操作してみることを通して、子ども達に楽しさ、驚きを感じてもらいたい。そして興味を持ち、それを様々な方向へ展開して行って欲しいと願い、今回の授業を設定した。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

指導案などは、教育実習よりも略式のものであったので、比較的楽にたてることが出来た。また、実習の経験によって授業の重要な点、留意点などをしっかり考えながら授業することができたと思う。「教える」ということ自体に何の緊張もなく、また自分の指導案のプランに固執することなく、全体の流れを見ながら生徒達の行動に対応していくことができるようになったのも、ひとえに教育実習のおかげである。

私は美術科で実習を行ったわけだが、今回の「YOU遊サタデー」では主に「お絵かき」を中心としたパソコン講座を組んだため、自分の専門分野での視点も用いることができ、実習では行うことのできない、コンピューターを媒体とした「図画」の授業というものが実践できた。このことは、私に違った角度から見た美術の授業の観点というものを与えてくれたと思う。

3. YOU遊サタデーでの子ども達の取り組み

この授業を開始し、終了するまでの間、子ども達は実に真剣で生き生きとしていた。私が画面を見てもらいながらの操作説明をしている間も、早くやりたくてしかたがないといった表情をしていた。大まかな説明を行った後、さっそく子ども達に操作を始めてもらったが、皆驚きの声をあげながら次々と線を引き、面を塗っていった。基本操作を踏まえた上で、それをこなせるようになると他の機能も使いたくなる。「もっと違うことがやりたい」「もっと高度な技を使いこなしてみたい」といった子ども達の探究心をかきたてるため、最初に長々と詳しい説明をいれなかったことが良かったと思う。子ども達の方から様々な意欲的質問がでた。最初にすべてできること、結果などを見せてしまうより、だんだんと新しいことを発見していくことの方が、経験することによる喜びはより大きなものになっていくと思う。またこういった授業の方法をとるためには、その内容をよく理解したスタッフが複数必要となる。多数の子ども達の違った質問に同時に答えることが不可能だ

からである。

普段、ただ普通に絵を描くのと違い、パソコンの画面にマウスで絵を描くという行為自体、子ども達には新鮮でとても楽しいことだったようだ。「帰ったら絶対お父さんにパソコン買ってもらうように頼む！」と言い出す子どもが何人かいて、それほどまでに興味を持ってくれたことが本当に嬉しく、この講座を開いた甲斐があったと心から思った。

4. スタッフとのチーム・ティーチングについて

この授業のため、美術科から2人のスタッフをお願いした。1名は私と同じく子ども達の質問に答える係で、もう1人はそれと同時に記録係として他の講座の記録もやってもらった。

最初14人の子ども達と授業をしていたが、午後からもう2人加わり16人となった。スタッフには事前に実際のお絵かきソフトの操作、実験を行っていたため、本番もスムーズに授業を進行することができた。

16人の子ども達を教えるには、やはり約2名のスタッフ数が必要であることが分かった。今回1名は記録をかねていたので、少々苦しい場面もあったように思う。

5. 反省と今後の課題

この授業についての反省点は、やはり絵をプリントアウトするときのプリンターの問題であった。子ども達は自分なりのカラフルな色彩を用いて様々なイラストを描いた。しかしプリントされた作品は、プリンターによって白黒のイラストとなってしまったわけであり、一生懸命選んだ色が全然表現されなかったのである。これは唯一子ども達の感動をそぐ要因となってしまった。また、2台プリンターがあったのだが、どちらか片方ずつしか作動しないため、全員の作品をプリントアウトするのに多くの時間を失うことになってしまった。

この点について、事前にカラープリンタを用意する準備が必要だったように思った。

子どもだけが楽しむのではなく、授業をする先生も楽しんで教えるということの充実感は素晴らしいものだ。この授業が終わり、子ども達を見送った後に心地よい疲労感と満足感が残った。この経験は教師を目指す私にとって、非常に有意義なものであったと思う。

タイトル パソコンで遊ぼう	平成6年 10月 8日(土)
キャプテン 山崎 重幸(美術科3年)	指導教官 関 信一

1.ねらい

パソコンソフトの「ロゴライター」を用いて簡単な絵を描いてみたり、音を出してみたりすることを通して、パソコンのおもしろさを感じ、興味を持って取り組むことができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:10	導 入	「ロゴライター」の基本的な使い方を実際にコンピュータにふれながら覚える	授業を始める前にロゴライターを起動しておく。	ロゴライターソフト - プログラムプリント
9:40	展	色々なコマンドを用いて線を引くことを覚える。	各個人をまわりつつ、理解していない子に指導する。	
10:00		音を実際に出してみる。 色を出してみそれを点滅させたり色々遊んでみる。	適度に目を休める休憩をいれる。	
11:00		昼食		
12:50		絵と音を同時に表してみる。		
13:20	開	目を休めるため、「歌」についての講座を開く。	上手に聞こえる「歌い方教室」を開く。課題曲は「となりのトトロ」	
13:50		発展として少し多めのコマンドを入力する。		
15:00	ま と め	自動画等、自分や他人の作品を鑑賞する。 修了証の授与。		

ソフトボール天国

林 哲也 (理科3年)

1. はじめに

私は「教師」を目指して、この教育学部に入學した。教育実習を終えて感じていることは、「教師」という職業は、「経験」が必要な職業だ、ということである。しかし、学部のカリキュラムでは、教育実習のみが、実際に子どもと接することができる機会であり、実習が終われば、卒業まで子どもと接する機会はないのである。1年間以上のブランクの後、いきなり教壇に立たなければならないことに、私は不安を感じていた。

2. YOU遊サタデーとの出会い

そんな時に出会ったのがYOU遊サタデーある。以前、土井先生の教育実習のアンケートの中で、「ボランティアをしてみませんか。」との問いがあった。その時は何気なくYESと答えたものの、具体的に何をするのか知らない状態だった。その後、教育実習を終えて何か気の抜けた状態であった私に、忘れかけていたそのボランティア活動の内容・目的が明らかにされた。「実習で得たものをいかしてみようか」と、参加の意志を固めた。

そして、「子ども達に何かを教える。」かつ「子ども達が楽しめるもの。」をいくつか探し、その中からソフトボールを選んだ。

3. 私とソフトボール

大学からソフトボールをはじめて3年目の今年、主将として頑張ってきたが、夏休みの最後の大会が終わり、引退となった。「このままやめたら、もったいないな。」「何か残したい。」ソフトボール部のキャプテンから、今度はYOU遊サタデーの「ソフトボール天国」のキャプテンとして、頑張ることを決意した。

4. 活動内容をふり返って

ソフトボールをするとき、「教える」ことを主とするならば、練習が中心となる。反対に「楽しむ」ことを考えると試合が中心となる。指導案をつくるときに、半日という短い時間の中でどんな活動をするのが、最も大きな問題になった。

10月のソフトボール天国では、参加人数が10人に満たなかったので、練習中心の活動をするつもりで指導案を作成した。また、ソフトボール部の友人にスタッフとして参加してもらい2人で指導にあたった。当日、チャッチボール、ウィンドミル投法の指導、1人3本のフリーバッティングを行ったが、子ども達の強い要望があったため、ノックによる守備練習を省き、試合を行った。やはり試合になると、子ども一人ひとりが生き生きとし、それまでやや静かだったグラウンドに活気がでてきた。活躍できた子も、できなかった子も、楽しくソフトボールができたと感じる。

ただ、友だちの近くでバットを振ったり、友だちとぶつかったりと、安全面で課題が残った。

11月のソフトボール天国では、参加者が18人いたため、始めから試合を中心とした

時間配分をした。10月との相違点は、スタッフ5人でチーム・ティーチングをしたことが挙げられる。ノックによる守備練習も2カ所で行うことができ、試合もスムーズに進行させることができた。10月の反省点に基づいて、安全面についてはスタッフ全員で気を配り、技術指導に至っては、すべての子どもに目が行き届くようになり、チーム・ティーチングの利点を生かすことができた。

5.子ども達の様子から

参加した子ども達は、当日、初めて出会った同士である。始めのうちはなかなかうちとけあえずにいたが、練習・試合を経て仲良くなっていった。高学年の子どもが低学年の子どもに、バットの振り方を教えていたり、ベンチから「頑張れ」とか「ボールを良く見て」という声が出てきた場面を見て、協力して活動することにより、子ども達が「チーム」「一つのまとまり」になることのすばらしさを感じた。個人競技ではない、団体競技ならではの効果であったと感じる。

参加者を募集する際に対象を「小学生」としたため、1年生から6年生まで幅広い参加があった。そのため体力的な差が大きく、試合の中で低学年の子どもが活躍するのは困難であり、悔しい思いをさせてしまった。低学年の子どもが活躍できる場を作ることも検討する必要がある。

6.YOU遊サタデーに参加して

半日という短い時間ではできることが限られてしまう。しかし、一日にすると子ども達の体力が持続しないこと、他の講座に参加できなくなってしまうことから、半日で行う方法で正解だったと感じる。ただ、月によって新しいメンバーが加わったりして、技術の積み重ねができないので、レクリエーション的要素の強い「試合」が活動の中心になってしまう。しかし、子ども達にとっては、せっきくの休日であるので、「教える」というより「楽しむ」ということを中心に考えるべきである。スタッフが「子どもと共に遊ぶ」という感覚で取り組めれば、楽しさはより増していくのではないか。これは、すべての講座に共通していえることである。

また、9、10、11月と参加者が飛躍的に増加したことから、これからはチーム・ティーチングをいかに行っていくかがYOU遊サタデー全体の課題なるのではないか。

今回のYOU遊サタデーには、9月はスタッフとして、10、11月はソフトボール天国のキャプテンとして参加した。「子どもとふれ合う」「自分で授業を作る」という貴重な体験は、これからの私の人生で必ず生きてくるのではないか。

そして、「地域とのつながり」という意味でもYOU遊サタデーが続いていくことに、これからも協力していきたいと思う。

タイトル ソフトボール天国	平成6年 10月 8日(土)
キャプテン 林 哲也(理科3年)	指導教官 村松 久和

1.ねらい ソフトボールを多くの仲間と楽しむ場面で、打撃や守備、またピッチャーのウィンドミル投法をソフトボール部員から教わったり、試合をすることを通して、ソフトボールの楽しさを味わい、新しい友達と仲良くplayすることができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
12:50	導入	集合し、自己紹介 (学校、学年、名前、今日がんばりたいこと)	大きな声で ケガをしないように注意	
13:00	準備	UP ・ランニング ・体操 ・キャッチボール ・トス	スムーズに進行していくように、子どもたちを導いていく。	ボール1号 バット ベース グローブ
13:30	展開	ピッチング講習 ウィンドミル投法を学ぶ	良い手本と、悪い手本を見せる。 個人指導	
14:15		休憩5分 バッティング 2カ所で	スイング指導 おぼえたての投げ方でチャレンジしてみる。	
14:50	まとめ	終了	片付け 全員で協力して	

楽しく上手に写真を撮ろう

山崎 重幸（美術科3年）

1. 授業作りの着想とねらい

子ども達にとって絵を描くということは、とても大切なことである。そしてその絵を描くのに大切なことは物を見る力を養うことである。

コンパクトカメラは一般的には記録用の手段として用いられることが多いが、もちろん立派な芸術的要素を持つ写真を撮ることに使える訳である。もっとも今回の授業では、対象が小学生であったので、これに限定した。

物を見る力について、人間は何か行動をするとき、眠る場合を除いて見るという行為を伴う。日常いつもただ通りすぎている場所、物などもよく目をとめてみると、さりげない美しさや、よい雰囲気を持っていたりすることがある。そんなことに気づかせてくれるのに一番簡単な手段がカメラなのである。

今回の授業で、大学の中という撮影の範囲を決めたのは、限られた場所の中から自分にとっておもしろいもの、きれいなものを探そうとしていろいろな場所を細かく見ようとするそれをねらったからである。日常生活の中におもしろいもの、きれいなものを見つけることができる目を持つことができれば、それだけで人は情緒豊かになれる。ファインダーを通して日常の風景等を見ることによって、普段と違った視点から美しいものを探ることができるようになってほしいと願い、今回のこの授業を設定した。

2. YOU遊サタデーと教育実習との関連

私は中学校の教育実習で美術を担当していたのだが、やはり絵画嫌いの生徒達が多かったように思う。基本的に絵画が苦手な子どもは自分の絵が下手だからとその理由を述べるが、それは見る力が足りないからである。決して皆、下手ではないのだが、自分の作品を隠そうとして他人に見せるのを嫌がっていた。

実際にいろいろな物を見るという授業を実践で行ってみたかったが、カメラを授業に取り入れる訳にはいかない。しかもスライド等で美しい芸術作品等を見るのではなく、日常の風景をじっくり見てみたい。今回のこのYOU遊サタデーで、この教育実習で実現できなかった実践を行うことができ、本当に嬉しく、楽しかった。授業の改善点はいろいろとあるが、よい経験になったと思う。

3. 子ども達の反応

まず子ども達は普段あまり持ったことのないカメラを自分が使うということの好奇心で、持ってきたカメラをフィルムを入れる前からいじくり回していたことが非常におもしろかった。何事にも好奇心を起こすのはよいことである。フィルムを入れた後、すぐ外に出て実際に撮りながら説明したが、皆あちこちを見回し少しでもおもしろい場所を見つけようと歩き回っていた。

12枚のうち数枚は私の方から題材を設定したのだが、皆自分なりの場所から撮ろうと他人とは違ったところから撮っていたことに感心させられた。

ファインダーを覗きながら本当に楽しそうに時に真剣に校舎を、泉水を、草木を見ている姿が本当に生き生きしていて、学校では教わることがないであろうこの授業を楽しんでくれているようであった。

4. ティーム・ティーチング

今回スタッフとして丹羽さんに手伝っていただいた。

生徒数6名という少数で行ったので、一つの班として行動し、指導するのにスタッフ、キャプテン合わせて二名で、ちょうどよかったと思う。特にフィルム現像の時、丹羽さんのスクーターで現像所まで行っていただいて本当に助かった。ティーム・ティーチングについては何も問題なかったと思う。

5. 反省

今回の授業で痛感したのは時間配分の難しさである。午前中の授業だったのだが、お昼に昼食をとりながら写真の批評をするつもりが、あまり時間がなく、時間をかけてやりたかった部分に時間が使えなかったことがとても残念だった。

次に現像所の確保である。今回あらかじめ予約しておいたのだが、道が混んでいて遅れてしまった上、やはり6本は難しいと言われていたりして現像所の利用に難があったように思う。やはり2本か3本単位で離れていない現像所に仕上がり時間が間に合うように出す等、なるべく現像にかかる時間を減らすように考えるべきである。

また今回あらかじめフィルムの外箱から出したフィルムを子ども達に渡してフィルムを入れるところから授業をしたのだが、枚数の確認をしなかったため、一人だけ24枚撮りのフィルムが入ってしまうこととなった。「12枚の最後は自分がきれいだと思ったところを撮ってみよう」という主旨だったのだが、「撮り切ろう」と私が言っていたこともあり、「まだ撮れる、まだ撮れる」と結局その子は24枚撮り切ってしまった。そういう基本的な部分の確認も必ず行うべきだなとつくづく実感した。

今回行ったこの写真の授業は私がやってみたかった実践をそのまま行うことができ、非常に勉強になった。改善点をしっかり踏まえてまたこういった授業を行ってみたいと思う。そして授業を受けた子ども達が、日常のささやかな物に目を向けること、その中にある自分なりの美しさの観点を見つけだしていってくれることを願いたいと思う。

タイトル 楽しく上手に写真を撮ろう	平成6年 11月 12日(土)
キャプテン 山崎 重幸 (美術科3年)	指導教官 関 信一

1.ねらい

コンパクトカメラを使って自然物、人物等を実際に撮ってみることを通して物を美しくとらえる方法を理解し、日常におけるさりげない物を見つめる視点、意識を持つことができる。

2.展開

時 間	過程	学 習 内 容 と 活 動	学 習 指 導	材 料
9:40	導入	・自己紹介をする。 (キャプテン・スタッフ・生徒)	・学校、学年、名前等自己紹介をしてもらう。	・コンパクト or一眼レフ カメラ(各人)
9:45		・カメラについての説明を聞いて操作を覚える。(フィルムの入れ方、シャッター操作、グリフの適切な方法、フラッシュ使用法、シャッター半押しによるピント合わせの方法等)	・カメラの基本操作説明を行う際、各機種によって大きく異なる場合、後で個別に指導する。(撮影つつ)	*キャプテンは生徒たちのもってきたカメラに合わせて使用する。
9:55	展開	・学部内へ写真を撮りに行く。 (12枚使用のうち6枚は自由に撮る。) *指定モチーフは3枚を指定物、1枚を人物、残り2枚を人工物とする。 *自由撮影は、YOU賞サテ- 授業風景をメインとする。	・6人一団で、学内をまわる。	*1人でも1眼がいた場合は1眼を使用する。
10:25	まとめ	・撮影終了→教室に帰り、授業を聞く。(キャプテンの撮った写真をもとに、写真の画面に占める対象物の位置、バランス等の説明等)	・撮り終わった7本(キャプテン1、生徒6)のフィルムをスタッフにラボに出しに行ってもらおう(長崎屋前)。	*フィルム (学部)
11:25		・各人の撮った写真についての評価、改善点の説明を聞く。 (昼食をとりつつ) ・修了証 授与	・キャプテンの写真を見せ、対比させるなどして、参考にさせる。	*ラボ =現象所

3. 参加した子ども達の感想



昼食風景

参加者へのアンケートの集計結果（回収数：154名 平成6年10月8日実施）

【5点満点による評価】

- (1) たのしかったですか？ (1)
 (2) わかりやすかったですか？ (2)
 (3) キャプテン・スタッフや
 友だちとなかよくできましたか？ (3)

1点	2点	3点	4点	5点
0	0	9	10	135
2	4	12	13	121
0	3	15	27	108

【うれしかったこと】

- ・自分で曲が作れた。
- ・自転車が分解できた。
- ・自転車のしくみが少しわかった。
- ・4歳の子どもも特別参加させていただき、楽しく一日過ごせました。
- ・直した自転車で遊んだ。
- ・きれいなポストカードができてうれしかった。
- ・いろいろなもようのポストカードができてよかったです。
- ・キャプテンやスタッフの人がやさしかった。
- ・キャプテンやスタッフ、友だちと仲良しになれた。
- ・自転車がはやくできてよかったです。
- ・今日、けん玉ができるようになった。
- ・初めてけん玉がのった。
- ・初めてやったけん玉が楽しかったです。
- ・先生とけん玉をして4回いれた。
- ・だんごを食べたこと。
- ・とめけんができるようになってうれしかった。
- ・けん玉でとめ大皿ととめ小皿ができてうれしかった。
- ・少しけん先ができたこと。
- ・小皿が10回できてよかったです。
- ・1度こわしたけどなおってよかったです。
- ・自転車がつくれたのがうれしかった。
- ・初めて英語を耳にしたり、口にしたりしている子の様子を見ると、とても楽しそうに参加できたことを良かったと思います。
- ・歌がよくわかった。
- ・えいごをおぼえた。
- ・えいごをうまくいえてよかったです。
- ・今日は体を動かしてやるのがたくさんでおもしろかった。
- ・わからないながらできて、楽しくやってよかったです。
- ・知らない友達としゃべれたりできてよかったです。
- ・友だちができた。(4人)
- ・いろいろなゲームをしたこと。
- ・振り小皿ができてうれしかった。
- ・けん玉が手にはいった。
- ・振り大皿ができてうれしかった。(2人)
- ・附属小学校の人と友だちになれた。
- ・ソフトボールのわがわがわかってよかったです。
- ・スライムがいっぱいできた。
- ・スライムが5個つくれた。
- ・消しゴムだけだとおもったらスライムもできた。
- ・子どもが楽しく興味深げにやっていた。
- ・わかんないときがあったら、おしえてもらったりしてうれしかったです。
- ・子どもが楽しそうで、こういうことは普段あまりできないので、遠くから来てみて良かったです。
- ・スライムを作れることがうれしかったようです。
- ・消しゴムの作り方がわかった。
- ・小麦粉ねんどを一緒にやれて楽しかった。
- ・色つけがよかったです。
- ・小麦粉ねんどが成功してうれしかった。
- ・とっても楽しく、又興味深くて目を輝かせて子どもがやっており、とっても良かったです。
- ・消しゴムができてとってもよかったです。
- ・スライムもしたかったので、大喜びしています。
- ・子どもが初めてふれるものばかりで、初めは不安そうにしていたが、やっているうちに顔がニコニコととっても楽しそうな様子でよかったです。
- ・おだんごを作るのがたのしかった。
- ・大きい人が中心になっていましたが、やれないことがなかったのよかったです。
- ・おいしいおまんじゅうができてよかったです。
- ・友だちとキャプテンと仲良く楽しくできた。
- ・みんなと楽しくできた。
- ・それに、協力してできてよかったです。
- ・いろいろな人と友だちになれてうれしかった。
- ・いろいろな友だちと仲間になれてうれしかったです。
- ・おやつをつくるとき友だちが

できてうれしかったです。 ・おだんごやくりまんじゅうをもらったこと。 ・はんのみんなとおまんじゅうやおだんごを作った。 ・友だちと仲良くできたこと。(3人) ・おともだちになってうれしかった。 ・月見だんごやくりまんじゅうができるようになったことがうれしかったです。 ・みんなで楽しくできたことがうれしかった。 ・友だちやスタッフやキャプテンの人といろいろ話したりできたからうれしかった。 ・おかしがうまくできたね、と言われたこと。 ・キャプテンやスタッフが手つだってくれた。 ・はじめて作ったお月見がじょうずにできてうれしかったです。 ・いろいろな人とお友だちになれたり、おだんごやおまんじゅうが作れてうれしかった。

【こまったこと】

・道具が足りない。 ・ペダルがとれなかった。 ・分解するのがよくわからなかった。 ・パンクしてたからこまった。 ・おにいさんたちとかくれんぼやあそびがしたかった。 ・とめけんがなかなかはいらなくてこまった。 ・部品があまった。 ・えいごなのでまだむずかしかった。 ・発音がいいにくかった。 ・振り中皿ができなかった。 ・とめ小皿。 ・薬品やガラス製品を使うので、低学年で扱うのが初めての子もいるので、始める前に必ず注意事項として、口頭などで教えてやってほしい。 ・使ったもの(材料)は何なのか、最後まで良いからプリントにしてほしい。(消しゴム) ・低学年の子には、もう少しスタッフの人がついている時間をふやしてほしい。 ・ガラスがわれたことごめんなさい。 ・けん玉を苦手にしていただけなのに、少しでもできるようになってうれしかったです。 ・小学生以下の子が弟なので、一日いる場所がなかった。 ・くさかった。(2人) ・全然ありませんでした。 ・消しゴムの白い粉の材料やまぜる薬を子どもにわかる程度の説明が欲しかったです。 ・小さな子どもにはガラス容器の取扱いがむずかしそうでした。参加人数の割合より、先生が少なかったように思いました。 ・手がべたべたになってしまった。 ・どこに行くかわからなくなった。 ・おもちゃがぐちゃぐちゃになってしまったこと。 ・くりまんじゅうがちょっとうまくいかなかった。

【ゆうゆうサタデーでやってもらいたいこと】

・バスケットボール(3人) ・スライムづくり ・鉛筆づくり ・またあそびたいです。 ・いまのまま ・アクセサリーもつくってもらいたい。 ・サッカー(5人) ・このほかにもたくさんけん玉をやってもらいたい。 ・また続けてやってほしい。 ・おにいさんやおねえさんにABCのべんきょうをしたあとに、かたぐるましてもらいたかった。 ・またくだものリレーしてください。 ・今日みたいなリレーをまたやってほしいです。 ・けん玉の技を全部見せてもらいたい。 ・ドッジボール(2人) ・ゴムボール(2人) ・理科の実験をいろいろやってほしいと思います。今回のように家でまたできるようなものがあります。 ・いろいろな経験をさせてください。 ・また粘土!色を混ぜてジュースを作りたい。 ・パンづくり ・ししゅう ・ソフトボール(2人) ・プラモデル作り ・木工教室がとっても良かったので、ぜひ又計画してください。子ども一人に一人の先生がついていて良かったです。 ・よくわからないが、親子で参加できるようなものもあるとよいのではないかと思う。 ・ケーキづくり ・こんどはクッキーをつくってもらいたい。(2人) ・ピーズ細工 ・とってもいい計画で、又ぜひ参加したいです。 ・キャプテン・スタッフの皆様、お疲れさまでした。とっても楽しい土曜日でした。有り難うございました。

子ども達の感想について

キャプテンやスタッフは、あらかじめ様々な事態を想定して準備を進めていたが、その努力が正しいものなのか判断つきかねる時がある。子ども達からのアンケート結果や感想文は、そうした手探りの中で唯一の指標として意味を持つてくる。

アンケートを集計し、まとめられた感想は、キャプテン・スタッフ全員に資料としてフィードバックされている。どんな点がまずかったのか、そしてどう改善すればよいのか、またどんなことに面白さを見いだし、どんな挑戦をしたいのか、私達は素直にこの感想を受け止めている。

5点満点評価中、「わかりやすかったですか？」との質問に対して幾人かは低い点数をつけている。こうした声を無視せずに、何が悪かったのだろうと悩むキャプテンたちの姿は、同じ仲間として尊敬できる。

感想文の募集に対して、とても嬉しくなるような手紙をたくさん送っていただいた。イラストを描き込んだ楽しい文面は、本来ならば縮小してでもそのまま載せるべきであると考えるが、本冊子の性格を考慮して今回はワープロ出力した。また、その際に誤字脱字などを訂正したが、これも熟慮の末であることをご了承願いたい。ただし、できるだけ原文のニュアンスに近づける努力は惜しなかった。カラフルなイラストなど、コピー機では消えてしまう線もあるため一部はコンピュータ処理を施したりした。

また、高校生2人の手紙からは、私達自身、さらなる努力の必要性を感じた。こうした期待の声に私達がどこまで応えることができ、そして維持していくことができるのか。必ずしも明るい面ばかりでないだけに重くのし掛かってくる問題だろう。誰かがやってくれるではなく、一人ひとりが主張を持って関わらなければならないことを肝に銘じておきたい。

アンケートに答えてくれた皆さん、そして感想文を送ってくれた皆さん。どうもありがとう。

(文責・林)

ゆうゆう 感想文

とっても楽しかった小麦粉ねん土
 わたしは、しんしゅう大学についたとき名ふだ
 をもらうとき、くらまたもこちゃんの名ふだが
 ありました。
 ともこちゃんがいたのでとてもうれしかったです。
 体いくかんみたいなところに、みんながあつま
 りました。
 それから教室にいくのでならんだらともこちゃ
 んが後ろからきました。
 いっしょに教室にはいっていました。
 はいったらやり方を教えてもらったらやりはじ
 めました。
 わたしは作りはじめたときしっばいすると思っ
 ていました。
 でも色をつける前にとてもよくできたから「よ
 かったな。」と思いました。
 白いときにふたのはなをやったりそうのはなを
 したりしました。
 色をつけるときにともこちゃんと同じ黄にし
 ました。
 色がついたら10分ぐらいあそんでいました。
 へびを作ったり、花を作ったりしていました。遊
 んだら小麦粉ねん土をふくろにいれて、バックの
 そばにおいておきました。
 それから手をぬらして石けんできれいにあら
 いました。
 それからわりばしでっぼうを作りました。
 作りおわったらおちていたゴムでとばしました。
 それからかえったときに家に電話をしました。
 それからとちゅうまであるいていきました。
 それからつたやさんの、ちかくでお母さんに会
 いました。
 それから公園まであるいていきました。
 車にのって家へいきました。
 それから家についたら屋ごはんをたべました。
 とてもたのしかったなと思いました。

(長野市立城山小学校2年 小池 まり)



山田綾子さん

私は、10月(パソコンで遊ぼう)、11月
 (小麦粉粘土・わりばし鉄砲)とさんかしました。
 おもしろいので、またさんかしたいです。今度は、
 もっと、もっと、おもしろいのを、やったり、お
 して下さい。来年も参加します。

(信州大学付属小学校3年 山田綾子)



ゆうゆうサタデーでおもしろかったこと

わたしは、いろいろなことに参加しました。スライムづくりや書道、ほかにもいっぱい作ったりしました。わたしはあんまりおもしろくてスライムを2こ作ったりしました。またこんども参加していろいろなことをしたいです。友だちもいっぱいできました。おもしろかったです。

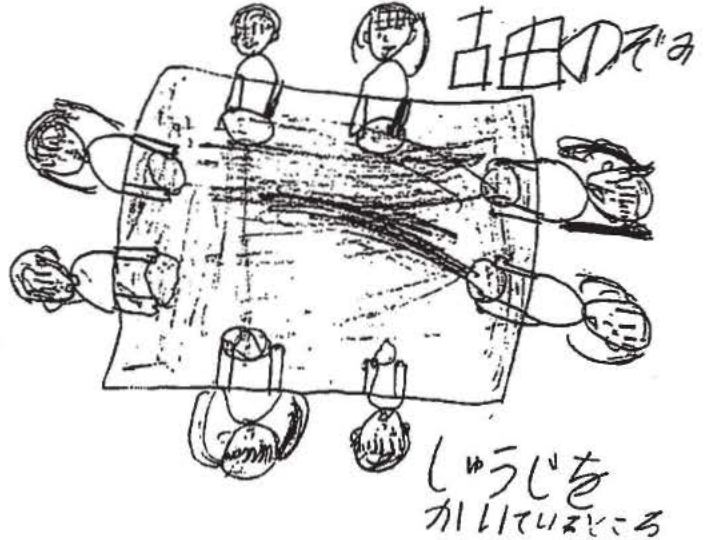
(大町市立大町西小学校3年 古田 愛美)

きょうは、ありがとう。とても楽しかったです。わたしは、小麦粉ねんどと自分の音楽をつくろうがおもしろかったです。かえりに、ちょっと、けん玉をしました。わたしは、大ざらに、のりました。わたしは、きょうはじめてのせられてとてもうれしかったです。かえりにちょっと、キャプテンかスタッフかわすれてしまいましたがいっしょにあそびました。わたしは、どれもいいこうざばかりでした。とてもたのしいいちにちでした。ほんとうにありがとう。

わたしは、おかあさんにききました。学校のせんせいになるんだってね。がんばってください。わたしは、元気でかぜをひかないようにします。スタッフの人も、キャプテンの人も、かぜをひかないようにしてください。わたしは小麦こねんどのくずれたやつをまぜてねこのかたちにしました。たのしかったです。さようなら。

わたしはらいねんは、もっこうをしたいです。またもだちをさそいます。ごこはあればけんたまであそぼうをしたいです。

(長野市立三輪小学校1年 原 明花里)



「クリスマスカード作り」

三回目の、ゆうゆうサタデーのクリスマスカード作りに入りました。クリスマスカード作りでは、はっぱやお花でカードを作りました。スタッフのおねえさん、キャプテンのおねえさんが分かりやすく教えてくれました。なれるとすいすい作ってしまいました。たまにお友達の作品も見て回りました。私が気に入っている作品は、一番最初に作った、もみじとビーズのカードです。

いろいろ教えてくれてありがとうございました。

(長野市立下水鮑小学校4年 土井 陽子)

お兄さんお姉さん今年の第3回ゆうゆうサタデーの時はおせわになりました。わたしは午前中は「クリスマスカード作り」に出ました。いろいろな葉や実、ビーズなどですてきなカードができました。

午後には「はりがね工房」に出ました。ハンガーをくずしてS字の「フック」を作ったり「くるくる回るおもちゃ」を作ったりしました。ほかにもいっぱい作りたかったけど、ハンガーがかたくてうまくできませんでした。

いろいろたいへんなこともあったけど楽しかったです。わたしが一番よかったのは、お兄さんやお姉さんがやさしく楽しくふりまってくれたことです。

来年もあればさんかしたいです。

(長野市立青木島小学校4年 飯島 由紀子)



できたやっます。

おもしろかったのは、
あつてきいん、さかたの、...

原明花里さん

信州大学ゆうゆうサタデー

私は、今年はじめてゆうゆうサタデーというものを体験しました。いろいろなコーナーがあって私はその中の「小麦粉ねん土」でした。

スタッフといっしょに小麦粉でねん土を作りました。食紅をつけ、とてもきれいな色になりました。家へもって帰るとパサパサでしたが、とてもいい経験になったと思います。

来年私は動物と仲良くするというコーナーを作ってほしいと思います。私は動物が大好きなので、そんなコーナーを作ればぜったい行きたくなると思います。来年ゆうゆうサタデーに行くのが楽しみです。

(長野市立下氷鉦小学校4年 静谷 友可里)



静谷友可里さん

今年のYOU遊サタデーはとても楽しかったです。

来年はできれば、消しゴムを作ろう(ごぜん)ごごはけん玉であそぼうにしようと思っているけど大皿中皿小皿にのせられないからでられないと思います。でも、けん玉であそぼうはさん加できないと思います。わたしはけん玉が苦手です。本当にありがとうございました!!

9、10、11月のたった3回だったけど楽しかったし、おもしろかったです。私は9月はさん加できなかったけど10、11月だけさん加できてよかったです。これで私のお話しはお終いにします!

(長野市立三輪小学校3年 原 明日香)

わたしは、はじめてゆうゆうサタデーにさん加しました。

どいよう子さんからプリントをもらって友達をさそって、クリスマスカード作りとはりがねこうぼうをやりました。さいしょは、心配で「ドキドキ」しましたがお兄さん、お姉さんがよく教えてくれたのでとても楽のしくできました。

来年もさんかしたいと思います。

(長野市立青木島小学校4年 宮沢 愛)



宮沢愛さん

このあいだは、ありがとう。わたしはこむぎこねんどをやりました。

ねんどを作るとき、色をつける時がおもしろかったです。

らい年は、けん玉ができなかったらクリスマスカードを作りたいです。

らい年も行きますからよろしくおねがいします。

(長野市立綿内小学校2年 西沢 しほり)

先日のゆうゆうサタデーの時はありがとうございました。そして、キャプテン、スタッフの方々はおつかれ様でした。

わが家から兄妹で参加しました。兄は友達と一緒にだったので良かったのですが、小2の妹はひとりで小麦粉ねんどに参加だったのでとても心配していましたが、教室に入りスタッフのお兄さんに親切に話しかけていただき子供も安心したようです。

来年もぜひ参加したいと思います。本当にありがとうございました。

(西沢しほりさん、西沢一弥君のお母さまより)

楽しかったゆう遊サタデー

今日は、とても楽しかった日です。中でも、わたしの書道は、よかったです。お兄さんやお姉さんたちが、やさしく教えてくれました。

わたしは、あんなにすごい大きさの字や筆だなんて思っていなかったからびっくりしました。書いてみると、いがいとおもしろいので、うまく書けました。明日、小学校の先生に見せるのが楽しみです。

今度行く時は、また書道をやりたいです。

(長野市立三本柳小学校4年 熊谷 知子)

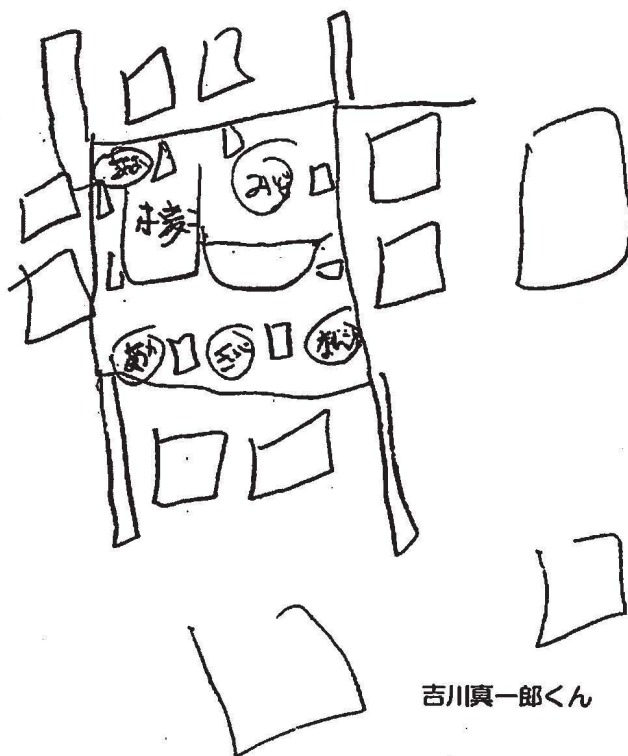


熊谷知子さん

11月12日、ぼくは、YOU遊サタデーは二回目です。ぼくは、小麦こねんどと、えいごクラブをやりました。

来年もあつたら行きたいです。

(長野市立下氷籠小学校4年 吉川真一郎)



吉川真一郎くん

月見だんごと、くりまんじゅうを作ったけど、月見だんごは、かたくなってしまって、くりまんじゅうは、くりが外にでて、しまったりして、すっこーく大変でした。

班の人は、遊んでいたり、うろうろしていて、あんまり、てつだってくれなかったので月見だんごが、かたくなったり、くりまんじゅうのくりが外にでたりしてしまいました。

班の中で、わたしが、一番年上だから、一人でやらなきゃいけないなんて、きまりは、ないんだ一と少し思っていました。

ちゃんと、作ってよと、いいたいところでした。でも、河野さんは、しっかり、ちゃんと、一生けんめいやっていたので、しっかりものだと思いました。2年生の、生まれがおそい子が一番遊んでいて、あんまりやってくれませんでした。お兄さん、お姉さん、一生の思い出をありがとうございました！

(長野市立裾花小学校5年 岡村 真由美)

おにいさん、おねえさん、ゆうゆうサタデーのときは、おせわになりました。来年、いったときは、おねがいます。

(長野市立青木島小学校3年 飯島 由利香)



ハートの
カード



土井陽子さん

YOU遊サタデー

11月12日の土曜日のYOUサタデーに、初めて信大に行き、思ったよりも、ずっと広くいろいろおもしろい物もたくさんあって、わくわくして走り回って、早く始まらないかと思った。時間がきて、クリスマスカード作り・食事・はり金工ぼうをやった。クリスマスカードでも、はり金でも、ほめてもらえて、うれしかった。私は、音楽では、曲を作るよりも、アニメ(幽遊白書)などの童謡などの歌などを歌うようなものを入れてほしい。とてもおもしろかったので、来年もやりたい。

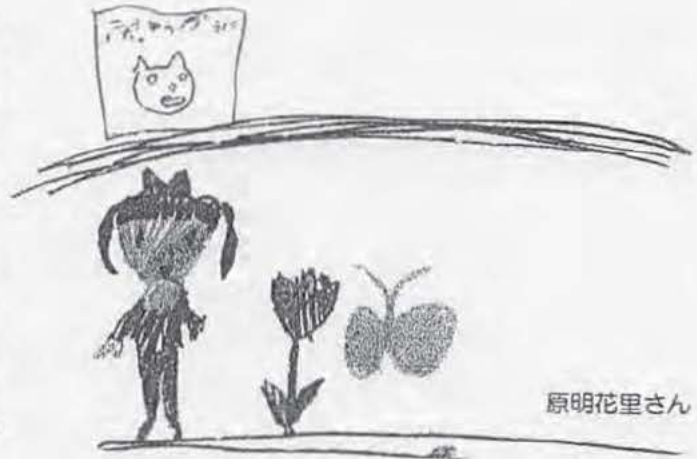
(長野市立青木島小学校6年 堤 晶子)



堤沙織さん

わたしは、初めて、友だちにさそわれて、YOU遊サタデーに行きました。わたしは、クリスマスカード作りとはりがね工房でした。はがきをおくってくれて、持ち物がわかり、わすれ物をしませんでした。クリスマスカード作りでは、いろいろわかりやすく、せつめいしてもらってとてもすてきなクリスマスカードが出来ました。はりがね工房では、はりがねをきるのがとてもたいへんでしたが、お姉さん方が「ここをこうしたほうがいいよ」などいわれ、たいへんだったのがらくに切れるようになり、いろいろな形の物が出来ました。友達も、まずまずな所でした。わたしはYOU遊サタデーに行ってよかったです。

(長野市立青木島小学校4年 堤 沙織)



原明花里さん

この間はユウユウサタデーのはりがね工ぼうのキャプテン、スタッフのみなさんありがとうございました。

これが初めてだったので少し不安だったけどとてもたのしいひとときでした。

はりがね工ぼうをやりはじめてから三時間くらいやったのだとはとても思えなかったほどあっというまの時間でした。

本たてもあってつくってみてみると形がうまくいかなかったりしてしっばい作ばかりでした。

ありがとうございました。

(長野市立細内小学校5年 西沢 一弥)

楽しかったゆうゆうサタデー

きょうは、ゆうゆうサタデーが、とても楽しかったです。ぼくは、こむぎこねんととりぼしてつぼーをやりました。楽しかった。

こんどはサッカーがやりたいです。おねがいます。

(長野市立三本柳小学校2年 熊谷 匡通)

YOU遊サタデーに参加して

私は、YOU遊サタデーに二回参加させていただきました。午前中は、小学校のみんなが楽しくけしゴムや小麦粉粘土を作っている所を見学させてもらったり、実際に壁画を一緒になって描いたりしました。久しぶりに、手足や顔まで絵の具だらけにし、思いっきり絵を描くことが出来て、絵を描くおもしろさを知りました。友だちも何人か出来て、とても嬉しかったです。午後は「教育学部ってどんなところ」に参加し、入試のアドバイス等をいただき、とても参考になりました。特に、宮沢キャプテンの教育に対する熱意には、心打れるものがありました。尊敬できる素晴らしい先輩方と接することができ、とても感謝しています。

YOU遊サタデーで一番印象的だったのは、皆さんの目です。キャプテンやスタッフの熱心な目、けん玉を見つめる真剣な目、絵を描いたり粘土を練っている時の楽しそうな目、英語が理解できてきた時の嬉しそうな目、そして子供たちを見守る御両親の優しい目。皆さんの目が生き生きと輝き、私自身そこから多くのことを学んだ気がします。小学生のみんなが作った作品を大事にし、身につけた英語やソフトボールの投球方法などをこれから生かしていくように、私もこの時感じた気持ちを大事にし、今後に生かしたいと思います。

友達と一緒に何かに一生懸命取り組むことの大切さ、のびのびとした環境での教育の必要性などを再認識させてくれた点で、YOU遊サタデーに参加していたすべての人たちが、私にとってキャプテンだったように思います。今、多くの人達にお礼を言いたいと思います。本当に貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

追伸

準備を進めて下さった土井先生はじめ教育学部の皆さん、3回の「ゆうゆうサタデー」御苦労様でした。何のことわりもなく、見学させていただいたことを、まずおわびします。（「何でいるんだろう？」と思った方もいると思います。）見学し、みなさんの姿にとっても共感を覚えました。きっと、小学生も、こんな先生がいたらいいなと感

じていたと思います。この活動は本当に誇りの持てる素晴らしいものだと思います。そして、今後ますます発展したらいいと素直に思いました。私も何年か先、スタッフの一員として参加することが目標の一つになっています。来年度もみなさんのご活躍を期待しています。本当にいろいろとありがとうございました。

（中野西高等学校3年 阿部 利恵）

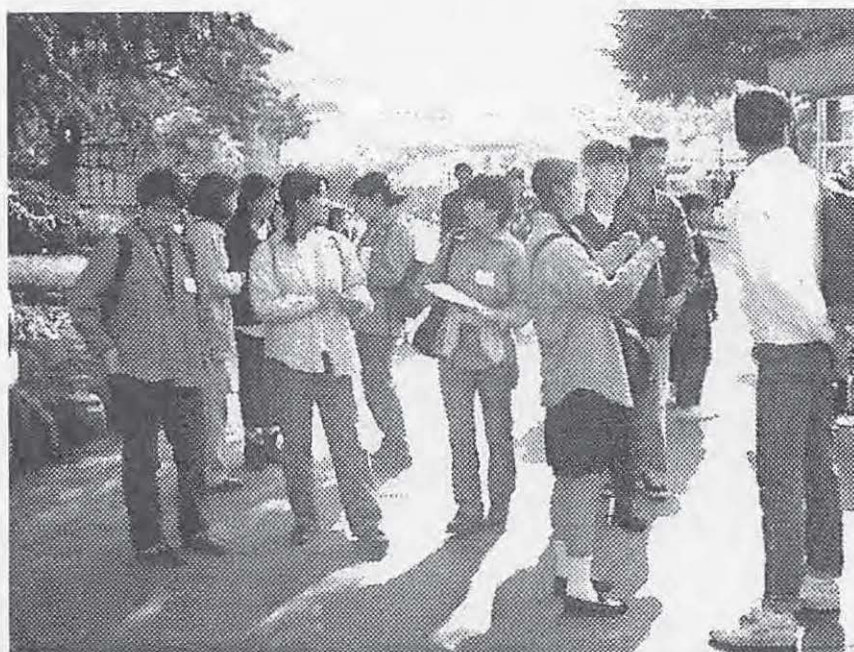
私は11月12日のYOU遊サタデーに参加させていただきました。たくさん的小学生が参加していて、教育学部についてのお話も聞けると、同じ学校の阿部さんから聞いて楽しみにしていました。午前の部では「壁画教室」に参加しました。クレヨンや絵の具、マジックで絵をかくのは久しぶりで、自分も小学生に戻ったようにうきうきしました。一本の筆に何色も重ね塗りをして虹を作った子や、足の裏に絵の具を塗ってペタペタ歩く子、教室いっぱい線路をかく子などいろいろいました。限られた道具でそれぞれの遊び方を考えるとは、さすが「遊びの王様」だと思います。時間が終わる頃には、みんな顔も手足も絵の具だらけになりました。でも、みんな楽しそうで生き生きした顔をしていました。私も、久しぶりに多くの小学生と話ができて嬉しかったです。

午後の部では「教育学部ってどんなところ？」に参加しました。教育学部で学ぶことや、大学生の生活などについての話を聞きました。その中で私が興味を持った事の一つは、学生さんが、子供のカウンセリングセンターにお手伝いに行くというお話です。私も将来は教師になろうと思っているので、その様な経験をして子供の気持ちがわかる様になりたいと思いました。

一日を通して感じた事は、大学生の方々が大変明るく、子供に負けなぐらいのパワーがあるという事でした。たくさん遊び、多くのことを学ぶことができて、とても充実した一日でした。一緒に遊んでくれたみんな、土井先生、大学生のみなさん、阿部さん、ありがとうございました。

（中野西高等学校3年 藤沢 貴子）

4. 資料（平成6年度「信大YOU遊サタデー」の記録）



第3回YOU遊サタデーに参加する高校生たち

第3回 信大YOU遊サタデー

一、一人ひとりを大切に

二、ティーム・ティーチング

三、無事故の災害言語

信大YOU遊サタデー関連の新聞報道

第1期YOU遊サタデーに関連した新聞記事を集めた。それぞれの捉え方の違いなどにより、内容は千差万別だが、YOU遊サタデーの多様性については確認できるものと思われる。

新聞報道以外にも地元テレビ局やNHKによる全国放送での紹介などされている。またラジオ番組では参加し

たキャプテンたちが出演し、若者の思いの丈を述べるなど外部との積極的な関わりを試みている。

月二回の学校五日制が導入され、ますます土曜日の過ごし方が問われ始めてきた点、長野の教育県としてのジレンマや福祉教育というこれからの分野との関わりなど、注視されたい。

- | | |
|-------------------------|------------------|
| 1. 学生自主的に“教育実習”企画 | 信濃毎日新聞 (6.8.22) |
| 2. 小中学生招き自主教育実習 | 信濃毎日新聞 (6.9.11) |
| 3. 地域に開かれた大学を目指し | 週刊長野 (6.9.24) |
| 4. ユニーク講座、好評、教育実践の場にも | 読売新聞 (6.9.28) |
| 5. 「YOU遊サタデー」好評 | 毎日新聞 (6.9.28) |
| 6. 信大YOU遊サタデー8日に | 信濃毎日新聞 (6.9.29) |
| 7. 腕さする未来の先生 | 朝日新聞 (6.10.1) |
| 8. 学生と子どもたちでつくる学遊ひろば | 長野県民新聞 (6.10.1) |
| 9. 子供と交流 熱意深めて | 信濃毎日新聞 (6.10.5) |
| 10. 学校週5日制月2回へ | 信濃毎日新聞 (6.10.7) |
| 11. YOU遊サタデー | 毎日新聞 (6.10.9) |
| 12. けん玉うまくできたよ | 信濃毎日新聞 (6.10.9) |
| 13. 学生も“先生の勉強” | 読売新聞 (6.10.9) |
| 14. 「信大YOU遊サタデー」が大反響 | 文教ニュース (6.10.24) |
| 15. YOU遊サタデーは学びと遊びの体験広場 | 広報ながの (6.11.1) |
| 16. 教育力、地域社会に開く | 日本経済新聞 (6.11.10) |
| 17. 大学開放 子供らは満喫 | 中日新聞 (6.11.21) |
| 18. 教師選ばぬ教育学部生 | 朝日新聞 (6.11.25) |
| 19. 福祉教育の推進取り組みを発表 | 信濃毎日新聞 (6.11.27) |
| 20. 教師の卵たちへ | 朝日新聞 (6.12.3) |
| 21. 第二土曜日を活用 信州大キャンパスで | 教育新聞 (7.1.12) |

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

Web上では非公開

『YOU遊サタデー通信』縮小版

『YOU遊サタデー通信』は平成6年7月19日に『YOU遊サタデー新聞』創刊準備号として初登場した。そして不定期ながらもYOU遊サタデーの様子を伝えるミニ媒体として都合10号まで発行された。

11月15日号に記されている通り、編集・制作には事務局長が独自にあたり、内容的には硬軟取り混ぜるなど雑多な雰囲気を持っている。全号マッキントッシュ・コンピュータによる制作。取り込まれた写真画像も電子スチルカメラを活用し、小規模電子編集実験を実践した。一号分の編集には平均一時間半がかかっている。そのう

ち半分は記事原稿の捻出に割かれているため、レイアウト作業などに掛かる時間はこれまでの編集作業に比べ飛躍的に短いといえる。教材作りといった場面での教育利用にも威力を発揮できそうであるが、発行者としての考えを述べれば、小中学校段階での教材作成への導入はほどほどにした方がよい。手作りの味を十分味わった上での検討を勧める。

発行してきた『通信』の内容については読んでいただき、その時の空気を感じていただくしかない。1ダースと相成らなかったことだけ残念である。

YOU遊サタデー新聞

創刊準備号 (6.7.19) 土曜日に新たな空間
試験的に作ったもの。意外と出来が良いので、続行することにした。

創刊号 (6.7.20) 実行委員会開催される
実行委員会も形として整い始めた頃。写真で遊んでみたりしている。

YOU遊サタデー通信

1994年9月7日号 第二土遊日迫る!!
夏休みが入ったため、久し振りの活動。スタッフ説明会が開かれたとある。

1994年9月10日号 みなさん、おはようございます
第1回当日にリアルタイムで作成したもの。電子スチルカメラが威力を発揮した。

1994年10月24日号 ラストのために
しばし発行をお休みしていた後の復刊号。前2回の様子がまとめられている。

1994年10月26日号 ゆうゆう事典
スタッフ増加に伴い、意志疎通のためにと作ったもの。内輪ウケが多すぎたかもしれない。

1994年11月1日号 土曜日探し
これまでの新聞報道を総ざらいしたもの。見出しが気に入っている。

1994年11月7日号 懐かしき匂い?!
高校訪問についての記事。某校に対してはやや皮肉がきつかったと反省している。スクープもあり。

1994年11月12日号 ようこそ ゆうゆうサタデーへ
第3回の前日にあらかじめ用意していたもの。とにかく無事故で終わってくれとの思いが強い。

1994年11月15日号 時が流れて
作成したもの、実は未発表号。事務局長の完全独り言である。

YOU遊サタデー通信

1994年9月7日号 発行：信大YOU遊サタデー実行委員会 大変だぞ特集

第2土曜日迫る!!

猛暑の夏、隔ただしかった教育実習が終わる再びキャンパス内に活気が戻ってきました。後半戦に向けていると忙しむところだと思えます。でも、忘れちゃいけない戸籍りとYOU遊サタデー。華麗なる第一回が今度の土曜日に開催されます。

9月10日土曜日は朝から小学生を中心として各種のキャンパテンとともに、普設学校では体験できないようなことに挑戦します。当日はキャンパテンを始め多くのスタッフの皆さんの力が必要になります。というわけで本日7日はスタッフ説明会の日、キャンパテンとまではいかないけれど、ぜひ子供たちと企画を楽しみたい、子供たち

を危惧から守りたいという学生有志の皆さんに当日の予定など説明していただきます。

さて、YOU遊サタデー自体が第一回目、初めての試みなので草伝活動など不手際な面も多かったのですが、それでも事前に申し込みをしてくれた子供たちの総数は約40人、当日飛び入り参加してくる子供たちもいるでしょうからもう少し増えると思います。これが一回を重ねる毎にYOU遊サタデーの名前が広がっていき、より多くの子供たちが参加したいと思えるような空間になれば素敵ですね。頑張りますよ。

山口実行委員長の

やるのは君だ

やあ、こんにちは。僕が実行委員長のスーパースター山口です。9月から11月までの第2土曜日、三カ月に渡ってYOU遊サタデーが始まります。

キャンパテンもスタッフも子供たちのために頑張っています。やるのは誰でもない、君

なんだからしっかりやってくれ。じゃ、ぼくもけん玉の講座があるから、みんな協力よろしく。



マスコミ取材殺到

セニョール小谷「スターへの道」休講の真相を探りに？！

【信大教育交際7日】信州大学教育学部キャンパスで9月10日に開催されるYOU遊サタデーに長野のマスコミからの取材が殺到している(らしい)。すでに「週刊長野」は8月20日号にYOU遊サタデーを紹介、「信濃毎日新聞」も夕刊に関連記事掲載している。今後、天下のNHKが準備段階から取材、当日も含めてYOU遊サタデーの活動がプラウイングに

9月のメニュー

- アメリカ人との楽しい英会話
- お弁当箱の袋づくり
- やさしい木工教室
- 自転車大分解
- 宇宙生物「スライム」をつくらう
- ビデオカメラに挑戦
- 小麦粉ねんど・わりばし鉄鍋
- 自分の音楽をつくらう

めざせ好きになれる教育学部

など五明日が現えなくてもいいことあるだろう...
子供たちとの集結サタデー

YOU遊サタデー

YOU遊サタデー通信

1994年9月10日号 発行：信大YOU遊サタデー実行委員会 どうとう当日特集

みなさん、おはようございます



みなさんおはようございます。信大YOU遊サタデーにようこそお越しくださいました。

YOU遊サタデーのお兄さん、お姉さん方はこの日のためにたくさん準備をしてくれました。みなさんが選んだタイトルはなんですか？「宇宙生物スライムをつくらう」ですか？それとも「やさしい木工教室」ですか？みなさんが楽しくできたからキャンパテンやスタッフのお兄さんお姉さんはとても嬉しく思います。

さてさて、多分みんないろいろなものを作ったと思います。キャンパテン以外のお兄さんお姉さんたちもみなさんとともにきれいなものを作っているのびつくりです。

開会式でご紹介したキャンパテンのお兄さんお姉さん、そして一緒に楽しんでいただきたいね。午後に帰って帰ってくださいな。午後に帰って帰ってくださいな。午後に帰って帰ってくださいな。午後に帰って帰ってくださいな。午後に帰って帰ってくださいな。

実行委員長のことば

山口直行

元気に信大キャンパスにきてくれてありがとうございます！みなさんが各課でいっしょにけんめい頑張っているのを見てほくちもともうれい

午後にもいろいろ企画がありまますからぜひ参加してください。そして次のときは友達を誘って来ててください。

みんなのようす

みんなの参加している姿をいろいろと見せてもらいました。楽しんで作ったり遊んだりしているのをお兄さんたちもがんばらな

「小麦粉ねんど」のみんなは小麦粉と酢で作ったねんどを楽しくうにコネコネしてましたね。いろいろな色がつけられるのでカラフルでした。一緒にわりばし鉄鍋もつくって、ゴムをとりはじめました。でも人にむけちゃだめ



「お弁当箱の袋」はキャンパテンと一緒にミシンやアイロンを使って素敵なお弁当の袋を作りました。みんなの楽しそうな笑顔がとても印象的でしたよ。

[午後の予定]

- 11:40 お昼ごはん
- 12:20から 午後の受け付け始め
- 12:50(1:00)から 午後の活動
- 3:10まで
- 3:20から 閉会式

キャプテン・スタッフマニュアル 広報冊子・内部配布物など

YOU遊サタデーの作業予定などを収めた「キャプテン・スタッフマニュアル」は、毎回新たなものが作成され、関係者の手元に届けられた。

その月に設けられた活動リストをはじめ、週間スケジュール、前一週間毎日の予定表、全体会のスケジュールとキャプテン・スタッフ各々への注意事項、そして校内の地図が含まれている。

第1回と2回は、『YOU遊サタデー通信』に同じく、コンピュータで作成したが、第3回は後輩達に仕事を理解してもらい意味を込めて編集作業を任せることから手書きマニュアルとなっている。また、第3回マニュアルにはYOU遊サタデー全体の流れをまとめた資料も追加されている。ここではそれを含めた第3回マニュアルのものを抜粋する。

外部配布用にタイトル一覧と各々の紹介頁を配した小冊子も作り配布した。YOU遊サタデー申し込み方法と活動内容が示されている。申し込みが完了した参加者には「ゆうゆうカード」なる確認のハガキが送付される。これが子ども達にとって当日まで、YOU遊サタデーと自分とをつなぐ糸となる。

活動を経て、子ども達には修了証が手渡される。もちろん活動の成果はでき上がった作品であるし、実際の体験であるが、活動への参加努力を評価する意味で、子ども達それぞれに修了証を用意した。

YOU遊サタデーでは多くのスタッフの尽力が支えとなっているが、仕事の割り振りは難題である。全体としてどんな仕事があるのか、また、どんな仕事内容であるのか全員が把握していなくてはならない。ここでは誘導係が独自に作成した資料を掲載する。このようにそれぞれが能動的に動くことが必要とされる。

当日のタイムテーブルは全員に配られ、それに従って一日を進めていくことが確認される。ここに収録されたタイムテーブルはまだ改良の余地があるが、具体的な行動の見えてくる予定表の存在は強い。

この他にも実施報告や子ども達の感想などが資料としてフィードバックされ、活動の見直しに活かされた。

YOU遊サタデー キャプテン・スタッフマニュアル

YOU遊サタデー週間スケジュール

日別スケジュール

キャプテンへの注意事項

スタッフへの注意事項

YOU遊サタデー当日に至るまでの動き

紹介用冊子

YOU遊サタデーの申し込み方法

ゆうゆうカード見本

各活動紹介

小麦粉ねんど・わりばし鉄砲

クリスマスカード作り

けん玉で遊ぼう(3)

宇宙生物「スライム」をつくろう

修了証見本

内部配布資料

キャプテン・スタッフの皆様へ

YOU遊サタデーマニュアル 誘導係編

タイムテーブル

YOU遊サタデー 週間スケジュール

7日(月) 8日(火) 9日(水) 10日(木) 11日(金) 12日(土)

第8回実行委員会 12:40～ 実践センター201
 受講者への返信 各講座人数確定・発表表
 4:30 キャプテン会議 実践センター104
 (79-7を含む)

4:00～6:00 教材づくり
 プリント教材原本提出

第9回実行委員会 4:30～ 実践センター201
 プリント教材印刷

最終教材づくり(教材の完全)
 まにあわへん...!!

最終準備日
 各自の最終チェック
 会場づくり(4:30～)
 最終ミーティング(5:40～)
 うま...
 時間がはいわー

YOU遊サタデー当日!
 (AM 8:00 集合 実践センター104)
 よし...!
 当日や
 がんばるぞー
 ジョー
 うーきん...!!



7日(月)

第8回実行委員会 12:40～ 実践センター201
 各講座の人数確定・発表
 受講者への返信(三役)

4:30～ キャプテン会議 実践センター104
 9日(水)の第9回実行委員会の打ち合わせをします。
 必ず出席して下さい。

5:00～ 三役打ち合わせ 実践センター104

8日(火)

4:00～6:00 教材づくり、修了証作成
 実践センター104

レイアウト用紙、模造紙、厚紙、マジックペン、のり、
 はさみ等は実践センターに用意してあります。
 教材が出来たら各講座用の段ボール箱の中に入れてください。
 プリント教材原本提出 5:00 厳守

YOU遊サタデー当日に至るまでの動き

キャプテンの募集 (企画募集)

↓
 実行委員会編成 三役選出
 目標・意義・スローガン etc の確認

三	役	キャプテン	スタッフ
各講座の紹介冊子の作成 ↳ 各学校配布 案内文 (教師用、子ども用)		紹介用の原稿作成 (時間帯・場所・対象) (人数制限・もしも)	
		相談 打ち合わせ	
参加者募集 マスコミ関係への連絡 (公報活動) マニュアル作成 (スケジュールの決定)			募集
申し込み受付 電話応対 往復ハガキ ← 返信ハガキの印刷		授業作成 添削・返却	
	遅れた場合 の電話でいく	提出	
賀向・向いあわせに対する対応	役割分担		
あいさつまわり (学生係、事務、教員各位) 生協・保健室へおねがい			打ち合わせ
キャプテン・スタッフの名簿作成 (名前、住所、tel、学年学科)			
参加者の名簿作成 (各講座ごとに記入) (名前、住所、tel、学校学年)		現状報告 (人数 etc)	
実行委員会の開催 この時に配るプリントの作成		開催の連絡	
	参加		
名札づくり (キャプテン、スタッフ、参加者用) 修了証印刷、記名、押印 看板づくり たすき、 模造紙 → 講座一覧表、当日スケジュール 各タイトル名 (教室入口及び受付、校舎掲示) 校内地図、標識、トイレ表示	提出	最終教案作成	
各講座のボックス (教材入れ) 作成 アンケート作成	提出	教材づくり	打ち合わせ
		プリント教材原稿作成	
テントを借りる手配、その設営 本部、南南会式場の準備、設営 各教室の準備、安全チェック 教室入口、校舎、校舎周辺への模造紙の掲示		印刷	
YOU遊サタデー 当日			
アンケート回収・集計 写真現象、整理、販売 反省点の確認、当日の出席状況の分析		実践記録執筆	

YOU遊サタデー参加申し込み方法

あなたが参加したい企画がもしあったら、ぜひこれから説明する要領でもうしこんでください。

参加したいものがあったら **往復ハガキ** で申し込みます。

なにも 書かないで	<input type="checkbox"/> 380 往 長野市 信 西長野6-0 信州大学 教育実践センター ゆうゆうサタデー係	希望タイトルの 番号と名前 参加日付 自分の住所 氏名、学校名学 年、電話番号	<input type="checkbox"/> ??? 返 信 自分の家の 住所 氏名
--------------	--	--	--

表

裏

申し込み先住所： 千380 長野市西長野6-0
 信州大学教育実践センター
 「ゆうゆうサタデー」係り
 電話番号 0262-37-6127

上の例のように往復ハガキに必要事項を書いてください。返信用のハガキはこちからの連絡用ですので自分の住所と氏名だけを書き、裏は空白にしておいてください。

申し込みの月、何がやりたいのかを質問しているものがありますので一覽表の注意事項を確認するようにしてください。

申し込み切日： 9月分 9月3日(土) 必着
 10月分 10月1日(土) 必着
 11月分 11月5日(土) 必着

その他

当日は、大学生協が開店していますので昼食時に利用できます。お弁当持参もかまいません。参加者みんなで一緒に食べることができます。

駐車場について：大学が所有する駐車場がありますが、多数の車を収容することは困難です。なるべく公共の交通機関か、外部の駐車場の利用をお願いします。

YOU遊サタデーに関するご不明な点は問い合わせを歓迎しています。
 実践センター(土井) 0262-37-6127

ゆうゆうカード

YOU遊サタデーからのお知らせ

お申し込みありがとうございます。あなたが参加するのはこの下のタイトルです。覚えておいてください。そして忘れ物をしないように気をつけてください。それでは会場を待っています。

タイトル

持ち物

集合日時： 11/12 (第2土曜日)

9:00 12:40

集合場所： 信州大学の正門から入ったテント

当日はこのハガキを持ってきてください。
 わからないことがあったら……

千380 長野市西長野6-0
 信州大学教育学部実践センター
信大YOU遊サタデー 係

でんわ：0262-37-6127

タイトル: 小麦粉ねんど・わりばし鉄砲

日	9/10	10/8	11/12
午前		○	○
午後			

講師: 坂本真哉 (国語 3年)
奥原克水 (国語 3年)

対象: 小学4年生以下
20名程度

身近にある「小麦粉」を材料として
ねんどもつくりまます。自分の好きな
色をつけて、面白い形にしていく
ことができます。
また、わりばし鉄砲の簡単な作り方
もお教えします。百発百中の鉄砲が
できる……はずですよ



講師: ありません。

内容

いつも目にしていっているもので、楽しく遊べるよ。
どんな形にするかは、あなた次第！
セラーマンでも、ブルースワットでも、
お好きなものを作ってみよう。
わりばし鉄砲も一緒につくってみよう。

キャラクターの
おせじ

タイトル: クリスマスカード作り

日	9/10	10/8	11/12
午前			○
午後			

講師:

宮尾 由美 (音楽科 4年)
小学生 20人

内容

は、は、や、花、木の葉などを用いて、押し花
風のカードを作ります。ビーズでふろどり
したり、色砂で字を書いたり、いろいろと工夫し
素敵なカードを作りましょう。仕上げには、
木工用ボンドを用います。また、シール作りも
したい人は、下敷を拜、こまこ下こいね。

講師: 自分で使いたい「花や、は、は」スッポ、ビーズ、はさみ、ペン

講師: シール作りもしたい人は、下敷、水性ペン

キャラクターの
おせじ

とても簡単に、素敵な「クリスマスカード」が出来ます。
自分だけのオリジナルカードを作って、友達に贈ろう。

No. 16

タイトル: けん玉で遊ぼう③

11月	9/10	10/8	11/12
午前	○		
午後			○

11月

山口直行
(数学科4年)

11月

けん玉で遊ぼう②を
やった人 20人

11月

9/10

10/8

11/12

11月

田中 忍
N館303号室 (理科3年)

11月

小学生以上
10人

タイトル: 宇宙生物「スライム」をつくらう

11月	9/10	10/8	11/12
午前	○		
午後			

11月

田中 忍
N館303号室 (理科3年)

11月

小学生以上
10人

タイトル: 宇宙生物「スライム」をつくらう

内容

「けん玉で遊ぼう③」では、とめけんとも(やめ)の技術をさらにのびし、新しくふるりけんにも挑戦します。



けん玉

11月

内容

洗たくのりを使て、「スライム」をつくら、てあそぼう。すごく簡単にして、みるよ。



お金 (100円)

11月

この「けん玉で遊ぼう③」まで、くれれば、お母さんやお母さん、おともだちに自慢できるようになるよ。
い、い、いに楽しくやろう。

けん玉で遊ぼう
11月

けん玉で遊ぼう
11月

使う材料は全て家庭で手軽に手に入るもので。作り方を覚えて、家でお母さんにも作ってあげよう！
ちんみに食べ物(おはきいので(おはきい)にできるんだね)。決して口のの中に入れてはいけません。



修了証書

殿

あなたは 信州大学で
行われたゆつゆつサタデー
の
熱心に受講され優秀な
成果を修められました
よここに証します

平成六年 月 日

信大ゆつゆつサタデー
キアアテ

キャプテン・スタッフの皆様へ

平成6年10月24日
個大YOU遊サタデー実行委員会

本日はお集まり頂き有り難うございます。皆様にそれぞれ役割を分担して頂き、11月12日の第三回ゆうゆうサタデーを運営したいと思っております。時間帯ごとに次のような仕事がありますので簡単に説明します。

8:00~9:10

開会式が始まるまでに以下の仕事があります。

受付係 (8名以上) : 子どもたちの名札を渡す。当日参加の子どもへの対応。

誘導係 (3名以上) : 正門に立ち、案内をする。

駐車係 (5名以上) : 駐車場への誘導・整理を行う。

#写真記録係 (2名以上) : 授業の様子などを写真撮影する。新聞づくりなど。

#接待係 (2名以上) : 控え室での湯茶の接待を行う。

#は授業中も活動してもらおう。

9:40~11:40 (2時間)

各授業のキャプテンと共にチームティーチングを行う。

12:20~12:40

午前と同様に以下の仕事があります。

受付係 (5名以上)

誘導係 (5名以上)

駐車係 (5名以上)

#写真記録係 (2名以上)

#接待係 (2名以上)

12:50~2:50 (2時間)

各授業のキャプテンと共にチームティーチングを行う。

3:20~3:50

全員で後片づけをします。

4:00~6:00

反省会と打ち上げ (生協を予定)

YOU遊サタデーマニユアル

読秀 係 編

1・メンバー紹介

係長◇4年理科・佐藤寛之 (個大あけぼの寮 34 3682(呼))
係員

(午前8:00~9:20)	(午後12:20~12:40)
◇3年数学科・松永泰幸	◇3年数学科・松永泰幸
◇3年特殊科・原伸生	◇3年特殊科・原伸生
◇4年家庭科・山本千絵	◇4年家庭科・山本千絵
◇3年数学科・岩村彩	◇3年数学科・岩村彩
◇4年英語科・森泉哲	◇3年家庭科・佐藤恵理
◇4年理科・坂野和久	◇3年家庭科・井上消美
◇4年教育・渡辺佳子	
◇3年社会科・藤田智子	

2・仕事場所

- ①教育学部正門前 (4~6名)
- ②教育学部図書館前 (2~3名)

3・仕事内容

正門前……

☆YOU遊サタデーにくる人に受付のテントを示す。

☆車でくる人に対しては一度車を止めて親も参加するか確認する。

・親も参加する場合はそのまま駐車場へ入ってもらおう。

・親が参加しない場合は子供だけを降ろして帰ってもらおう。

……図書館前……

☆受付を終えた子供(親)に図書館2階の場所を示す。

補足…当日、誘導係は「たすき」をつけます。

YOU遊サタデー(11/12) タイムテーブル Time Table

☆★ 三役スタッフ
★ 本部スタッフ
● キャプテン
○ スタッフ

7:30	<p>☆☆ 三役集合 J104へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタッフ長も含む ・打ち合わせ ~一日の流れの確認など ・教室開け ~N、S、J、図2F ・看板設置(二つ) ・テント設営 ・朝ご飯の準備
8:00	<p>☆☆●● キャプテン・スタッフ集合 J104</p> <p>☆☆●● 直前ミーティング</p> <p>~食事しながら連絡事項など</p>
8:10	<p>会場準備</p>
8:25	<p>☆☆●● 各教室、本部受付などの最終チェック</p> <p>○ 各キャプテンは順次終了次第~8:45までに図書館2階へ移動し待機</p> <p>★ スタッフは配置につく</p>
8:30	<p>★ 受け付け開始</p>
8:45	<p>○ キャプテンは図書館2階に</p>
8:50	<p>閉会式会場(図書館2階)へ参加者入場開始</p> <p>☆ビデオ上映をする</p> <p>受け付け終了</p>
9:00	
9:10	<p>☆☆●● 閉会式スタート</p>
9:35	<p>●● 各教室へ移動</p>
9:40	<p>午前の部</p> <p>この時間中、★本部スタッフには次の仕事がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教室へ回る ・名簿のチェック ・人数の確認 ・当日参加の修了証作成(配名など) ~各教室に11:00までに待っていていく ・保護者への対応 ・取材への対応 ・写真記録、ビデオ記録など ・授業進行、終了具合の見回りチェック ・本部スタッフは早めに昼食をとる

11:40	<p>お昼ご飯</p> <p>● スタッフは生協でお昼をとる子どもを誘導する</p>
12:00	<p>☆○ 午後のキャプテン集合 本部テントへ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連絡事項の伝達
12:20	<p>★● スタッフは配置につく</p>
12:20	<p>★ 午後の受け付け開始</p>
12:40	<p>★ 午後の受け付け終了</p>
12:50	<p>午後の部</p> <p>★午後の部の時間は午前の仕事と共に次の仕事も加わる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・午前使用した教室のチェック ~片づけがされているか タイムトルは少し 戸籍まわりはどうか ・アンケートの回収・管理 ・会場片づけの準備 ・閉会式の準備 <p>閉会式会場(図書館2階)へ参加者移動開始</p> <p>● 子供たちを誘導</p>
2:30	
2:50	
3:00	<p>☆☆●● 閉会式 図書館2階</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各活動の成果発表 ・閉会のことば
3:20	<p>☆☆●● 見送り・片づけ開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ・終了次第J104へ集合
4:00	<p>☆☆●● 反省・打ち上げ会</p>

あとがき

「信大YOU遊サタデー」は、大学の名をもって社会に働きかける教育活動である以上、体験的学習の指導においても単なる遊びやお祭り騒ぎに終始するものであってはならない。研究的な姿勢をもって実践し、教育実践から得たことを学術的にまとめていく努力がなされなければならない。これが我々の立場であり、学生達にも常に語りかけてきたことであった。このような課題意識のもとに編集されたのが本小冊子である。

第2土曜日は大学生にとっても休日である。しかし、多くのレポートや試験が課されている上に、サークル活動や家庭教師等の様々な課題をかかえて、とても忙しい生活を送っているのが学生達の現実である。YOU遊サタデーを担った学生達は、そのすべてをやりくりしながら、単位がもらえるわけでもなく、アルバイトになるわけでもないのに、指導案の構想に始まって、当日の悪戦苦闘、そして実践の考察に至るまで見事にやり遂げてくれた。この真摯な努力に対して、まずもって深く深く敬意を表したいと思う。

言うまでもなく学校の主人公は児童・生徒であり、大学の主人公は学生である。学生は現代の最先端を呼吸し、将来に想いを馳せながら鋭く問い、学び、そして悩みと格闘している。その心をどのように掴み、どのように関わって、未来を切り開いていくか。この一点に、我々は心を砕いていかなければならないのではなからうか。「もっと子ども達と関わりたかった」という学生達の声が、一つの形となったのがこのYOU遊サタデーである。学生達の実践に未熟さが伴うのはむしろ当然である。否、未熟さの故に真剣さと情熱が溢れている。学生達が実践を通して考察した行間から、教育実践に立ち向かう深い志が珠玉の輝きとなって伝わってくるように感ずるのは私一人ではあるまい。どの授業においても、初対面で、しかも、学年もまちまちな子どもたちをわずかな時間のうちに掌握し、飽きさせないように一人ひとりに対応しながら、わかるように何度も説明し、今日は来て良かったと喜んでもらえる授業になるように獅子奮迅の努力がなされていた。子ども達の喜びを我が喜びとするために全力投球している学生達の生き生きと輝いた姿によって、教育学部キャンパスが蘇生した。この他者の喜びを我が喜びとしていこうという深い志の中にこそ、教師としての実践力も豊かに創造されていくのではなからうか。参加してくれた子ども達から寄せられた「楽しかった」という率直な声は、子ども達とキャプテン・スタッフの学生達が共に自分を忘れて体験学習に夢中になって取り組んだ証といえよう。この小さな経験を今後の教育実践研究への確かな一歩として、更に精進していただきたいと思う。

そもそも、YOU遊サタデーにつながる最初のアイデアを提供して下さったのは、教育実習委員会の市澤要三教授であった。また、この企画が実現したのは一に懸かって漆戸邦夫教授（センター長）のお蔭である。さらに、当日の運営にあたっては学生委員長の前川圭吾教授ならびに研究情報・広報委員長の山田敏教授の温かいご理解とご協力を得た。また、参加した子ども達の安全のために、丸山起巳事務長から種々のご配慮をいただいた。ここに厚く御礼申し上げるものである。

最後に、本冊子の編集にあたっては、次の学生たちが教育工学演習室のコンピュータに向かい、一太郎での入力作業に精力的に取り組んでくれた。心から感謝申し上げます。

◎ 山口直行 ○ 林 向達 横川瑞恵 渡辺一博 沢田良子 大谷美穂 原 伸生
芦田 恵 高橋貴子 福士 慈

編集担当 センター専任教官 土井 進

平成6年度
「信大YOU遊サタデー」の実践
－体験的学習の指導による実践的力の形成－

平成7年3月31日 発行
編集者 第1期YOU遊サタデー実行委員会
発行者 信州大学教育学部
附属教育実践研究指導センター

〒380 長野市西長野6-10
TEL 0262(37)6127
FAX 0262(34)5540